

「千四百年の夜を越えて、君と～古都に咲く鎮魂の恋～」

作・金森努

呪われた宿命に抗う恋が、神々を動かす

古都・奈良を舞台に、呪詛に囚われた恋人を救うため奔走する青年。

閉ざされた運命を打ち破る鍵は、祈りと神事、そして切なる愛。

臙げな闇の先にあったのは、二人を見守る神々の奇跡――

血塗られた千年の因縁を超えて響く、熱い想いの物語。

Prologue 紅葉にけふる古都、はじまりの記憶

黒い雲が夜空を覆い尽くす。どこからともなく上がる炎の赤が、闇の輪郭を歪ませていた。そこかしこに散らばる破片のような剣の残骸と、燃え落ちる建物のきしむ音。血の匂いが、鼻先を突き刺す。

――斬り結ぶ武者たちの叫び。焼け焦げた柱の向こう側では、刀が火花を散らし、何かを失う悲鳴が轟く。

「……やめろ……！」

気づけば、穂積健吾（ほづみ・けんご）は声にならない声を上げていた。荒れ狂う戦場の真ん中で、身体が凍りついたように動かない。切り結ぶ刃が闇を裂き、誰かが苦しげなうめき声を上げ、紅蓮の炎が空を焦がす。

周囲から聞こえるのは“物部を絶やせ”“仏を崇める我らに抗うな”という混じり合った怒号。だが、どちらが敵で、どちらが味方なのかもわからない。

血ぬられた刀が健吾の足元に落ち、地面が濡れている。焦げた木片が舞い落ち、咄嗟に腕をかざすが、熱さの感覚もなく、ただ息苦しさがこみ上げる。

どこか遠くで、誰かのすすり泣きが聞こえたような気がする――。

そこで、ぷつりと意識が切れる。健吾は唐突に目を覚ました。

しっとりとした汗を含んだシャツが背中に張りつき、胸はまだ早鐘を打っている。ビジネスホテルの天井がぼんやりとした光を放ち、ベッド脇の時計は朝の五時半を指していた。

「また……同じ夢か」。物部と聞こえたから、飛鳥時代、約千四百年前の戦いの夢ということになるのだろう。

寝苦しさを振り払うように、健吾はゆっくり上半身を起こす。昨夜、奈良に着いたばかりだというのに、まるで歓迎されない悪夢のお出迎えに、苦笑する気力もわからない。

冷たい水で顔を洗い、ふと鏡に目をやると、やつれた自分の顔が映った。官僚を辞めたばかりの疲労と迷いが、そこに濃く刻まれているようだった。

――どうしてこんな夢ばかり見るのか。激しい戦場、燃える仏像、血塗れの刀……。

子どものころから断続的に見てはいたが、最近ひどくなっている。もしかしたら、この奈良という土地が夢を刺激しているのかもしれない。

スマートフォンを手にして、東京にいる祖母から夜中に来ていたメッセージを確認する。

「奈良にちゃんと着いたかい？ 落ち着いたら連絡しておくれ」

高校時代からずっと祖母に面倒を見てもらっていた。父は大学教授で民俗学を研究していたが、健吾が官僚になった直後、母と共に交通事故で亡くなっている。

そのころ聞かされた「うちの穂積家は、物部氏につながるかもしれないんだ」という父の遺言めいた言葉は、当時は半信半疑だったが……いまはなぜか脳裏に張り付いて離れない。

「やっぱり……ここまで来たからには、父さんの足跡を辿るしかないかな」

ベッドから立ち上がり、窓のカーテンを開けると、奈良の街が薄青く染まっていた。遠くの山並みがかすかに浮かび、幾重にも重なった紅葉がぼんやりと朝靄に溶けている。

東京とは違う、しんとした空気。聞こえるのは、ビルの向こうから流れてくるかすかな車の音と、朝を迎える気配だけ。鹿の鳴き声がかすかに届くかは分からないが、確かに空気が違う。胸の内のざわつきが、どこか落ち着かないまま刺激されていく感じがあった。

これから数日、奈良に滞在して“先祖探し”とも呼べる行動を起こすことになる。官僚を辞めた直後に、自分でもよく分からない衝動で来てしまったが——（父さんが途中で終えた民俗学の研究、それに物部の血筋……本当に俺と関係あるのか？）

そんな問いを抱えながら、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、一口含む。少しだけ身体が目覚めた気がした。

「よし……まずは朝の散歩だ。コーヒーでも飲める店があるといいけど……」

軽く準備を整え、財布とスマートフォンをポケットに入れる。時計は六時を少し回ったところ。地元の人には出勤や通学にそろそろ動き出す頃だろうか。

この街に来て初めての朝を満喫するには、歩いてみるのが一番いい。紅葉の名所や古い寺社は、昼間にゆっくり訪れればいいが、早朝の古都には別の顔があるはずだ。

シャツの襟を直し、ジャケットを羽織ってホテルのドアを開ける。外へ出ると肌を刺すような冷気が一気にまとわりつき、目が覚める思いだ。

ビルの合間にちらりと見える空は灰色を帯びているが、やがて東のほうはずいぶん白んでいる。地上では落ち葉が路肩に集まり、清掃員の人影が通りを掃き始めている気配がした。

何気なく大通りを離れ、細い路地へ足を向けると、木造の古い建物が軒を連ねているのが目に入る。新しめのコンクリート造りの建物の合間に、唐突に町家を思わせる古宅が挟まっているのも奈良らしい光景だ。

観光客向けの土産店らしきシャッターはまだ下りたままだが、どこかで誰かが朝の仕込みを始めているのだろう。香ばしい湯気や音がほんのり漂ってきて、思わず足を止める。

(……こういう路地を歩くの、久しぶりだな。東京の味気ないビル街とは違う、落ち着いた雰囲気がある)

古い瓦屋根の隙間から、薄い金色の日差しがこぼれ始める。よく見ると道路脇には柿の木が植わっており、オレンジ色の実が風に揺れていた。そろそろ収穫の終わりかもしれない。

少し鼻をすすると、乾いた冷気のなかに甘い香りが混じる気がした。ふと胸にこみ上げるのは、幼いころに父や祖母と話した断片的な思い出。あのころは「穂積家の先祖が奈良にルーツがある」なんて聞いてもぴんと来なかった。

(でも、官僚という枠から外れた今、こうして自分の過去や家系を見つめ直すことになるとは……)

どこか心細さを覚えながらも、健吾はその不安を振り払うように歩を進める。悪夢の中の戦場の残像がまだ瞼の裏に焼きつき、胸をきしませるが、奇妙な高揚もある。

やがて小さな十字路に出たとき、看板が目に入った。まだ開いてはいないが、町屋を改装したとおぼしき喫茶店の文字が見え、“7時開店”と書かれた札が掛かっている。

(いいな……こういう店で、のんびりコーヒーを味わえる日々が過ごせればいいんだが……)

心の中に、ささやかな期待が広がる。東京のように急かされる生活ではなく、奈良の静かな空気を感じながら過ごす時間——そこにこそ、今の自分が求める安息や手がかりがあるかもしれない。

(そうだ……父が未完だった研究の続きを、もし俺が辿るなら、この街の図書館や神社仏閣を巡って、物部氏の痕跡を探すんだ。そうすれば、あの“血塗れの戦場”の悪夢の意味もいつか分かるかもしれない)

そう思うと、踏みしめる路地の石畳がどこか頼もしく感じられる。古都の街並みは、朝の光を受けて少しずつ色彩を帯び、瓦屋根から立ち昇るような薄い湯気に紅葉の赤が差し込み始めていた。

高いビルの谷間ではなく、低い家並みの向こうに山の稜線が浮かぶ。この静かな街には、平城京ができて以来、千三百年以上もの歴史と伝承が息づいている。心の底で、いつか自分の“宿命”と呼べるものと邂逅するような胸騒ぎがした。

「ここで、俺はいったい何を見つけるんだろう……」

問いかけに答えるものはない。ただ、朝の冷たい空気だけが、千三百年を超える古都の神秘をそっと語りかけるように沁み込んでくる。

遠くから微かに鹿の鳴き声が聞こえるのは気のせいだろうか。

時間が経てば、きっと店も開くだろう。どこかで素敵な一杯のコーヒーにありつけるかもしれない。そんな予感を胸に、健吾は歩き続ける。

紅葉にけぶる古都の夜明けが、ひそやかに“新たな物語”の幕を上げようとしていた。

このあと彼は知ることになる。血と因縁の宿った“物部”の名が、卜部家と絡み合う呪いを解き放つまでの長い闘いを……そして、その先に待ち受ける運命の出会いを――。

Chapter 1 朱に染まる街と、はじめの出会い

1. 紅葉色づく朝と喫茶店「古都のしじま」

十月下旬の奈良。朝の空気は、ほんのり湿り気を帯びつつも軽やかで、街の通りはまだ人影がまばらだ。穂積健吾はビジネスホテルを出ると、薄紅に染ま

りかけた木々を眺めながら歩いている。

前夜に奈良へ着いて一泊。今朝はすっきりした気分で目覚めた——と言いたいところだが、実際には少し胸に残る妙な重さも拭えない。先祖のことや、自分自身の進路。昨日の夜の夢、頭を埋め尽くした雑念は簡単には晴れなかった。

そんな気持ちを断ち切るように、朝の散歩がてら向かったのは、昨夜ネットで見つけた小さな喫茶店。「古都のしじま」という落ち着いた名前が妙に気になっていた。

ガラス戸を開けると、ちりん……とウィンドチャイムが短く揺れて、奥のカウンターでドリップしていた初老のマスターが顔を上げる。店内には古い木の梁（はり）が張り巡らされ、アンティーク調の照明がほんのりと床を照らしている。

「いらっしゃいませ」

マスターが微笑み、健吾は「おはようございます」と軽く会釈して店内を見回す。奥の席にはまだ客の姿はない。おそらく開店して間もないのだろう。

カウンターの隅でメニュー表を整えている女性に目が留まった。白いブラウスに黒のエプロン姿で、まだあどけなさの残る顔立ち……いや、どこか儂い雰囲気を感じている。

（……あれ？ ちょっと具合でも悪そうな感じ……？）

彼女はテーブルに手をつき、微かに息を吐いているようにも見えたが、すぐに健吾の視線に気づいたのか、バツが悪そうに軽く頭を下げる。

「コーヒーをいただけますか」

テーブルに腰を下ろしながら注文すると、彼女は「かしこまりました」と控えめな声で応じ、マスターに合図を送る。健吾はその横顔をちらりと見たが、やはり血色がよくないように思える。

やがて、マスターが丁寧にネルドリップで淹れたコーヒーをカップに注ぎ、彼女がそっと運んでくる。ふわりと立ち上がる香りに、健吾の鼻腔と心がいっぺんにほどけるようだ。

「……ありがとうございます。温まりそうですね」

「どうぞ、ごゆっくり……」

そう言いつつ、彼女は微かに胸を押さえ、カウンターへ戻る。健吾は“何か

持病でもあるのだろうか”と心配になったが、初対面で突っ込むのは憚（はばか）られる。

コーヒーを一口すすり、その深い苦味と柔らかな酸味に安堵する。ビジネスホテルのインスタントコーヒーとは別次元の旨さだ。心がほどけるように楽になっていくのがわかる。

（東京で官僚を辞めて、こうして奈良を訪れて……何を探してるんだろうな、俺）

そんなことをぼんやり考えているうちに、二杯目を注文するかどうか迷ったが、まだ朝早いこともあり、店も落ち着かないかもしれない。いずれにせよ、もう少し街を散策したい。

「ごちそうさまです。美味しかった……」

会計を済ませると、彼女が小さく一礼し、「ありがとうございます」と声を絞り出すように応じる。健吾はその表情にどことなく影が差しているのを見て、言いようのない切なさを感じた。

結局、彼女の名前すら知らないまま店を出る。だけど、あの儂げな雰囲気不思議と胸に焼き付き、足を進めるたびに気になってしょうがない。

（大丈夫かな……）

店の看板には“古都のしじま”と柔らかな書体で書かれ、鉢植えの小さな紅葉の苗が朝日に揺れている。健吾は少しだけ振り返り、その扉の奥を見つめてから歩き出した。

2. 鹿せんべいと大仏殿——旧友・佐久間との再会

朝のコーヒーでリフレッシュできたのはいいが、微妙な胸騒ぎを持って余しつつ、健吾は近鉄奈良駅前へ向かう。そこで合流する予定があるのだ。

合流相手は、佐久間遼太郎（さくま・りょうたろう）。中学・高校の剣道部でともに汗を流した親友であり、大学進学後も縁が続いている数少ない仲間だ。彼は医師の家系ながら、敢えて医学部を蹴って医療系ベンチャー企業を立ち上げ、今ではそこそこ成功しているという。

「おーい、健吾！」

声が聞こえ、振り向くと、佐久間が派手めなジャケットをひらりと揺らして近づいてくる。相変わらずの明るい笑顔に、健吾も自然と顔がほころんだ。

「久しぶり。お前、東京じゃ忙しそうなのに、奈良まで出張とは珍しいな」

「商談半分、観光半分ってところ。いっそ気分転換してえし……で、お前を呼び出したわけよ。官僚を辞めたって聞いて以来、ちゃんと会ってなかったからな」

健吾は肩をすくめ、「まあ、組織に合わなかっただけだ。お前に言わせれば勿体ないんだろうけど、どうもああいふ縦割りの世界は性に合わなくてな」と苦笑いを返す。

佐久間は「そかそか」と頷き、「なら一緒に奈良観光でもして、ゆっくりしようぜ」と手を叩く。

「……一応、俺、奈良に来たのは観光ってより“先祖探し”みたいな理由なんだけど」

「へえ、相変わらず渋いな。まあいいだろ、俺も今日は昼までは暇なんだ。ほら、せっかくだから鹿に会いに行こうぜ」

そんなわけで向かったのは、奈良公園。歩いていくと、芝生の上に何頭もの鹿が佇んでいる光景が広がり、朝の光を受けて鹿せんべいを売る露店に列ができてはじめている。

「お、いたいた。けっこう人が多いんだな」

「外国人観光客とか、こんな朝から来る人もいるらしい」

健吾が軽く鹿せんべいを買って差し出すと、すぐに鹿の一団が寄ってきて、佐久間ともども袋をつつかれたり頭を舐められたり大騒ぎだ。

「ギャッ！」と悲鳴を上げて佐久間がゆうに50センチは飛び上がった。鹿せんべいを与えるのを焦らせすぎて、キレた鹿が佐久間の尻を角で突き上げたのだ。

「うおっ痛え……鹿、なんて凶暴な動物なんだ！本当に神様の遣いなのか？」「わはは、逃げ場ないんだけど！」

と、久しぶりに見る光景に笑い転げながら、二人は芝生をくるくると回り、そこへ他の観光客がカメラを向ける始末。鹿の熱烈な歓迎にひとしきり翻弄され、ようやく落ち着く頃には佐久間の派手なジャケットに鹿の鼻水が付いてい

た。

「はあ……なかなかやるじゃねえか。鹿、侮れんな」

「鹿せんべい持ってたら余計だろ。まあ、このくらいは想定内ってことで」
ふたりは苦笑しながら、なおも公園内を奥へ進む。すると、正面に見えてくるのは東大寺の大仏殿。大きな屋根が歴史の風格を漂わせ、南大門の仁王像が厳めしく観光客を出迎えている。

「やっぱ奈良つつたら大仏様も外せないでしょ？」

佐久間が得意げに言い、健吾は「ああ、まあそうだな」と相槌を打ちながら拝観券を買う。堂内はまだ混み合っていないが、それでも外国人ツアー客らしき一団がカメラを構えている。

大仏殿の広い内部に足を踏み入れると、巨大な盧舎那仏が金色の光背を背にして鎮座している。

「おお……やっぱすげえや。こんなでかかったっけ？ ちょっと感動するな」

佐久間が目を輝かせて興奮する一方、健吾はその仏像の荘厳さを目にしても、何故か胸に違和感が走るばかりだ。

「……まあ、すごっちゃすごいんだけど……あんまり、ありがたみは感じないんだよな。なんでだろ」

「え？ お前、仏像とか興味ない系？」

「興味がないわけじゃない……ただ、俺んちの先祖がさ、仏教排斥の物部の末裔かもしれないって父に聞かされて、変な先入観があるのかもな」

口に出すと、より一層複雑な感情が湧き上がる。中学や高校の歴史でも習った“蘇我氏と物部氏の対立”、あれが実際の先祖の話になる可能性がある。

「物部って、神道を守る派閥だったんだろ？ じゃあ仏さまを拝むの、居心地悪いとか？」

佐久間は興味津々だ。

健吾は気まずそうに肩をすくめ、「かもな……でもまだ確証もないし。父が民俗学者だったんだけど、調べる途中で事故に遭って亡くなって……俺も詳しいことは知らないんだ」と言葉を濁す。

「あ……そだった。悪い、変なこと聞いちゃったか」

「いいんだよ。今こうして奈良に来たのも、少し父の足跡を辿りたい気持ち

がある。官僚辞めてフリーになったし、時間はたっぷりあるからな」

大仏殿を一通り巡ったのち、外へ出る。澄んだ秋空に屋根が映え、立ち込める少し冷たい風が心地よい。佐久間は「昼飯どうする？」と尋ねる。

「そうだな……悪いけど、俺はもう少し街を歩いてみたい。散策に飽きたら連絡するよ」

「おお、了解。じゃあ俺もしばらくしたら、クライアントとの打ち合わせがあるから、一旦別れよう。夜にでも飲もうぜ」

そう言って佐久間はにやっと笑い、「あと、うちの会社の話も忘れんなよ？」と追い打ちをかける。健吾は苦笑しつつ手を振り、佐久間の背中を見送った。

3. 古都の町屋カフェで、再びの偶然

佐久間と別れ、健吾は奈良町エリアへ向かう。古い町並みが色濃く残る路地は観光地としても人気が高く、細い路地には地元の人が営むギャラリーや雑貨店、和雑貨の店が所狭しと並んでいる。

(さっきの喫茶店の女性、少し元気になってるといいんだけど……)

脳裏に浮かぶのは、朝の「古都のしじま」で見かけた彼女。半日も経っていないのに、なぜか気になって仕方がない。

石畳の路地を少し歩くと、「甘味処・花かがり」という木の看板が目に入る。町屋造りをそのまま利用した趣ある店構えが、妙に居心地よさそうだ。

暖簾をくぐってみると、土間から座敷へ上がる昔ながらの作りで、靴を脱いで畳へ上がるスタイル。何やら落ち着く匂いがする……と、ふと、奥の席に見覚えのある後ろ姿があった。

(あれ……？ 朝の彼女、だよな)

黒いロングスカートと淡い色のカーディガン。その肩越しに見える横顔が、まさにあの夢げな女性だ。彼女はカップを両手で包み込むように抱え、少し顔を伏せている。店内はあまり混んでいないため、一瞬こちらに気づいたようで、視線が合う。

「……あ……」

ちょっと驚いたように目を丸くする彼女。健吾も思わず会釈して近寄る。

「さっきの喫茶店で……、少しお話しましたよね？」

彼女は戸惑いを浮かべつつも、やがて小さく笑みを返す。「……はい、今朝はどうもすみませんでした。体調が……」

「いやいや。むしろ、なんか気になってて……。ここ、隣座ってもいいですか？」

彼女は少し頬を染め、「ど、どうぞ……」と小声で答える。遠慮がちに席を詰める仕草が微笑ましく、健吾も自然に緊張が解けていく。

「俺、あんみつ頼もうかな……甘いもん好きで」

店員に注文を済ませると、彼女も追加で白玉入りぜんざいを頼む。お互いに笑いあいながら、注文を終えたところで、健吾は声を低めて切り出す。

「朝は大丈夫だった？ 貧血っぽく見えたけど……」

「ええ、だいぶ楽になりました。私、もともと体が弱くて、朝方は特にフラつくんです。ご心配かけてすみません」

その言葉には、諦観に近い響きがある。健吾はなんとか話題を変えつつ、彼女の名前や住まいなど、当たり障りのない会話を引き出そうとする。

「そういえば、まだ自己紹介が遅れました……俺、穂積健吾っていいます。東京のほうから来て、今は奈良をうろついている感じで」

「穂積……健吾、さん。私は、卜部琴音（うらべ・ことね）といいます。奈良生まれで、ずっとこの辺りで暮らしています」

卜部琴音——繊細な響きの苗字と、優しげな名前。それが彼女の儂げな雰囲気と重なる気がして、健吾は胸が騒ぐ。

「卜部、って珍しいですよ。昔からこの辺りのご出身なんですか？」

「ええ……先祖代々ずっと奈良市内です。家系が少し古いらしくて、私自身もよく分からないんですけど……」

「そうなんだ……。俺も似たようなもんだよ。うちも先祖は奈良かもしれないって話があつて。でも詳しくは分かんない」

お互い、祖先について曖昧な部分を抱えているとわかり、会話は自然に弾んでいく。ほどなく運ばれてきた甘味を前に、琴音は「すごく美味しそう……」とほんの少し笑顔をこぼした。

健吾はあんみつを一口食べ、思わず表情を緩める。「ん、うまいな……東京

のカフェで食べるのと違って、和風の雰囲気がとても合う」

琴音もぜんざいをすくい、「そうですね……こういう場所だと、身体の芯まで温まるような気がして……」と微笑む。

それから、お互い何気ない話をぽつりぽつりと交わす。健吾は「実は官僚を辞めてきて、しばらく自由なんだ」と軽く触れ、琴音は「私、まだ仕事らしい仕事はしてなくて……」と肩をすくめる。

「身体、そんなに辛いの？」

「……まあ、そこそこ。昔から何度も入退院を繰り返してきたんです。詳しくは……ごめんなさい、初対面なのに重い話ですよ」

「いや、そんなことはないよ。むしろ、無理しないでほしいって思う」

健吾が率直にそう言うと、琴音はふっと恥じらうように目を伏せる。

「優しいんですね、穂積さん。……私、男性がちょっと苦手で……でも、不思議とあなたとは話せるみたい」

「苦手……なのか。でも、こうして普通に話せてるじゃん」

「そう、ですね。……なんだか安心感があるんです。さっきも朝、声をかけてくれたし、無理に踏み込んでこないし……」

その呟きの裏には、何かがあると感じたが、今は深くは問わない。仄暗いものを隠しているかもしれないが、彼女が心を開きはじめただけで十分だ。

町屋独特の木の香りが、柔らかな陽光とともに二人を包み込む。甘味処の座敷は狭いが、それだけに静かで、時折客が出入りする時の引き戸の音が優しく響く。

「穂積さんって……東京でどんな仕事を？ いや、官僚って聞きましたけど、実際はどんな……」

「うん。某省庁で法律関係の仕事をしてた。でも、ちょっと色々あってね。あ、重い話になるから割愛させてもらうけど……」

「ふふ、こちらこそ重い話ばかりで失礼しました」

お互いに笑い合うと、なんだか空気が和んで、和やかなやり取りが心地よくなる。この小さな時間が、健吾にはとても貴重に思えて仕方ない。

そうして席を立つ頃には、二人の間にはぎこちないながらも確かな親近感が芽生えつつあった。

店を出る直前、健吾が「もしよかったら、また会えないかな？ これから俺、しばらく奈良にいるから」と尋ねると、琴音は少し頬を染めて微笑む。

「……はい。体調次第だけど、また甘味でも……一緒に行けたら嬉しいです」

そして小さく礼を言って、別々の方向へ歩き出す。健吾が振り返ると、琴音はもう顔を背けたまま、路地の奥へ消えていった。

4. 夕暮れの古都に沈む期待と切なさ

町屋の甘味処を出たあと、健吾は日没の時刻までぶらりと古都の道を歩く。秋の陽射しが西の空に沈みかけ、瓦屋根の家並みを赤く染めている。表通りに出ると観光客が増え、みやげ物屋が軒を連ねるが、夕方になると閉店が早い店も多く、そこかしこでシャッターが下り始めていた。

(また会いたい……)

頭に浮かぶのは、卜部琴音の柔らかな笑みと、小さな吐息。彼女の身体が本当に大丈夫なのか、気がかりで仕方がないが、連絡先を交換したわけでもない。彼女がもし喫茶店「古都のしじま」か、ほかのバイト先に出るなら、偶然を装って行くこともできるかもしれないけれど……。

(いや、ここは焦らないほうがいいのか)

街角にある古い石灯籠が、夕闇の中で淡く浮かび上がる。鹿のシルエットが遠くでうっすら見え、ぬるい風が通りを抜けていく。

秋の冷気が首筋をかすめ、健吾は軽く身震いする。まだこの街に来て一日足らず。じっくり腰を据えて“先祖探し”をするつもりだったが、こんなにも早く未知の縁が訪れるとは思ってもしなかった。

「ま、まずは今夜、佐久間と飯だな……。あいつに話してもからかわれるだけかもしれないけど、気分転換にはなるか」

スマートフォンで佐久間にメッセージを送ると、「駅前の居酒屋で待つ」と返事が来る。

(それが終わったら、明日はもう少し奈良の史料館とか回ってみよう。父が生前調べていた民俗学の分野に、物部の情報があるかもしれない)

そう思いつつ、彼女のことが頭から離れない。卜部琴音——儂さをまとい、でも笑顔にはどこか温かいものが宿っている女性。会って間もないのに、不思議ともっと知りたくなる。

——どこかで、また会えるだろうか。いや、会いたい。

そう自問しながら、健吾は夜風に吹かれ、ほの暗くなった通りを駅へと戻っていった。遠くでは鹿が小さく鳴き、日中の賑やかさが嘘のように消えていく古都の夕暮れが、朱色を帯びて静かに沈んでいく。

こうして、再び出会った琴音とのひとときの会話が、健吾の胸にほんのり温かい明かりを灯す。が、それはまだ始まりに過ぎない。物語は、この穏やかな光の裏側で、彼女が抱える闇の影や、健吾自身の“先祖の宿命”にじわじわと近づき始めていた。

紅葉の色が少しずつ深まる十月下旬の奈良。朱に染まる街が、彼らの出会いを優しく包み込む。一見、ただの偶然に見えるこの交流が、やがては千四百年にわたる因縁を呼び覚まそうとは、まだ誰も知る由もないのだった。

Chapter 2 それぞれの想い、交錯する足跡

1. 父の足跡と、穂積家のルーツ ——健吾サイド

翌朝、まだ朝日が高く昇りきらないうちから、穂積健吾は奈良駅前に立っていた。昨夜、旧友の佐久間遼太郎と居酒屋で飲みながら「お前が今、調べたいのは何なんだ？」と話し込んでいたが、結局は「先祖のことを知りたい」「父の調査の続きを、この地で追いたい」という結論に落ち着いた。

今朝は、その続きで図書館や資料館を回るつもりだ。まだ街は静かで、人影も少ない。昨日の夕方あたりには、あの喫茶店「古都のしじま」の前をちらっと通ったけれど、卜部琴音の姿は見えなかった。彼女のことも気になるが、今は先に自分のルーツ探しを進めよう。

居酒屋で佐久間と交わした会話を思い出す。

「健吾、お前の父さんって民俗学の教授だったっけ？ ずいぶん前に事故で亡くなったとは聞いたが……」

「ああ。父は大学で日本古代史と民俗学を研究してて、特にこの奈良地方を重要視していた。それが研究のために地方を回っている最中、母と一緒に道路事故に巻き込まれて帰らぬ人に……」

「そっか……それで、お前も官僚になった後も何となく、先祖のことが引っかかってたわけだ」

「正直、東京で暮らすうちに忘れかけてたけど。官僚を辞めて時間ができたら、頭の片隅に燻ってた‘穂積家のルーツ’を確かめたいって気持ちが再燃しちゃって……」

“穂積”という名字について、健吾の父は「饒速日命（にぎはやひのみこと）の子孫とされる物部一族の分派かもしれない」という仮説を立てていたらしい。実際、家に残る口伝では「うちは古代の豪族・物部氏と同祖で、神道を篤く信仰していたらしい」と言われて育った。

もっとも、確証はない。父があと少しで論文化しようとしていた頃、あの事故が起きた。健吾はその後、大学に進学し法学を学び、国家公務員試験にも合格した。だが組織の仕事に馴染めず、まっすぐすぎる性分もあいまってトラブルが起きやすかった——というのが退官の真相だ。

「……とにかく、今は自分を見つめ直す旅なんだよな」

健吾はそう呟き、駅前の喧騒がゆっくりと増し始めるのを感じる。ビジネス街へ急ぐ人々の流れと、観光客がバスを待つ列とが交錯し、鹿のイラストが描かれた案内板がちらちらと目に入る。

手にはスマートフォン。「奈良市立図書館」「奈良大学図書館」「県立民俗資料館」——いくつか地図をチェックして、まずはアクセスの良いところへ向かおう。

ちなみに昨夜、佐久間に誘われたのは、彼が経営する医療ベンチャー企業への参画だ。「お前の法学知識と折衝能力、うちに来てくれたら強いぜ？」と熱心に口説かれたが、健吾はまだ曖昧に答えを保留している。

(せっかく官僚を辞めたんだ。今すぐ別の組織に入る気はない。それにまだ、俺は父さんの足跡を追うつもりだし……)

そんなことを考えながら歩いていると、ふと電話が震えた。画面に「祖母」の名。健吾が「もしもし、ばあちゃん？」と出ると、少し心配げな声が聞こえてくる。

「あんた、本当に奈良にいるのね？ 昨日電話もらったけど、もうちょっと落ち着いてからでいいんじゃないの……？」

「はは、まだ先祖調べといっても何も進んでないさ。でも少しずつ動いてみようかと」

「父さんのことを掘り返すなら、無理しちゃいけないよ。あのときは本当に大変だったんだから……。ま、あんたが自分で決めた道なら止めないけど」

「うん、ありがとう。——そうだ、ばあちゃんの家にあるっていう古い文献、今度いっぺん見せてもらうから。連絡するよ」

「分かった。くれぐれも体に気をつけてね」

通話が切れると、妙な胸の疼きが残る。父の姿を失って以降、祖母と二人暮らしだった自分。あの無念を振り切るためにも、こうして奈良に来たのだ。組織を飛び出したまっすぐすぎる性格というのは、案外父譲りかもしれない——と健吾は思う。

「さて、じゃあ行くか。まずは図書館で‘穂積’に関する記述でも探してみよう」

そう独り言ち、バスに乗り込む。朝の陽射しがガラス越しに差し込み、窓外を眺めれば紅葉の木々がちらほら見える。まるで、千三百年前の都の歴史が息づいているかのように古都の空気が染み込んでくるのを感じ、健吾は心を引き締めた。

2. 父を知らない幼少期——琴音サイド

同じ朝、奈良市内の住宅街にある古い木造の家。卜部琴音は、台所に立って朝食の片づけをしていた。奥からは叔母・静香（しずか）が「終わったかしら」と声をかけてくる。

「ごめん、もう少し洗い物が……」

「無理しないで。冷えこむから、手荒れには注意しなさいよ。——あ、それと今日、私は市役所のほうで夜まで残業になるかもしれない」

静香は福祉課に勤める公務員。四十そこそこながら、まるで老成したように落ち着いていて、琴音を育ててくれた存在だ。

「はい、分かった。私もちょっと外出するかも。体調次第だけど……」

「どこへ行くの？ 喫茶店のバイト？」

「ううん、どうしようかな……昨日、少し気になる人と……じゃなくて、あの……」

言葉を濁す琴音。昨夜はぼんやりと健吾のことを思い出していた。甘味処で交わした会話や、彼のやわらかい表情が頭から離れない。

「どうしたの、琴音？ 珍しく顔が赤いわね……」

「い、いや、別に。ちょっと考え事してただけ」

静香はじっと琴音を見つめ、それから小さく微笑む。「変なことに巻き込まれないようにしてよ。体力がないんだから……」

その言葉には、優しさと同時に何か暗い影が潜んでいる。琴音は思わずうなだれてしまう。自分がいつか早死にするかもしれないという、卜部家の呪いめいた宿命。その話はいつも心を重たくする。

■ 父母の記憶

朝食の片づけを終え、古い廊下を歩いていると、ふと居間の壁にかけられた写真に目が止まる。祖母や母の若き日が写ったモノクロ写真が数点。琴音の記憶にはないが、母は琴音を産んですぐに命を落とすと聞く。

“母は二十歳で結婚し、二十一歳で私を産んで亡くなった。祖母もまた若くして……私も同じ運命になるのかな……”

写真の母は笑顔だが、その笑顔の先に続く死という現実を考えると息が詰まりそうになる。さらに、琴音の父もほとんど家に帰らないまま、他の女性と再婚してしまった。琴音にとっては、ほぼ「父を知らない」状態だ。

幼稚園のとき、行事で「お父さんと一緒に」なんて言われても誰も来ない。その寂しさを、静香が頑張って埋めてくれた。だが、男性への苦手意識もそこから育ったのかもしれない。

“でも、昨日出会ったあの穂積さん……初対面なのに、あまり怖くなかった。むしろ優しいと思った。”

そう考えると胸が微かに高鳴る。こんな気持ちは初めてかもしれない。けれど、同時に自分の体が弱いことや短命かもしれない運命を思い出し、背筋に冷たいものが走る。

3. なぜ官僚を辞めた？ ——健吾と佐久間の会話

その日の午後、図書館で資料を眺めていた健吾のスマートフォンに、佐久間から連絡が入った。

「今から少し時間できた。お茶でもしないか？」

「ああ、いいよ。ちょうど頭がパンクしそうだったとこだし」

そうして待ち合わせしたのは奈良大学の近くにある小さなカフェ。ここは学生もよく利用するが、平日の夕方ということで人はまばら。カウンター席に並んでコーヒーをすすりながら、佐久間がやけに真面目な顔をして切り出す。

「健吾、そっちの‘先祖探し’はどうだ？ 図書館で何か成果はあったのか？」

「まだざっと文献を見てる段階かな。『物部氏と穂積氏が同祖』って説はいく

つかあるけど、決定的な資料は見当たらない。それと、蘇我氏と物部氏の争いの話も興味深かった」

「へえ、蘇我馬子とか蘇我入鹿とかのあれか。教科書でもやったなあ。——で、お前は今後どうするわけ？ まさかこれだけ調べて東京へ戻る気でもないだろう？」

「うーん、まだ分からない。祖母の家に古い文献があるらしいし、それを確認しなきゃと思ってる。でも、一度くらいは奈良の各地を巡って、父が辿った道を追体験したいとも思うし……千四百年前に飛鳥時代の都があった明日香村とかも……」

「そうか。まあ、俺の会社への話はその後でもいいけど、くれぐれも‘俺が起業家だから嫌だ’なんて言うなよ？」

「はは……そんなこと思ってないよ。お前の会社は成功してるみたいだし、誇らしいくらいだ。ただ、今は自分自身の問題を片づけてから、次のステップに進みたいんだ」

健吾はカップを置き、視線を落とす。「——俺さ、官僚になったのはいいけど、まっすぐすぎるせい上司と合わなかった。法律を守らない政治家とか、汚職まがいの動きとか見ているとイライラしてしまって……結局、組織の思惑と俺の正義感がぶつかり合って、爆発寸前で退官したんだ。父みたいに‘自分で調べる研究職’に進めばよかったのかもって後悔してたところでね」

「なるほどな……」

佐久間は納得したように頷き、「お前が剣道部の頃からそういうストレートさを持ってたのは知ってる。いきなり中心に突っ込んで自滅しかけるタイプ、って感じ？」とからかうように笑う。

「まさにそんな感じだ。だが、今はそれを逆手にとって、自分らしく自由に動きたいって思ってる」

ふと、健吾の頭をかすめるのは「ト部琴音」のことだ。彼女の儂げな笑顔がどうにも気になるが、佐久間に話しても茶化されるだけだろう。——それでも、思わず口を開きかける。

「なあ、佐久間……。もし、俺が‘この街で気になる女性と出会った’としたら、お前なら応援してくれるか？」

「おっ、何だよ、急に。……まあ、もちろん応援するさ。お前がそういうモードになるの珍しいしな。もしかして今すでに何かあったわけ？」

「いや、別に……。ただ、ちょっとした偶然で出会った子がいて。彼女、体が弱そうで……。でも、惹かれるものがあるっていうか……」

「へえ……。まあ、お前は慎重にやったほうがいいぞ。相手にもいろいろ事情があるだろうし」

「だよな……」

曖昧にごまかしたところで、佐久間が笑いを含んだ声で「何なら俺の病院ネットワーク使って診察してあげてもいいぜ？」などと冗談めかす。健吾は「まだ早いわ」と苦笑し、話題を切り上げた。

4. “事件”が起こる路地——軽い貧血の真実

翌日、天気はよく晴れ渡り、奈良町の路地には温かい日差しが注いでいた。健吾は午前中から資料館を回り、昼を過ぎたころ、一休みしようと人気の少ない裏道を歩いている。町屋カフェでも探そうかと思いつつ、道を曲がった瞬間、見覚えのある後ろ姿があった。

(……あれは、琴音……?)

薄いニットにロングスカート、手には小さな紙袋を下げている。すぐに声をかけようかどうか迷ったが、彼女は足早に歩いていく。慌てて追いつこうとすると、ちょうど路地の角で彼女がふらりと足を止めた。

「……あ……」

見る間に、琴音の上半身が揺れ、足元が崩れ落ちるようになる。健吾は咄嗟に駆け寄り、その身体を抱きとめた。

「大丈夫か！？ 琴音さん……！」

びっくりして名を呼んだが、彼女は耳鳴りがするのを目をしばたたきながら息を荒げている。

「……すみません……急に目が回って……」

「立てる？ ほら、ベンチ……いや、壁際に座ろう、そこに」

近くの石段に琴音を座らせ、健吾は「ちょっと待ってて」と言って自販機まで走り、水のペットボトルを買って戻る。琴音はその間に呼吸を整え、額の汗を拭いていた。

「ありがとうございます……また、こんなところを見られてしまって……」

「いや、そんなことより、今は体を休めないで。……どう？ 動悸は落ち着いた？」

琴音は弱々しく頷く。「だいぶ楽です。……昔から貧血がひどくて、突然意識が遠のく感じになるんです」

「そっか……。病院へ行かなくていいの？」

「……今は大丈夫。そんなに大事にするほどじゃ……すみません、本当に」

目を伏せる琴音の顔色は青ざめているが、少しずつ息が整ってきた様子。健吾はそっと彼女の背中に手を添え、「俺の知り合いに医療関係者がいるから、必要なら紹介するよ」と口走る。佐久間のことだ。

「医療関係……？ あ、いえ、気持ちはありがたいんですけど……慣れてしまっていて……大げさにしてもらう必要はないんです……」

健吾はその“慣れ”という言葉に胸を痛める。彼女はきっと、こうやって体調を崩すのが日常的で、周りに心配をかけまいとひっそり耐えてきたのだろう。

「……そっか。でも、本当にきつくなったら頼っていいんだからな。こんな偶然、俺が通りかからなかったら危なかったら？」

「そう……ですね。偶然が重なるなんて不思議。昨日も、一昨日も……」

琴音はかすかに笑みを浮かべるが、その笑顔にどこか影が射す。まるで自分の命運を嘲るような儂さが宿っている。

「穂積さんは、今日はお散歩？」

「うん、資料館を回ってきたところ。そろそろ休もうかと思ってたら、偶然あなたを見かけて……」

「そう、なんだ……。ありがとう、本当に。あと少し休めば歩けそうだから

……」

彼女の声が震える。健吾はその小さな肩をそっと支えながら、「無理しないで、もう少し座っていこう」と促す。琴音は遠慮がちに俯いてから、少しだけ身をゆだねてくれた。

■ “呪い”の兆し

彼女は一瞬、言いかけるように唇を動かすが、躊躇している様子。代わりに、健吾がやんわりと声を掛ける。

「もし差し支えなければ、何か手伝えることない？ ご家族とか、連絡したほうがいいなら……」

「……家族……叔母がいます。父はもう別の家庭を持ってるから……。でも、心配かけたくないんです。何度倒れても‘またか’って感じで……」

それは悲しげな独白。健吾は「そっか……」と返すしかない。しかし彼の胸には、物部の末裔という奇妙な言葉が通り——いや、関係ないかもしれないが、何か暗い宿命が琴音を蝕んでいるのではないか、と本能的に思ってしまう。

「ちょっと歩ける？ 近くに休める店でもあれば……」

「はい、もう少し待てば大丈夫です……。いつもすみません……」

「謝らないで。助けられるなら助けたいだけだし」

ふと琴音が顔を上げ、どこか切なそうに微笑む。その瞳は潤んでいるが、同時に「自分は救われない」と言っているかのような諦観が混ざっている。

“どうしてこんなに儂いんだ？ 彼女、まだ若いのに、そんな目をするなんて……”

健吾の胸は締めつけられる。これが一時の同情に終わらせるのは嫌だ。もっと、彼女のことを知りたい。そして、支えられるなら支えたい——そんな衝動が湧き上がる。

やがて琴音は、ようやく立ち上がれる程度に回復したらしく、真っ直ぐ歩き出した。健吾は焦る気持ちをこらえ、「ちゃんと家まで送ろうか？」と尋ねるが、彼女は首を振る。

「ありがとうございます。でも大丈夫。ここから近いから、一人で帰ります……また……、改めてお礼を言わせてください」

「いや、お礼なんて気にしないで。それより、また何かあったら連絡してほしい。できる限り力になるから」

「そうおっしゃっていただけるなら……」と、二人はスマホを取り出して、ぎこちなく互いの連絡先を交換した。

そして、別れの挨拶の短い言葉を残し、背を向ける琴音。健吾はもう少し引き止めたい思いを飲み込みながら、「気をつけて」と声をかけ、路地の向こうへ消えていく後ろ姿を見送った。

5. 深まる縁、そして“呪い”の入り口

その夕方、健吾はホテルに戻ってきたが、どうにも落ち着かない。彼女が無事に帰宅できたか気にかかるが、むやみに連絡するのは失礼だし、迷惑だろう。

とりあえず、佐久間に連絡して、「ちょっと相談がある」とだけメッセージを送る。彼に頼みごとをするわけではないが、胸のうちを話すだけでも気が紛れるかもしれない。

——もしかすると、物部の末裔として生まれ、体が弱く、短命に苦しむ彼女……なんて、そんな物語めいた想像は飛躍しすぎか。だが、健吾には妙に嫌な予感がある。まるで彼女が長く生きられないかもしれないという危惧が、心を暗く染めていくのだ。

(父が遺した民俗学の資料にも、古代豪族が抱えていた“呪い”みたいな記述があったっけ……。それと彼女は関係ないと思いたいけど……)

そんなふうに思考が渦巻く。するとスマホが振動し、佐久間から「あとで軽く飲むか？」との返信。健吾は「助かる」と答えた。

——こうして、健吾は自分の父の研究を追いながらも、琴音に対する保護欲や好意を自覚し始める。一方、琴音もまた、「短命の宿命」と自分を重ね、どうしようもない不安と希望の入り交じった感情を抱えていた。

この小さな事件、貧血での倒れ込みは、やがて“呪い”の本格化への序章となる。二人がさらに深く関わり合う運命の足音は、すぐそこまで迫っていることに、まだ誰も気づかない。

夜の奈良の街はしんと静まり、遠くから鹿の鳴き声がかすかに響く。血塗られた歴史の残滓が闇の底でうごめき出す予感を残しながら、ゆっくりと月が昇っていった。

——こうして、穂積健吾とト部琴音、それぞれの想いが少しずつ交錯しはじめる。次は、彼女の家系に漂う影が、二人の前に立ちはだかることになるだろう。誰もが避けられない運命と知らずに。

Chapter 3 ト部家に漂う影

1. 古き家の息遣い——静香の視点

早朝、秋の風が冷ややかに瓦屋根をかすめ、静かな住宅街の一角に佇む木造の家。その玄関先には苔むした石畳が続き、周囲を低い石垣に囲まれたト部家(うらべけ)の古い屋敷がしんと息を潜めている。

屋敷に住むト部静香は、朝の支度を終わると、部屋の襖(ふすま)をそっと

開けた。畳敷きの床に正座し、香を焚（た）いて祖霊社（神道の仏壇にあたるもの）の中の一対の霊璽（位牌のようなもの）へ向かい手を合わせる。

「どうか……琴音をお守りください。あの子が、少しでも長く生きられるように……」

静香は心の中で懸命に祈る。霊璽には、静香の双子の妹、つまり琴音の母であるト部鈴子（うらべ・すずこ）と、そのさらに上の世代、祖母の霊号（戒名のようなもの）が記されている。まるで母娘代々若くして亡くなった系譜が、この空気を重く押し掛かってくるようだ。

静香は42歳。ト部家に生まれ、琴音の母と二卵性の双子として育った。しかし、妹の鈴子は琴音を出産してすぐに命を落としている。静香自身も若いころに子宮癌で手術を受け、出産の可能性を断られた。

だからこそ、妹の娘である琴音を、まるで自分の子のように慈しんできたのだが——ト部家の女たちはみな、二十代で逝ってしまうという不吉な“呪い”に囚われている。静香はそれを痛感しているからこそ、絶えず琴音の命を案じて祈り続けているのだ。

（私だけが、こうして長く生き延びてしまったのは、子宮を失ったからなのかもしれない。あの一族の血を繋ぐ役割を果たせなかったから、呪いを免れた……なんて。あまりにも皮肉でしょう？）

静香は立ち上がり、襖をそっと閉じる。部屋を出て廊下を進むと、古い梁（はり）の木目がじんわりと朝の光を浴びている。何十年、いや百年以上も前から、この家は同じ姿で家族の営みと死を見届けてきたのだろう。

琴音の部屋から、琴音が起きる物音がする。いつもより少し遅い時間だが、今日は特に仕事があるとも聞いていない。昨日、外出先で倒れかけたと聞いていた静香は、不安を抱えつつもそっと見守ることしかできない。

「あの子をどうにか救えないものか……私は、調べるしかないよね」

静香はそう呟き、居間の隅に置いてある小さな木箱を開けた。中には古いメモ書きや写真、さらには何冊かのノートが入っている。そこにはト部家の血脈や、物部氏の伝承について、静香なりに調べた断片が書き留められていた。

福祉課職員として働く合間に、図書館やネットで必死に検索して集めたものだが、やはり決定的な解決策は見つからない。たまに「呪術」や「先祖の祟り」じみた情報を目にしても、それが本当に琴音を救う術になるのかどうか分からない。現実的には医学的な支援が必要だと頭では理解しているが、琴音の病院通いでは原因が分からないままだ。

(子宮を失った私には、もうト部の血を繋ぐ役割は負えない。だからこそ、あの子だけは……と思うのに……どうすればいいの……)

奥歯を噛みしめ、静香はノートを閉じる。外では風に揺れる柿の木が、朱色の実をゆらゆらさせていた。深まる秋とともに、琴音の命の灯火は果たしてどうなってしまうのか——不安ばかりが募る。

2. 福祉課の合間に——静香の日常

その日の午後、奈良市役所・福祉課のデスクに座った静香は、書類とパソコンを相手に淡々と仕事をこなしていた。生活保護の相談や介護サービスの案内など、業務は多岐にわたるが、静かに黙々とこなす性格ゆえに同僚からの信頼は厚い。

夕方近くになると、同僚が雑談まじりに静香へ声をかける。

「ト部さん、今日は残業になるの？」

「はい、月末は事務が重なるので……」

「そう……そういえばト部さん、奈良の古い家に住んでるんですね。むかし、おばあちゃんが言ってたんだけど、物部とかト部とか、なんだか古代の豪族の血筋がうんぬんって……」

「ああ……まあ、そう言われてるけど、うちもただの一般家庭ですよ」

言葉を濁す静香。同僚は興味深そうに「ふーん」と頷き、あまり突っ込んでほこないが、その視線には好奇心が宿っている。静香は愛想笑いでやり過ごし、デスクに視線を戻した。

(私は仕事でもきちんと責務を果たしてきた。でも、家系のことまでは誰にも分からないし、話したいとも思わない。誰に分かってもらえるはずがない、あの呪いを……)

実際、双子の妹を亡くし、妹の娘を育てているなどと話しても「大変ね」の一言で済まされるだろう。ましてや“早世の呪い”など、仕事仲間に話すわけにもいかない。

書類を整える手を止め、静香はふと天井の蛍光灯を見上げる。この仕事が終われば夜。帰宅して琴音の顔を見れば少しは安心できるだろうか……。

3. 蔵の記憶——古文書の片鱗

翌朝。静香は少し早めに起き、琴音を残して一人で蔵へ向かった。屋敷の裏手に建つ古い土蔵は、壊れかけた木扉が錠で留められ、滅多に開けることはない。

その奥には、卜部家に伝わる古い家系図や古文書が眠っている。静香はそれを幼いころ祖父から見せられた記憶があるが、その内容は半ば伝説じみていた。

扉を開き、埃が舞う空気の中に入る。段ボールと古めかしい木箱が積み重なり、薄暗い窓からは蜘蛛の巣が垂れている。静香は懐中電灯を片手に奥へ進むと、隅に置かれた箱をそっと開ける。

「……これね。饒速日命（にぎはやひのみこと）や物部の文字が書かれた巻物。あの子にはまだ、見せたくない」

かつて琴音が子供のころにちらりと目にして、「怖い夢を見た」と泣きじゃくったことがある。文字も読みづらいし、何より“物部氏と卜部家の宿命”を琴

音が知ったところで、救いにはならないと思ったから、静香は封印する形で蔵に閉まっているのだ。

しかし、最近の琴音の体調不良を見るにつけ、静香自身も「もう手の打ちようがないなら、何か手がかりが載っているかもしれない」と思わずにはいられない。

(でも、琴音が知ったらどう思う？ もう死を受け入れてしまうかもしれない。何もできなくなるかもしれない。……そんなのは嫌だ)

静香は複雑な表情を浮かべ、巻物に手を伸ばしかけるが、結局開かずにそっと蓋を戻す。まだ心の準備ができない。血塗られた歴史に触れた先で、何か呪術や祟りの真実があるのかもしれない——だが、それはあまりにも恐ろしい。

「……どうか、何事もなく、琴音が生きてくれれば……それだけでいい」

小さく独り言ち、蔵を出る。背後で扉を閉めるとき、木々のざわめきが耳に入った。ざわざわと風の音が増幅し、まるで何かが蔵の奥からうごめくような不吉な感覚が静香の胸を叩く。

振り払うように鍵をかけ、敷石を踏み鳴らして屋敷へ戻る足取りは、妙に重かった。

4. 『見てはいけない』と言われた紙束——琴音の葛藤

同じ朝、琴音はいつものように早起きこそできず、寝ぼけまなこで廊下へ出てきた。静香の姿が見えないので「叔母さん、もう仕事？」と呟きながら居間へ向かうと、開け放たれた障子の向こうに靴の気配がする。

静香が玄関に回ってきたようで、「行ってくるわ」とだけ短く言った。琴音は「いってらっしゃい」と返事をするが、その声はどこか上の空だった。

(最近、身体のだるさがずっと続いている。貧血も良くならないし……このままじゃいつか本当に倒れて、そのまま帰らぬ人になってしまうのかも……)

少し前に、町で出会った穂積健吾の優しい声を思い出すと、胸がちくりと痛む。健康な人生を送れるなら、もっと普通に恋のようなものを楽しめたかもしれないのに……。そんな淡い夢を抱きつつ、自嘲する気持ちも芽生える。

「……でも、可能性がゼロというわけじゃないでしょ？ 何か、方法があるなら……」

小さく呟きながら、琴音はふと思い出す。幼いころ、蔵でちらりと見た紙束。そこには難しそうな漢字で「物部」「饒速日命」などの言葉が並び、恐ろしくて夜も眠れなくなったのだ。けれど、もしそこに自分の運命に関わる情報があるのだとしたら……？

(叔母さんは“まだ見ちゃダメ”と言ってたけど、もしあれが呪いを解く手がかりになるなら……)

琴音は廊下に立ち尽くし、蔵のある裏庭のほうに視線を投げる。扉は閉められており鍵もかかっているだろうが、どうにかすればこじ開けられるかもしれない——と、そんな背徳的な考えさえ浮かんでくる。

しかし、静香の言いつけを破るのは心苦しいし、その結果「何も救いが得られなかった」ら惨めだ。それどころか、古い文書を見て精神的に追い詰められたらどうする？

「……怖い。けど……少しでも手がかりを探したい……」

結局、この朝は動けずに台所へ立った。昨日具合が悪かったせいで、家事も片づいていない。卵を割りながら手が震え、フライパンにぽたりとこぼしてしまう。

(自分には普通の生活すら維持できないのか……)と虚脱感に苛まれながら、琴音は半熟の卵をなんとか火を通して皿に移した。

(それでも……穂積さんに会ったときに感じたあの安心感だけは、本物だったかもしれない。彼、今頃何してるかな……)

思い浮かぶ彼の笑顔に、一瞬心が温かくなるが、またすぐに「どうせ私は長く生きられない」とすぐに冷え込む。この揺れ動く感情が、彼女の胸をかき乱す。

5. “普通の恋愛”なんて、やっぱり無理——琴音の独白

昼過ぎ、洗濯物を干したあと、琴音は縁側に腰を下ろした。ちょうど陽射しが心地よいが、背後の廊下からは冷たく静かな空気が漂ってくる。古い家の木の香りが鼻をくすぐり、庭の片隅には小さな秋桜が咲いている。

「ああ、きれい……でも、もうすぐ枯れてしまうのかな。秋も深まるし……」

花の儂い姿に、自分を重ねてしまう。——数日前に出会った健吾が、「大丈夫?」「無理しないで」と手を差し伸べてくれたとき、どれほど胸が熱くなったことか。彼の声音は優しく、まるで琴音の弱さを肯定してくれるようだった。

でも、そうやって好意を抱いたところで、自分には明日があるかどうか分からない。家を継ぐ使命云々以前に、母と同じ年齢か、それより少し年上になったら死んでしまうのではないかと、薄ら寒い恐怖が離れないのだ。

「ごめんね、穂積さん……もし私がいなくなったら、悲しむよね。でも、もうどうしようもないの」

唇を噛み、視線を落とす。穂積健吾は、官僚を辞めてまで奈良に来たという話を聞いた。そんな行動力のある真っ直ぐな人と関係が深くなるのは、あまりにも後ろめたい。自分がいずれ死ぬと分かっているながら、彼を巻き込むことになるから。

それなのに、心の奥底では「また会いたい」「話をしたい」という思いが膨らんでいる。普通の女の子なら、そこから恋愛が始まるのだろう。——けれど、琴音は普通の恋愛など夢のまた夢だと思ってきた。

そのとき、廊下を歩く足音が聞こえ、静香が昼の休憩で一度帰宅したらしい。顔を覗かせ、「琴音、大丈夫？ 具合は？」と声をかける。

「うん、何とか。……叔母さんこそ、仕事忙しいのにごめんね」

「いいの。……何か気になることがあったら、話してね。あなたには、いろいろ抱え込まないでほしいから」

静香の声は柔らかいが、どこか不安そうでもある。琴音は曖昧に頷くと、何となく目をそらした。

(叔母さんも本当は不安で仕方ないんだろう……。私が母と同じように逝くんじゃないかって。早く健康になれる方法があればいいのに……)

縁側から庭を見つめながら、琴音はひたすら何か“救い”を探すように視線を巡らす。だが、秋の陽射しは穏やかなだけで、その答えを与えてはくれない。

6. 新たな一歩の前に

そんな卜部家の静かな空気の中、琴音も静香も、それぞれ胸に不安を抱いている。古い家屋には、物部氏の末裔としての歴史が息づき、それがまるで呪いのように彼女たちを締めつける。

静香は蔵に眠る文献を開く決意ができず、琴音は見知らぬ古文書を覗く勇気が持てないまま——けれど、薄々「自分たちには時間がない」と感じ始めていた。

(琴音の寿命は、もしかすると本当に短いかもしれない。私が今できるのは、何か助かる手段を探すこと。でも、それがどこにあるか分からない……)

(物部の一族とか、饒速日命の末裔とか、そんな伝承が本当に呪いを解くカギになるの……?)

静香の脳裏にさっと蘇るのは、最近やたらと琴音の前に現れると琴音がぽつりぽつりと語った青年の話——穂積健吾と言ったか。彼がもし本当に何か縁を持つ存在なら、あるいは琴音を救う力になり得るのだろうか。

琴音もまた、健吾への想いを捨てきれずに胸を痛めている。「でも、私なんか恋をしたら、相手を不幸にするだけ……」という思いと、「少しでも彼と時間を過ごしたい」という願いとが入り乱れる。

そして静香は仕事に戻るため玄関を出ていき、琴音はぽつんと屋敷に残される。階段を上がり、古い押し入れに手をかけてみるが、その先に何かあるのか分からないので、開く勇気は湧かない。

裏庭の土蔵は鍵がかかり、そこに眠る家系図や古文書も封印されている。ト部家の呪いを解くヒントがそこにあるかもしれないのに、両者とも踏み込めずにいた。

「ごめんね……母さん、おばあちゃん……。私はどうしたら……」

琴音は階段の途中に座り込み、そっと膝を抱える。儂い秋の陽射しが障子越しに伸び、畳を黄金色に染めていた。まるでこの家が永遠に時を止めたまま、来るべき悲劇を待っているような、そんな静寂が漂う。

Chapter 4 深まる秋と奈良巡り

1. 秋の行楽 1——長谷寺で紡がれる想い

まだ朝の冷たい空気が残る頃、近鉄奈良駅で穂積健吾とト部琴音は待ち合わせをしていた。健吾が思い切って連絡し、半ば強引に琴音から一日行楽に行く約束を取り付けたのだ。健吾には琴音の体調が気になるものの、自分の人生を諦めかけているような彼女の沈んだ心がより心配だった。その気分を晴らそうというのが狙いだ。

まずは近鉄奈良駅から電車を乗り継いで桜井市の初瀬（はせ）方面へ向かおうという計画だ。

目的地は長谷寺（はせでら）。10月中旬から紅葉が少しずつ始まっていると聞いていたので、健吾が提案したのだ。

「おはようございます。穂積さん。今日はよろしく申し上げます」。二人ちょうど同時に待ち合わせ場所に着いて、琴音が朝の挨拶をしてきた。「誘ってくれてありがと、穂積さん。いろいろと気を遣わせちゃって……」

「いいんだ。俺も色々行きたいし……そうだ、“健吾”でいいよ。“穂積さん”は何だか他人行儀だし、俺だって“卜部さん”じゃなくて“琴音さん”って呼びたい」

その言葉に琴音は頬を染め、一瞬だけ視線を伏せる。どこか照れくさく、でも嬉しい。学校でも男友達はほとんどいなかったから、こういう距離感は初めてだ。

（普通の女の子だったら、素直に喜んでいいのかな……でも、私には時間が……）と胸が疼く。しかし、それでも健吾の言葉はじわりと温かい。

「……じゃあ、私も“健吾さん”って呼ぶね。改めて、よろしく申し上げます」

人もまだまばらな駅前で、二人はその言葉を交わす。わずかに距離がさらに縮まったのを感じながら、琴音は心の奥に生まれつつある柔らかな感情を噛みしめていた。

車中で「長谷寺って“花の寺”なんだってね。四季折々に花が咲くとか……いまは紅葉も始まる頃らしい」と、健吾が期待に笑顔を輝かせて言う。

「うん、私も写真で見たことあるけど、舞台造りの本堂が有名だって……実際に行くのは初めて」

琴音は車窓の景色を眺めつつ、小声でつぶやく。さまざまな緑の向こうに、山裾が赤や黄へと染まりはじめてるのが見える。穏やかな秋晴れの空に、白い雲が流れていた。

乗り継ぎも含めて1時間と少しで最寄り駅へ到着し、そこから徒歩で参道を進む。山あいの坂道には土産物屋や茶屋が並び、寺へ続く石段が見えてきた。秋風は心地良いが、琴音の体調を考えてペースを落としながらゆっくり登る。

「疲れたら言って、無理しなくていいから」

「うん、ありがとう。でも今日は……なんだか調子がいいかも。外の空気、気持ちいいし」

そう言いながらも、琴音は時折胸を押さえて浅く呼吸する様子を見せる。健吾は気づくたびに心配そうに覗き込むが、琴音は「大丈夫」と笑顔を作る。その笑みは決して暗さだけではなく、少しだけ前向きな意志も混ざっているようだ。

境内へ入ると、本堂へ向かう回廊が現れた。周囲の木々はまだ緑が残るが、ところどころ鮮やかな赤や黄が差し色のように散らばり、所々でモミジがひらりと落ち葉を舞わせている。

本堂は舞台造りの懸造（かけづくり）で、眼下に広がる景色を見渡せる。その眺望に琴音は思わず目を輝かせた。

「わあ……すごい、きれい。こんな高さなんだ……」

「確かに絶景だね。紅葉が進んだら、もっと鮮やかなんだろうなあ」

二人で舞台の縁から見下ろすと、初瀬の里と山並みが一望できる。視界を遮るものは少なく、青空と柔らかな雲が悠々と流れていく。程よい観光客がいるものの、さほど混雑していないため、静かにこの景色を味わえた。

「私……こういう場所、あまり来たことなく。でもお寺って、心が洗われる感じがするね」

「そうだね。……俺たちの祖先は仏教排斥派だったかもしれないけど……」と苦笑しながら健吾はふと思い出して口にする。物部氏が仏教受容に反対した豪族だった、と資料で読んだばかり。琴音は少し驚いた顔をし、

「あ……そうか、物部はもともと仏教に反対してたって……でも、こんな美しいお寺を見たら、どう思ったんだろうね。きっと、いろんな歴史があって変わっていったんじゃないかな」

二人はなんとなく気まずく笑い合う。過去の人々の争いは今となっては遠い出来事。それより何より、この静謐な空間に身を置けば、敵対とか排斥とか、そんな言葉が嘘のようだ。

しばらく舞台の縁に腰掛け、穏やかな山風を浴びながら一息つく。琴音は木の柱に手を触れ、

「実際に見ると仏像とか建築って、本当に美しくて……なんか、不思議と落ち着く。私、神社派かと思ってたけど、お寺も悪くないかも」

「ほんとだよ。俺も政治とか歴史とか抜きに、単純にすごいなあって思う。あと……一緒に来られてよかった」

ふとその言葉に琴音が頬を染め、「私も……」と呟く。遠くで風が木々を揺らし、散り始めた落ち葉がひらひら舞う。二人の距離はほんの数センチだけど、その心がそっと重なり始める瞬間が確かにそこにあった。

2. 秋の行楽2——春日大社での小さな心の動き

長谷寺を後にし、近鉄線を乗り継いで再び奈良市街へ戻ってきたが、まだ夕刻には時間があった。そこで健吾が「春日大社にも行ってみる？ まだ開いてるし」と提案する。琴音は少しだけ疲れ気味だったが、「もうちょっとだけ大丈夫」と笑顔を見せ、二人はタクシーで春日大社の境内へ向かった。

奈良公園を横切って到着すると、少し観光客が減ってきていて、境内の奥は静かな雰囲気漂う。朱塗りの社殿にほんのり西日が射し、砂利道には落ち葉が舞い落ちていた。

「ここは“有料拝殿エリア”とかがあるんだよね。佐久間が言ってた。観光客も少なくなるから落ち着いて参拝できるって」

「普段、あんまり意識したことないけど……こういう神社は奥が深いんだろうな。十二社とか小さな社がたくさん並んでる所もあるって聞いた」

社務所で拝観料を納め、御本殿へと続く回廊を歩く。なだらかな石段の先に拝殿があり、その右奥には並び立つ小社群が見える。風が吹くたびに木立の葉が落ち、足元をくすぐるように転がっていく。

静かな拝殿の前で鈴を鳴らし、健吾と琴音は並んで二礼二拍手一礼を行う。閉まりかけの本殿からは穏やかな神官の姿が見えるが、他の参拝客はほとんどおらず、まるで貸し切りのような空気感だ。

「こういう場所で祈ると、心が洗われるなあ。いいこと、あるといいね」

「……うん。健康とかね、いろいろ」

琴音は穏やかに呟き、胸の奥で自分の命の行く末を祈る。健吾もそんな彼女に気づきながら、心の中で「どうか、この人を守ってください」と願っていた。

拝殿を出て境内をさらに奥に進むと、ひな壇状に小さな社がずらりと並び、それぞれに別の神様が祀られている。二人は順路に沿ってひとつひとつ小さなお社へ手を合わせて回る。“十二社参り”と呼ばれるコースらしいが、時間帯もあって人影がほとんどない。

「ずいぶんたくさんあるんだね。…ちょっと面白い。こんなに回ったらご利益が増えそう」

「たしかに。欲張りかもしれないけど、お願いしたいこといっぱいあるし。俺も琴音さんが元気になりますように、とか、自分の今後の仕事とか……」

冗談めかして笑い合うが、お互いの胸にはそれぞれ切実な祈りが宿っている。琴音にとっては「死の運命」から逃れたいという内心の悲痛。健吾にとっては「彼女を救いたい」という願い。

そろそろ参拝コースを歩き終えるころ、二人は境内に置かれたおみくじを引いてみることにした。硬貨を賽銭箱に落とし、おみくじの箱を振ると、カランと音を立てて細長い棒が転がり出て記された番号のみくじを引き出しから探して取り出す。

「俺、大吉だ……。え、珍しいな」

「わ……。私も大吉……。そんなことあるのかな」

琴音は目を丸くし、二人で顔を見合わせて一瞬沈黙する。大吉×大吉の偶然。そこには「出会いが幸福をもたらす」とか「思い焦がれていることが近づく」とか、まるで恋愛運を示唆する文言が書かれており、琴音は赤面してしまう。

「な、なんだか気恥ずかしいね……」

「……でも、嬉しいかも。希望を持てるってことかな……。俺たち」

健吾の言い方に、琴音は心臓が跳ねる。思わず「わ、私たちって……」と戸惑いかけるが、健吾が笑って「違う違う、変な意味じゃなくて」と手を振る。

そのやりとりにお互い照れて、自然とくすくす笑い合う。こんな些細な偶然が一瞬で二人の心を浮き立たせるのが、なんとも甘酸っぱい。まるで十代の初恋のようで、琴音は少し心が軽くなるのを感じた。

3. 夜の若草山——ふたつの孤独が触れ合う

陽が落ちてきた頃、健吾は「もう少しだけ行きたいところがある」と琴音をタクシーへ誘う。目的地は若草山（わかくさやま）。奈良公園の奥にある芝生の山だが、夜景スポットとしては地元の隠れた名所だと聞いた。

秋の夜風が冷えるため、琴音が無理しないか心配だったが、彼女は「ちょっとだけなら……」と微笑んでくれた。タクシーの車窓から夜の街並みが見えてくると、鹿の姿が闇に紛れているのがちらほら視界をかすめる。

やがて舗装された山道をゆっくり登り、頂上近くの展望スペースへ到着。ドアを開けると冷たい空気が一気に入り込み、琴音はマフラーをぎゅっと握る。

「わ……。結構寒いね。けど、きれい……」

「うん。ほら、奈良市内の街灯が一望できる。……ここ、あんまり観光客いないから、穴場なんだって佐久間が教えてくれたんだ」

簡易展望台のような柵の前に立ち、二人は奈良の夜景を見下ろす。遠方にはうっすらと橙色の街の灯が続き、空には星がちらほら。闇に溶ける鹿の影が足元を通ると、琴音は思わずくすっと笑う。

「奈良って本当に鹿が多いんだね。夜までふらふらしてるなんて……」

「家族連れよりも鹿のほうが多いかも。……あ、でも今日は俺たち以外誰もいないな」

一帯は静寂に包まれ、時折吹く風が木の葉をさざめかせる音だけが聴こえる。健吾は少し意を決したように、琴音の肩にジャケットをかけた。

「風、冷たいから……」

「ありがとう。……ごめん、せっかく案内してもらったのに、私、あんまり体力なくて……」

「そんなの気にしなくていいよ。むしろ、来てくれて嬉しい」

照れくさそうに笑う健吾。琴音は胸がきゅっと締まるほどその笑顔に安心感を覚えながら、ふと小さな声で口を開く。

「私……実はずっと身体が弱くて、母も若くして亡くなったの。だから、正直、自分も長く生きられないんじゃないかって……ずっと怖かったんだ」

闇夜に浮かぶ琴音の瞳には、うっすらと涙が滲んでいるようにも見える。健吾は静かにその言葉を受け止め、「そっか……」とだけ言う。

「でも、俺も……両親を早くに亡くしたんだ。だから家族のぬくもりとか、普通に暮らせる幸せっていうのが、どれだけ貴重か痛いほど分かる。……琴音さんの気持ちを完全には分からないかもしれないけど、少しは想像できる気がする」

健吾の声が震え、琴音は思わず俯く。自分の不幸を他人に理解してもらうなんて思っていなかったけれど、こうして少し共有できるだけでも救われる気がする。

「ごめんね、重い話。……でも、誰かに聞いてほしかったのかも。死ぬかもって思うと、普通の生活すら怖くて……恋とか、そんな余裕もなかったし……」
「恋……か。俺はさ、官僚辞めたとき、いろいろ吹っ切れたはずだったんだけど、結局自分がどう生きたいのか分からなくて……。だから、奈良に来たことも一種の気まぐれだったかもしれない。でも、不思議と後悔してない。特に、琴音さんと出会ってからは、なんか……世界が少し色づいた感じがするんだ」

夜景の淡い光が、二人のシルエットを静かに照らす。琴音は涙を拭いながら、健吾がくれたジャケットを握りしめる。

「私こそ……あの時街で倒れかけたとき、穂積さん——じゃない、健吾さんに助けてもらって……すごくほっとしたの。変だよ、まだ知り合ったばかりなのに」

「変なんかじゃないよ。俺だって、あのときすごく心配で……あ、いや……偉そうに言えないけど、もっとあなたのことを知りたいって思った」

視線が重なり、一瞬息が止まるような時間が流れる。琴音は小さく笑みをこぼし、ほんのわずかに健吾の腕に寄り添う。二人きりの夜の山頂、鹿の遠い鳴き声が背景に溶けるだけだ。

「ありがとう、健吾さん。……少し勇気が出た。私も、あともう少しだけ生きてみようって思うよ」

「“あともう少しだけ”じゃなくて、ずっと生きてよ。……俺、あなたのこと守りたいし……一緒に笑い合いたい」

琴音の胸に強い鼓動が広がる。こんな大それた言葉を、今の自分が受け取っていいのだろうか。でも、拒絶できない。頑なだった心が、健吾のまっすぐな瞳に溶かされていくようだ。

「……ありがとう。もう少しだけ、この景色を見ていたいな」

二人は肩を寄せ合って夜景を見下ろす。上空には星が淡く瞬き、下界には静かな光の海が広がっていた。秋の深まる気配に、少しずつ風が冷たさを増していくが、その中で二人の心はどこか温かい。

——これまでずっと孤独を抱えてきた琴音と、道に迷いながらも優しさを失わない健吾。若草山の夜空の下で、それぞれの痛みと希望が初めて重なり合った瞬間だった。

4. 明日へ向かう二人の想い

帰り道、タクシーの中で琴音は目を閉じ、健吾の肩にもたれるように小さく息をつく。心地よい疲労感とともに、胸が満たされていた。

（私、こんなに人と一緒に出かけたの、いつ以来だろう……。しかも、こんなに楽しくて嬉しい気持ちになるなんて……）

健吾も黙って琴音の方に手を伸ばしかけるが、遠慮してやめる。彼女の寝顔を見ていると、儂げな美しさが胸を切なくさせる。

——本当に琴音が呪いを抱えているのだとしたら、どうすれば救えるのか。自分の先祖にも何か関わりがあるのなら、何としても解き明かしたい。それが、健吾の新たな決意だった。

夜が更け、二人はそれぞれの家で休むことになるが、その胸にはあたたかな灯りがともっている。長谷寺の美景、春日大社のおみくじ、そして若草山の夜景——すべてが彼らの距離を深く近づけた一日だった。

「また明日も、明後日も、あなたと一緒にいたい……」

琴音はそう呟きながら布団に入る。どこか自分でも驚くほどの高揚感。死の影がぬぐい去られたわけではないのに、今だけはその恐怖を忘れてしまえる。

一方、健吾は狭いビジネスホテルの部屋で荷物を整理し、これまで調べてコピーした資料を見返しながら「絶対に守る」とつぶやく。自分の穂積家が琴音と同じ物部の血を引いているのなら、それはきっと無縁の話じゃない——何としても答えを見つけない。その時、再びあの不吉な古代の戦場の夢を見るかもしれないが、もう逃げる気はなかった。

秋の夜は静かに深まり、奈良の古都も闇に包まれていく。

しかし、二人の絆は確かに芽生え、琴音も健吾も、明日へ向かう思いを強くしていた。そんな彼らの幸せを、古代の因縁がじっと狙っているとは、まだ誰も知る由もない。

Chapter 5 見えざる因縁

1. 祖母への依頼

十一月上旬。奈良の紅葉がますます深みを帯び、朝夕の空気が肌を刺すほど冷たくなってきた。けれど、昼間の陽射しはまだ柔らかく、観光客も多く行き交う季節だ。

そんなある朝、穂積健吾は奈良市内の小さな喫茶店のテーブルで、スマートフォンを耳に当てていた。画面に表示されるのは祖母・和江（かずえ）の名前。コールの音が数回鳴ったのち、懐かしいしわがれ声が受話器の向こうから聞こえる。

「もしもし、健吾？ 珍しいわねえ。どうしたの？」

「ばあちゃん、久しぶり。ちょっと訊きたいことがあって……」

店内は朝の静けさとコーヒーの香りが満ちている。他の客は新聞を読んでいる初老の男性と、入り口近くの席でモーニングをとる女性客ぐらい。健吾は少し声を潜め、祖母に切り出す。

「ばあちゃんさ、前に言ってたよね？ うちの穂積は物部の家系で、饒速日命（にぎはやひのみこと）を祖神に持つとか……その証拠の古文書があるって」

「そうそう、蔵に古い巻物や家系図が残ってるわ。あんた、興味を示したことがなかったのに、どういう風の吹き回し？」

祖母の声音には、どこか困惑が混ざっている。健吾は微苦笑しながら、奈良に来た経緯を手短かに伝えた。祖母の住む家は東京にあるため、すぐに出向くのは難しいが、とりあえず存在を確かめておきたいのだ。

「実は奈良で調べものをしてて。何かヒントが欲しくてさ……ばあちゃん、もし写真か何か残してたら送ってこないかな？」

「写真ねえ……いいけど、あまり深入りするもんじゃないよ。あの血筋を辿ると、ロクなことにならないって、昔から言われてるんだからね」

祖母の言葉に、不意に胸がざわつく。血筋を辿るとロクなことにならない——物騒な響きだが、健吾は構わず「大丈夫、ただ資料として見たいだけ」と答え、会話を切り上げた。

電話を切った後、健吾はグラスの水を飲み干し、思考を巡らせる。穂積氏と饒速日命。なぜかト部琴音の「物部氏」との繋がりも頭をかすめ、漠然とした歴史の底が見えかけるような不安と好奇心が混在する。

2. 大神神社参拝と三輪山登拝の計画

翌週の朝早く。健吾は琴音と連絡を取り合い、「せっかくだから大神神社（おおみわじんじゃ）に行ってみよう」という話になった。琴音も幼い頃に何度か訪れた記憶があるらしく、三輪山がご神体として祀られている由緒を知ってはいるものの、まともに登ったことはないと言う。

「でも、三輪山登拝って、けっこう厳粛なんでしょう？ ルールとかもあるって聞きました」

琴音は薄手のコートを胸元で掴み、朝の冷たい空気に肩をすくめる。

「うん。朝8時から12時までに入山して、14時以降は無理みたいだし……。水以外の飲食はダメとか、撮影禁止とか、いろいろ気をつけなきゃいけないって」

健吾はネットで事前に調べていた情報を口にする。山頂まで登るのはかなりの行程だが、琴音の体調を考慮すれば、往復1時間ほどの序盤だけ覗くのも良いかもしれない。

「じゃあ、あんまり無理せず……三光の滝とかいう場所で折り返すのはどう？ そこなら小一時間程度らしいよ」

「三光の滝……聞いたことある。昔は滝行も行われてたって……」

「今はできないみたいだけどね。でも、清浄な空気が楽しめるらしい」

そんな話をしながら、二人は朝の大神神社を目指してタクシーに乗った。奈良市内から桜井市の三輪地区までは小一時間ほど。紅葉の色づく山々を眺めていると、少しずつ三輪山の特徴的な稜線が目に入ってきた。

3. 大神神社到着

大神神社に到着すると、二の鳥居の手前の駐車場でタクシーを降りた。鳥居をくぐり、神域の深い緑の樹々が生い茂る参道へ足を踏み入れると、確かに背筋が伸びるような清々しい空気が満ちている。

琴音はその場で深呼吸して、小さく吐息を漏らした。

「なんだろう……ここだけ空気が違う感じ。息がすっと通るといえるか……」

「だよ。三輪山自体がご神体だっていうし、神聖な場所だからなんだろうな」

拝殿へ至る参道をしばらく歩くと、老木が並び、玉砂利が敷かれた道が大きく広がっている。朝の陽射しが木漏れ日となって地面に模様を描き、数名の参拝者が静かに手を合わせていた。

二人も拝殿の正面へ回り、賽銭を投じ、まずは一礼する。「幸御霊奇御霊守り給え幸え給え」と唱え言葉を三度二人で唱和し、深々と二礼し二拍手した後、手を合わせ、健吾と琴音は目を伏せて祈る仕草を取る。そして一礼する。

「……私、実はずっと体が弱いから、今こうしてここに立っているのが嘘みたい。でも……健吾さんと一緒にいると、少し勇気が出るんだよね」

あまりにも素直な言葉に、健吾は照れながら笑い、声を落とす。「そっか……。なら、ちょっとでも楽しく登れるといいね。無理しないで、しんどかったらすぐ言って」

参拝を済ませた後は拝殿の左手の道を進み、その先にある摂社の狭井神社へ行き、登拝の受付をする。社頭で登拝の注意事項やルールを聞き、簡単な記帳を済ませてから、首から下げる布製の登拝証を受け取った。琴音はそれを胸にかけ、何だか少し照れ臭そうに笑う。

「本当に行くんだね、三輪山……。私、神社でこんな手続きするの初めてかも」

「俺も初めて。自分の脚力が心配だけど……とにかく出発しよう！」

4. 三輪山登拝

静かな山道に足を踏み入れると、途端に空気の温度が下がったように感じる。木々が生い茂り、朝の斜光が葉の隙間から差し込む。その景色はどこか荘厳で、まるで自然そのものが神であることを示すようだった。

「うわ……空気、冷たいね」

「うん……でも気持ちいい。大きく呼吸すると胸がすーっとする」

琴音は歩き始めて十分ほどで、少し息を整えるように立ち止まる。健吾も無理はさせまいとペースを落とし、「焦らなくていいよ」と促す。道の脇には苔むした岩や根が絡まった階段状の斜面がある。ときどき立ち止まり、木々の向こうを眺めると、まるで別世界に入り込んだ気分になる。

そして約二十分ほど上ったところ、目的の三光の滝へ至る分岐道が現れた。昔は修行者の滝行もあったというが、今は禁止されている。その滝の周辺には簡易な腰掛けが置かれ、小さな休憩所のようにになっている。

「ここが三光の滝か……意外と小ぶりの滝だけど、綺麗だな」

健吾が目を凝らすと、岩肌の上から細い水が流れ落ち、霧状に飛沫を漂わせている。滝の音はささやかだが、確かな水の息吹を感じさせる。琴音は涼やかな空気を味わうようにそっと近づき、ほのかな水音に耳を澄ます。

「なんだか……心が浄化される感じ。滝の水がきらきらして綺麗……」

「少しここで休憩しようか。せっかくだから滝をゆっくり眺めて帰ろう」

琴音は頷き、ベンチに腰を下ろして息を整える。森林の匂いとわずかな水のミストが肌を撫で、まるで心身を洗い流すような清涼感が胸に広がる。二人は言葉を交わさなくても、何かを分かち合うように滝を見つめていた。

やがて下山を始める。苔の生えた岩場が滑りやすくなっている箇所もあり、琴音が慎重に足を運ぶが、枯れ葉を踏んだ瞬間にバランスを崩した。

「きゃっ……！」

軽い悲鳴。足が滑った琴音が転びそうになるのを見て、健吾は慌てて腕を伸ばす。間一髪、琴音は健吾の腕にしがみついた形で倒れ込みを免れた。

「だ、大丈夫？ 足、ひねらなかつた？」

健吾は息を呑む。琴音の身体は思ったより軽く、そのまま胸に抱き寄せられた格好になり、心臓が早鐘を打ち始める。琴音も耳元が赤く染まっているのがわかるほど、はっとした表情で固まった。

「ご、ごめんね……助かった……」

「い、いや、こっちこそ……危ないから、ゆっくり降りよう」

二人は言葉を失いそうな気まずさと、心の底で生まれる甘いときめきを同時に感じ取る。ほんの数秒のことなのに、鼓動がやけに大きく響き、静かな山道に二人分の息遣いが溶けていった。

何とか無事に下山し、登拝証を返却したあと、境内へ戻った二人は茶屋で昼食を済ませると、タクシーを拾うまでの間、山の辺の道の入口あたりを散策した。

紅葉に染まる散歩道の先に古い石碑があり、ここから天理の石上神宮まで続くということを示す案内が立っている。

「山の辺の道って、古代からある日本最古の道なんだって。三輪山と石上神宮を結ぶ、物部や穂積の流れにも関係あるかもしれない……」

健吾がそんな話をすると、琴音は興味深そうに目を丸くする。

「物部と穂積って、同じ饒速日命を祖神とする一族なんでしょ？ もしかしたら、健吾さんの先祖もここを通ったのかな」

「かもね。ばあちゃんが言ってた古文書、気になるな……。俺の家にも、物部と同じ血が流れてるって話、まだ半信半疑だけど」

どこか遠い昔に繋がる道の風景を見つめながら、二人はしばし無言で歩く。風に揺れる落ち葉がカサリと音を立て、陽が傾き始めると、里山の影が長く伸びていった。

そして、ふと琴音が立ち止まってほほ笑む。

「このへん、静かで……。なんだか時間が止まってるみたい。さっき倒れかけたときはびっくりしたけど……」

「ほんとに。もし俺がいなかったら、危なかったね……」

健吾がからかうように言うと、琴音は小さく頬を膨らませて「もう……」と笑う。その仕草が妙に可愛らしく、健吾の胸はまたドキリとする。死の呪いを抱えていると語っていた彼女が、こんな柔らかな表情を見せるのは久しぶりだ。

(俺はまだ何も知らない。物部・ト部×穂積×蘇我の因縁がどう繋がるかも、よくわからない。でも……琴音と一緒にいられるなら、それを知る価値はあるんだろう)

そう心中で呟き、健吾は軽く頭を振る。遠くの山あいから風が吹き、枯れ草の匂いを運んでくる。そろそろタクシーで奈良市内へ戻る頃合いだ。

5. 帰路にて

夕方、二人はまた大神神社の駐車場に引き返し、タクシーに乗り込んだ。車窓に広がる三輪山の姿が、薄い朱色の夕焼けに照らされている。琴音は静かに窓越しに山を眺めながら「神様、ありがとう」と呟くように言った。

「健吾さんと一緒に山を歩けるなんて、私には夢みたい。これから……もっと強くなりたいな」

「大丈夫、きつとなれるよ。俺も手伝うし、無理しない程度にね」

そんな何気ない会話の裏で、饒速日命の血を引く穂積健吾、そして物部氏に連なるト部琴音という因縁が、ひそやかに絡み合い始めている。彼らを待つ運命を、いまだ誰も正確には知らない。

だが、このときふと健吾のスマートフォンが振動し、祖母から一通のメールが届いた。

——「古文書の写真を撮ってみたから、少しずつ送るね。気をつけてね」

短い文面とともに添付されている写真には、古びた書物に「饒速日命、穂積家の由緒」と墨書きされた表紙が写っていた。

(本当に、穂積氏も物部と同じ祖神を持つのか……?)

胸をざわつかせる疑問の種が、じわりと芽を出し始めた瞬間だった。車は夕闇のシルエットを背に、ゆっくりと走り出す。窓の外を流れる三輪山が、夕陽に抱かれて静かに沈んでいく。

そして、二人はまだ気づかない。見えぬ因縁が徐々に形を取り、迫りくる闇が琴音の命を脅かす日に近づいていることを。三輪山に感じた神聖な空気が、彼らを護る力となるのか、それとも何らかの試練を暗示するのか——その答えは、やがて苦しい現実の形をとって目の前に現れるだろう。

車内の沈黙を破るように、健吾と琴音は笑い合いながら今日の登拝を振り返る。だが、二人の穏やかな笑顔の背後で、因縁の歯車がゆっくりと回り始めていた。次の瞬間に待ち受ける痛ましい試練は、まだ誰にも見えないまま——。

Chapter 6 “死”の兆し

1. 幸せな秋的一幕、そして不穏な影

深まりゆく秋の光が、奈良の町をやわらかく彩り始めていた。まだ日中は暖かさが残るものの、夕方にかけて冷たい風がひとつぶねの落ち葉を舞い上げる季節。

そんな昼下がり、穂積健吾とト部琴音は、奈良駅近くの商店街を連れ立って歩いていた。通り沿いには柿や鹿をモチーフにした和菓子や土産物が並び、秋の観光客でどこも賑わっている。

「健吾さん、見て。柿の最中(もなか)だって……ほんとに柿の形に似てるのね。可愛いし美味しそう」

「ああ、これも奈良名物らしいな。一緒に買って味見してみるか？」

琴音は少し照れくさそうに微笑んだ。以前より表情に活気が出てきたように見える。彼女自身、体調を崩しがちな日々を抱えてはいるが、近頃は健吾との外出を増やし、奈良の街を少しずつ好きになり始めていた。

一方で、健吾も心なしか弾んだ足取りだ。大学時代以来、思い切り誰かと“デート”らしい時間を過ごすのは久しい。琴音の笑顔を見ると、胸がじわりと温かくなる。

「こうして街を一緒に回るの、楽しいな。昔は……あんまりこういう散策とか興味なかったんだけど」

「ふふ、私も。人混みは苦手だったけど……不思議ね、あなたと歩いてると、なんだか穏やかな気持ちになるの」

琴音は自分でも驚くほど素直に言葉を重ねる。健吾の優しい空気は、男性に苦手意識を抱いてきた琴音の心を、少しずつ解きほぐしていた。

彼らが連れ添って商店街を奥へ進むほど、軒先に並ぶ秋の商品の彩りや、観光客の笑い声が鮮やかに混じり合い、まるで二人を祝福するかのような明るい雰囲気漂う。

そんなとき、不意に健吾の視界に妙な存在が映りこんだ。ふと人波の先を見ると、黒いコートを着た男がこちらを覗きこむように立ち止まっている。髪色ははっきりしないが、その切れ長の眼差しは鋭く、不穏な空気をまとっているように見えた。

——誰だろう。観光客の姿とは明らかに違うし、妙に視線を向けてくる気がする。

(何だ……あいつ……?)

健吾は一瞬、足を止めかけたが、男はすぐに通行人の後ろへ紛れるように消えていった。胸騒ぎを覚えながら、周囲を見回すが、その姿はもう見当たらない。

琴音が「どうしたの?」と不思議そうに首をかしげる。健吾ははっとして笑みを取り繕った。

「あ、いや、何でもない。見間違いかな……」

「そっか。……でも、なんだか肌寒いね。人も多いし……もう少し奥まで歩いたら、どこかで休憩する?」

「うん、そうしよう。あんまり無理はするなよ」

そこまで言いかけた瞬間、健吾の中に得体の知れない不安が芽生える。黒いコートの男の視線が心に焼きついて離れない。深まる秋の日差しが、妙に陰りを帯びて見えるのは気のせいかな。

琴音は相変わらず楽しそうに店先を眺めているが、その瞳が一瞬、痛みに耐えるように伏せられるのを健吾は見逃さなかった。

2. 街角で崩れゆく体——胸を刺す最後の一言

商店街を抜け、ちょっとした広場のようなスペースに差しかったところで、人混みがいっそう増えてきた。琴音の顔色が少しずつ青ざめていくのを感じて、健吾は「無理しないで」と声をかける。

しかし、琴音はうっすらと笑みを作るだけで、言葉を返さない。息の調子が乱れているのだろうか。彼女の額には微かな汗が浮かんでいる。

「ごめん……。ちょっと、休みたいかも……」

「わかった、近くにベンチが——」

その言葉が最後まで届く前に、琴音の身体がぐらりと揺れた。周囲の人波がざわめき、健吾はとっさに腕を伸ばすが、琴音の膝が抜け、意識が遠のくのがわかる。

倒れる瞬間、琴音が微かに声を漏らす。

「……健吾さん……まだ、私は……あなたと……」

その短い一言は、まるで途切れた想いを宿したまま空中に溶けるようだった。健吾は必死に琴音を抱きとめるが、彼女の瞳は既に閉じている。名前を何度呼んでも反応がない。

「琴音さん!? うそ……起きて……!」

観光客の何人かが足を止め、「大丈夫ですか?」と声をかけ始める。健吾は震える手でスマートフォンを取り出し、すぐさま119番へかけようとするが、動揺で指がうまく反応せず、焦りで呼吸も荒くなる。

すると、近くにいた学生風の女性が、「救急車呼んでます!」と叫んでくれた。健吾は琴音の頬をさすりながら声を張り上げる。

「琴音さん、しっかりしろ……!　すぐ救急車が来るから……!」

人々が遠巻きに心配そうに見守る。その視線の中、健吾は恐怖に押しつぶされそうだった。ほんの数分前まで笑顔で話していた彼女が、今、手の中で意識を手放している。

ふと顔を上げた先、通りの向こうで再び黒いコートの男が立ち止まり、こちらを見ている気がした。まるで遠くから状況を観察するような、冷ややかな視線。それを確かめようと瞬きをした刹那、男の姿はまた人混みに飲まれ、消えていった。

(なんだ……あいつは……くそっ、琴音がこんな時に……)

救急車のサイレンが遠くから近づき、商店街の雑踏をかき分けて到着する頃、健吾の心は既に限界寸前だった。脳裏には彼女の最後の言葉「まだ、私は

あなたと……」がこだまする。続きを言えなかった想いを、彼女に返してやることはできるのだろうか。

3. 救急車の中——緊迫した応急処置

救急隊員が素早くストレッチャーを下ろし、琴音の脈拍を測定、血圧を確認する。健吾も同乗を許され、急いで彼女の手を握りながら搬送される。

「心拍数が乱れてます！ 血圧も低い！」

「酸素投与します。モニター装着！」

隊員同士のやり取りが鋭く飛び交い、車内で機械音がピピピと鳴り始める。健吾は横たわる琴音の顔色の悪さに胸が潰れそうだ。

点滴の針が静脈に差し込まれ、幾つかの薬剤名が口頭で伝えられる。救急隊員がマスクを琴音の口元に当て、酸素濃度を調整する。

「大丈夫、すぐ病院に着くから……」

健吾が声をかけるが、彼女は微かな呼吸しか感じられない。救急隊員はときおり健吾に「顔が近い、少し離れて」と指示しつつも、彼の焦りを察して言葉を荒げることはない。ただ「すぐ搬送しますので！」と励ますように告げる。

救急車のサイレンが街を突き抜け、遠くのビルを揺らすように響く。外の景色が流れていくなか、健吾は琴音の手の冷たさに耐えかねて泣きそうになる。何より、さっきまでの幸せそうな笑顔が脳裏に焼きつき、現実とのあまりの落差が胸をえぐる。

(どうか……助かってくれ。琴音さん……)

4. 病院での必死の治療

奈良市内の総合病院に到着すると、医師たちが慌ただしく琴音を処置室へ運び込む。心電図や採血などが一気に行われ、モニターが不安定な波形を示すたびに医師が指示を飛ばす。

健吾は入り口で看護師に制止され、中には入れない。ガラス越しに見えるのは、必死で蘇生措置を施される琴音の姿——心臓マッサージこそ必要ないようだが、酸素マスクや薬剤投与などの重篤対応が続いている。

「早くバイタルを安定させるんだ。心拍が乱れてるぞ！」

「はい、ボスミン準備！ 点滴ライン増やします！」

医療スタッフの緊迫した声が響き、健吾の喉は乾き切る。まるで自分が息をすることすら許されないような絶望感に苛まれながら、彼は額に汗を浮かべてドアの前で立ち尽くしている。

——どれほど時間が過ぎただろうか。

やがて医師が「ふう」と小さく息をつき、看護師が布をかけ直しているのが見える。その表情は深刻ではあるが、最悪の事態は免れた様子だ。

ほどなくして医師が健吾のもとへ足早に寄り、「とりあえず一命は取り留めました。意識はまだ戻りませんが、急変は落ち着いたので集中治療室に移します」と告げる。

安堵と恐怖が混ざった感情が一気に健吾を襲い、思わず壁に手をつけて肩で息をする。

(よかった……でも、どうしてこんなことに……？ 何が原因なんだ?)

このとき佐久間が遅れて到着し、落ち込む健吾の背中をそっと支える。

「健吾、こっちは任せろ。俺も医療関係のツテをフル活用して原因を探る」

「頼む……マジで、頼む……」

健吾は絞り出すように声を漏らす。病院の廊下に響く静謐な空気の中、心臓の鼓動だけが耳を打ち続けていた。

5. ト部家の呪いと、それぞれの行動

しばらくしてト部静香が病院に到着し、看護師からの説明を受けると、蒼白な顔で壁にもたれかかる。琴音の母や祖母の死が、まざまざと蘇っているのだろう。

静香は「やはり……ト部家の女に生まれてしまったら、こうして命を奪われるのね……」と苦しげに呟き、涙をこぼす。

「そんなことは……」

「でも、もう……分からないのよ。何がいけないのか……どうすれば救えるのか……」

健吾はその言葉に胸を締め付けられる。呪いなんて、現代の医療がある時代に馬鹿げた話だと思いたい。でも実際、原因不明の発作が琴音を襲い、医師ですら手をこまねいているという事実が、彼の心を揺さぶる。

佐久間は頭を掻きながら、「ここは俺が医療方面で全力を尽くす。健吾、お前は……何か心当たりがあるんだろ？」と真剣な目を向ける。

「……ああ、実は祖母の家に父が残した古い資料があるかもしれない。もしかしたら、物部とか穂積とか、そういう先祖の伝承が琴音さんの呪いに関係しているかもしれない」

「じゃあ、行ってみろよ。時間が惜しい。俺はこっちで調べられる限り調べるからさ」

「ああ……ありがとう。頼む」

静香も弱々しく頷き、「お願い……琴音を救えるなら、何だってして」と声を震わせる。

健吾は唇を噛み、「必ず助ける……呪いなんか、絶対に負けない」と心の中で固く誓った。

6. 不穏な視線——再び現れる黒いコートの男

夜に近づく頃、病院の廊下は面会時間も終わりかけていて、人の行き来が減ってきた。救急外来のざわめきから少し離れた場所で、健吾と佐久間は簡単に情報を共有しあう。

「俺は明日、まず大阪の大病院の知り合いに連絡を取る。希少疾患や免疫系の専門医だ。急ぎ対応をお願いしてみる」

「頼もしいな。何とか頼むよ……」

二人が固い握手を交わして別れようとしたそのとき、廊下の隅で妙な気配を感じる。健吾が視線をやると、やはり黒いコートの男が立っていた。

——先ほど琴音が倒れる直前にも見かけた、あの不気味な男。切れ長の瞳が、まるで冷たく笑っているかのようにこちらを見据えている。

健吾は反射的に足を踏み出すが、男はすぐに背を向けて角を曲がるように消える。まるで、状況を監視しているかのようだ。

「おい、ちょっと……！」

思わず呼び止めようと声を上げるが、廊下を折れた先にはもう姿がない。佐久間が「どうかした？」と首をかしげる。

「いや……変なコートの男が……さっき琴音さんが倒れたときもいたような気がするんだ。気のせいかもしれないけど……」

「……言われてみれば、非常口のほうに誰かいたかもな。知り合い？」

「いや、違う。初めて見る顔だし……何か……嫌な感じがする」

佐久間は苦い表情で、「念のため警備員に話しておくか」と呟く。健吾は頷きながら、やり場のない不安を抱え込んだまま、病院のロビーを後にした。

秋の夜風が肌を冷たく包み、遠くで鹿の鳴き声が風に乗って微かに聞こえる。闇が深まる奈良の街に、どこか不吉な影が落ち始めている。琴音の目はまだ覚めず、原因すら判明しない。黒いコートの男は一体何者なのか——。

しかし、今は立ち止まってはられない。健吾は拳を固く握りしめ、（必ず助ける）という思いを心に刻む。次なる手がかりを求め、祖母のもとへ向かう決意を胸に灯しながら、暗い路地を急ぎ足で歩き出すのだった。

Chapter 7 神力の呼び覚まし

十一月中旬。冷え込みが次第に厳しくなり、病院の窓から見える外の風景も、枯れ木や落葉の色彩がやや寂しげに感じられる頃——ト部琴音の入院生活は、いまだ暗いトンネルを抜け出せないままだった。医師から「危険な状態が続く」と言われ、いくつか検査を受けているものの結果は芳しくない。

容態が急変するかもしれない、という不安を抱えながら、穂積健吾は日々を過ごしている。そんなある朝、健吾は病室で眠る琴音の姿を見つめ、ひそかに決断を固めていた。

1. 祖母への連絡、そして倉に眠るもの

「本当に大丈夫か、健吾……」

大学友人の佐久間和彦が廊下の自販機前でコーヒーを買いながら、心配そうに声をかける。佐久間は医学関係のツテを使って琴音の治療法を探り、希少疾患の情報収集に奔走していた。

健吾は小さく息をつきつつ、その背を叩くように礼を言う。

「ありがとな、佐久間。お前のおかげで少しは可能性が広がりそうだ。でも……正直、それだけじゃ足りない気がしてるんだ」

「……やっぱり、原因不明ってのがネックだよな。医療的に打つ手が見当たらないと、時間ばかりが過ぎていくし……」

健吾はちらりとナースステーションのほうに目をやり、声を落とす。

「実はさ、ばあちゃんから昔聞かされてた話……‘穂積家にも先祖にまつわる古文書がある’ってやつ。気になるんだ。琴音のト部の家と同じく、物部氏の末裔だとか、饒速日命（にぎはやひのみこと）に繋がる血筋だとか……正直、最初は胡散臭いと思ってた。でも今は、それが何かヒントになる気がするんだよ」

佐久間は眉を上げ、「へえ……奇妙な縁だな。物部の血の呪いとか言ってたけど、まさか健吾の先祖まで絡んでるとは思わなかったよ。で、どうするんだ？」

「ばあちゃんの家は東京なんだけど……今から行って蔵を調べてくる。琴音が急変したら困るから、できればすぐ戻りたいけど……行くしかない。それに、こっちにいても俺は何もしてやれない」

健吾は唇を噛み、「琴音がこのまま死んでいくのを見てるわけにはいかない」と決意を込める。佐久間はひとまず頷き、「わかった。琴音ちゃんの容態は、俺も看護師に確認しておくし、何かあったら連絡する。お前はできる範囲で動いてこいよ」と背中を押した。

そうして翌朝、健吾は早めに病院に立ち寄り、まだ浅い眠りに沈む琴音の顔を確認してから、新幹線に乗り込んだ。ひとえに「ばあちゃんの蔵にある古文書を探す」という目的だが、その心は混乱に満ちている。

古文書に何が書いてあろうが、医学的には無意味かもしれない——しかし、卜部家の女たちの早世を真面目に「呪い」と呼ぶ静香を見ていると、何か得体の知れない力が働いているのではないかとすら思えてくる。それに、自分の先祖が本当に饒速日命の末裔なら……物部氏と穂積氏が繋がるのなら……。

(琴音を救う手がかりが、そこにあるかもしれない)

健吾は車窓を流れる景色を眺めながら、何度も自分に言い聞かせた。

半日ほどの移動を経て、健吾は祖母・和江（かずえ）の家に到着した。住宅街の中に古めかしい平屋が一棟。玄関先には、和江が小柄な体を丸めるように立っている。

「よく戻ったねえ、健吾。あんたの彼女が倒れたって……大丈夫なのかい？」
「正直、危ないみたい。だからばあちゃん、昔言ってた‘穂積家に伝わる系譜や古文書’を見せてほしいんだ。何かヒントになるかもしれない」

祖母は少し困惑した表情を浮かべる。

「そんなもの見たって、現代の医学には役に立たないんじゃないの？」

「そうかもしれない。だけど、俺は何でもいいから琴音を助ける手段を探したい。……頼むよ、ばあちゃん」

和江はしばし沈黙し、「そうね」とうなずくと奥へ案内した。家の裏手には古い蔵があり、鍵を外して扉を開けると、黴くさい空気がむわりと流れ出す。積み上げられた木箱や古道具の山をかき分けた先、頑丈な箱が一つ鎮座していた。

「これよ。ずっと先代から受け継いできた‘穂積家の古文書’。開けるなら覚悟しなさい。下手をすると、変な因縁に囚われることになるかもね」

ばあちゃんの半ば冗談めいた口ぶりにも、健吾は真剣な眼差しで蓋を外した。黄ばんだ和紙の巻物や書物が詰まっており、虫喰い痕もちらほら見受けられる。

手探りで一つひとつを取り出すと、「穂積」「饒速日命」「物部」といった字が目飛び込んできた。後世に書き足されたらしい注釈も混じり、難解な漢字や仮名が入り乱れている。

「やっぱり……ばあちゃんの言ってたとおり、‘穂積氏は饒速日命を祖神とする’って書いてある。あれって本当だったんだな」

健吾はわくわくよりも恐れに似た感情を覚える。琴音の祖先が物部氏であり、自分も同じ源流に連なるかもしれないという事実が浮かび上がってくる。その背後には千四百年を超える因縁が眠っているのだろうか。

「ふん、昔から家系図めいた巻物はあったけれど……まさか本気にする日が来るなんて思わなかった。何が書いてあるの？」

「よくわからないけど、‘物部’と‘穂積’が同祖ってことや、饒速日命が最初に大和へ降臨した話が詳しく載ってる。……古代史の資料みたいな感じ」

焦げ茶色に変色した紙を指でなぞりながら、健吾は妙な胸騒ぎを覚えた。琴音が入院している原因不明の病、その背後にある『卜部家の女は早世する』という呪い——もし本当に歴史的ルーツが絡んでいるなら、何か手立てがあるかもしれない。

そして、物部氏の存在が強く示されると同時に、ふと脳裏に黒いコートの男の姿がよぎる。あの冷たい視線。もし彼がこの“因縁”に深く関係しているのなら……。

2. 石上神宮へ向かう決意

蔵の発掘を一通り終え、居間で書類の写真をスマホに撮った健吾は、祖母・和江が淹れてくれた緑茶をすすりながら考え込む。

「奈良に‘石上神宮（いそのかみじんぐう）’って神社があるでしょ？ 物部氏の氏神を祀ってるとかいう……。俺、そこへ行ってみようと思う。何か解呪とか病気平癒の祈りとか、そういうものがあれば、琴音を救えるかもしれない」

和江は茶碗を置き、「気休めになるかどうか……。でも、あんたがそう思うなら行ってきなさい。たしかに石上神宮は物部の古い神社だし、呪術や鎮魂祭も伝統があるようだけど……」とため息をつく。

「うん、やってみるしかない。ばあちゃん、ありがとな。写真撮らせてもらったし、あとでゆっくり解説してみる。とりあえず今日はもう奈良に戻るよ。琴音の容態が心配だから」

夕刻の光が横から射し込み、家の障子を赤く染める。健吾はあわただしく荷物をまとめ、祖母と短い別れの挨拶を交わす。その瞳には固い決意が浮かんでいた。

夜遅くに奈良駅へ戻り、健吾はまず病院に駆けつける。看護師によれば、琴音の容態は相変わらず不安定。だが、幸いにも今日のところは急変はなかったらしい。

病室をそっと覗くと、静香が付き添っており、佐久間はどこかへ連絡するため席を外している。琴音は浅い呼吸で眠っているが、顔色は青白く、さっきより衰弱しているように見える。

「ごめん、何も変わってない？」

健吾が囁くと、静香は疲れた目で首を振る。「時々目覚めても、ほとんど会話できないわ。医師も手探りで……本当にどうしたらいいのか……」

「大丈夫。俺、少しヒントを得てきたから。明日、石上神宮ってところに行ってみる。物部氏の神社らしいから……もしかしたら呪いを祓う力があるかもしれない」

静香は信じられないという顔をしつつ、琴音の手を握りしめ、「……頼むわ、健吾さん。私にはもう祈ることしかできないから……」と声を震わせる。

闇が深まる病室の窓の外で、街灯がぼんやりと光る。健吾はそっと琴音の手の甲に触れ、その冷たさを感じて胸を痛めた。

3. 石上神宮との邂逅

翌朝、健吾は比較的早い時間に病院へ顔を出し、看護師と静香に「何かあったらすぐ連絡してください」と念を押してからタクシーで石上神宮へ向かった。場所は奈良県天理市。山辺の道が貫く歴史の古層に位置する神社だ。

朝の光が薄く差し込む参道の鳥居をくぐると、鬱蒼とした森が広がり、社殿のほうへと伸びる石段が静かに出迎える。冷んやりとした空気が微かな水気を含んでおり、思わず身震いするような神聖な気配と、ずしりと霊威を感じる。

「ここが……石上神宮……」

健吾は胸に込み上げるものを抑えつつ石段を上り、拝殿の前に出た。周囲にはご神鶏（しんけい）と呼ばれる鶏たちが自由に歩き回り、時折くくっ、と短い声で鳴く。その光景がどこか異世界めいていて、不思議な安堵を与える。

遠くから聞こえる鈴の音に誘われ、社務所を訪ねると、白衣と袴姿の神職が応対してくれた。

「いらっしゃいませ。ご祈祷でしょうか？」

「ええ……病氣平癒の祈祷をお願いできないかと思って。あと、可能なら宮司さんにお話を伺いたくて……」

神職が少し訝しげに首を傾げるが、健吾の真剣な表情を察したのか「少々お待ちください」と奥へ通してくれる。そこには古い木の建築が連なり、廊下越しに視界が開けると、一人の落ち着いた声が響いた。

「ご用件を伺いました。私はこの石上神宮の宮司、物部道忠（もののべ・みちただ）と申します」

和やかながらも凜とした雰囲気をもった初老の男性が、健吾を出迎える。横には巫女装束をもった若い女性が立っていた。

「すみません、突然押しかけて……。俺は穂積健吾と言います。大事な人が原因不明の病で倒れていて……。何とか助けたいんです」

健吾は深く頭を下げ、必死の想いを伝える。道忠は静かに目を細め、「なるほど、病気平癒のご祈願ですね。もちろん当神宮でも祈祷は行っております。ですが、普通の祈祷とは少し異なるご相談のご様子……。？」と勘づくように問いかける。

健吾は躊躇いつつも、卜部家の呪いの話や、自分が穂積氏であること、さらに古文書から饒速日命との関連を感じたことを簡潔に語った。巫女の若い女性——名前を物部沙弥香（さやか）というらしく——は驚いたように目を見開く。

「物部氏と穂積氏の同祖説ですか……。饒速日命を祖神とする一族だと古くから伝わっていましたが、まさか現代にこうして繋がりを意識される方が来られるとは。それに、卜部姓こそが改姓して物部氏再興後も歴史の表舞台から姿を隠した直系、本家筋だと当社には記録があります」

彼女の声には不思議な興味が混じり、道忠も「興味深いですね」と深く頷いた。

4. 祈祷と古文書の存在

「わかりました。まずはご祈祷を行いましょ。あなたの大切な方が病で苦しんでおられるのなら、我々にできることはすべてやりたい。実は近々、十一月

二十二日に鎮魂祭も控えておりまして……物部氏に伝わる古い鎮魂の儀を執り行う時期でもあるんです」

道忠が丁寧に説明するのを聞きながら、健吾は思わず胸が熱くなる。ここで何か糸口を掴めるかもしれない——ト部家の呪いを解く手掛かりがあるかもしれない。

「本当にありがとうございます。ぜひ、祈祷をお願いしたいんです」

「では、社務所のほうで受付を済ませてください。特別に病氣平癒の念も強く込めましょう。あなた自身もご参列いただく形になりますが……もしよければ、祈祷のあとに少し私どもの‘古文書’をお見せできるかもしれません」

「古文書……？」

道忠は微笑を湛えて続ける。「当神宮には、物部氏の伝承や鎮魂術に関する古文書が残されています。ふだんは公開しておりませんが、あなたの事情を鑑みれば、参考になる部分があるかもしれない。もちろん、あまり刺激的なものではありませんが……」

健吾は感謝の気持ちで頭を下げた。琴音を救うためなら、どんな情報でも欲しい。一刻も早く形にしていきたいと願う。

祈祷所へ案内されると、薄暗い社殿の奥に簡易の祭壇が設けられていた。松明や燭台による柔らかな火が揺れ、幾柱もの神々を迎えるための準備が整っている。巫女たちが控え、鈴の音がごくかすかに響く。

健吾は白い襷を渡され、「まずは心身を清めるつもりで、深い呼吸をしてお入りください」と言われる。緊張に喉が渇き、手のひらが汗ばむ。

「大丈夫ですよ。怖いものではありませんから」

そう声をかけてくれたのは、巫女の沙弥香だ。彼女の穏やかな声に励まされながら、健吾は祭壇の前に正座し、静かに頭を下げた。

祝詞が始まると、一気に空気が張り詰める。幣（ぬさ）が振られるたびに、鈴の音が闇を裂くように耳を打つ。健吾は琴音の姿を思い浮かべながら、“どうか助けてほしい”と必死に願う。

5. 幻視——飛鳥時代の戦乱

祈祷が進むにつれ、健吾は体温が急上昇するかのような感覚に襲われた。目を閉じているのに、何か視界の端が赤くちらつく。意識がふわりと浮き上がり、別の時空へ飛ばされるような——。

「うっ……！」

思わず声を漏らした瞬間、視界が一変した。そこは夜の戦場。燃え盛る炎が建物を舐め、刀と刀が激しくぶつかり合う音が耳を裂く。男たちの怒号、馬のいななき、血の臭い——まるで実際にそこにいるかのように鮮烈だ。

遠くで「物部を絶やせ……！」という叫び声がこだまする。火の粉が闇夜に舞い散り、かすかな悲鳴や咆哮が交錯する。恐怖に足がすくむが、健吾の身体はまるで幽霊のようにそこに立ち尽くすだけで、何もできない。

（これは……飛鳥時代……？ 物部守屋が蘇我馬子と戦ったという、あの……！）

どこかで聞いた史実が脳裏をかすめる。くぐもった視界の中、甲冑姿の武将がこちらへ突撃してきたと思うと、真横で誰かが斬り伏せられ、鉄のにおいがむせ返る。

そして、燃え上がる炎の向こうに、冷たい目をした男のシルエットが映る。高笑いを上げながら、「物部を根絶やしに……！」と叫んでいる。その姿はまるで——黒いコートの男を想起させる何か。

（あいつは……？ 蘇我馬子……？）

次の瞬間、視界に閃光が走り、激しい耳鳴りに襲われる。頭が割れるような痛みでうずくまりそうになるが、身体が思うように動かない。まるでこの地獄

絵図に縛られているかのようだ。

人々の悲鳴が遠のき、血と煙が空を覆う。最後に聞こえたのは「勝ったのは蘇我だ……物部は終わりだ……」という叫び。そこにかすかに混じって、「呪いだ……血が絶えない……」という怨嗟が絡みつく。

ぷつりと映像が断たれ、健吾は社殿の床に手をついて息を荒げていた。額には冷や汗が滲み、心臓が激しく鼓動している。周囲の巫女たちが慌てて近づき、道忠も駆け寄って肩に手を置く。

「穂積さん、大丈夫ですか？ いま、すごい怯えた顔をされていましたが……」

「お、俺……さっき、飛鳥時代の戦乱を見たような……物部守屋と蘇我馬子が戦ってる……血みどろの光景を……」

言葉が震える。これが何かの妄想なのか、それとも祈祷によって神秘的な力が働いたのか。理屈では理解できないが、体験した恐怖が肌にこびりついている。

道忠は神妙な面持ちでうなずき、「やはり……物部氏×穂積氏、そして蘇我氏の因縁が、あなたの血を揺さぶったのかもしれない。祈祷の際、神々があなたの先祖の記憶を断片的に見せたのかも……」と静かに呟く。

周囲の巫女たちはそっと距離を取りながら、鈴と祝詞を再開する。心なしに、その響きが健吾を落ち着かせていくようだった。

(ただの幻覚とは思えない。何か……強烈な意志がそこにあった。まるで蘇我馬子の怨念が今でも残っていて、物部を滅ぼそうとしているみたいに……)

6. 破邪の力の兆し

「すみません……こんな大騒ぎになって」

落ち着きを取り戻した健吾は社殿の隅で呼吸を整えつつ、道忠や巫女たちに頭を下げる。道忠はむしろ深刻そうに顎に手をやった。

「いいえ、むしろ有意義な体験かもしれません。あなたは穂積の血を引き、物部の末裔とも同源の素質を持っている。もしかすると‘破邪の力’を扱う資質があるのではないのでしょうか」

「破邪の力……？」

「はい。石上神宮は、布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）を祀り、古来より‘邪を祓う剣’として崇敬されてきました。物部氏は武器や刀剣の製造などを司り、強い破邪の力を信仰していたとも言われています」

健吾は無意識に胸元を押さえる。あの幻視で感じた痛みや炎は、単なる夢以上にリアルだった。あの戦乱の余韻がまだ身体に残っているようで、心拍数がいつもより高い。

「あなたが先ほど見た‘蘇我馬子が物部守屋を滅ぼす’光景は、千四百年前の歴史。けれど、もし蘇我氏が今なお転生し、物部を根絶やしにしようとしているなら……その邪気を祓う力が、あなたに必要となるかもしれません」

道忠の言葉に、健吾は一瞬息を呑んだ。まさかそんな非現実的な話が……と理性は否定したが、琴音の容態や黒いコートの男の存在を思い返すと、まったく馬鹿にできなくなる。

「じゃあ、俺は何か修行みたいなことをすれば、破邪の術が身につく……んですか？」

恐れながらも健吾は問いかける。琴音を救うためなら、何だってやってみようという覚悟がある。道忠は頷き、視線を巫女の沙弥香へ向けた。

「そうですね……祝詞や剣を用いた祭式の所作など、基本を学ぶことで力を呼び覚ます可能性はあります。実際、当神宮には11月22日に‘鎮魂祭’という古式の祭典があり、ここでは強い破邪の呪法も演じられる。もし間に合うなら、そこに向けて学んでみませんか？」

「鎮魂祭……。11月22日って、あと数日後ですね。琴音がその日まで持てば

……」

健吾は胸を苦しくさせた。時間があまりにも短い。病院では「いつ悪化してもおかしくない」と言われている。だが、希望があるなら掴むしかない。

「お願いします。何でもやります。……石上神宮で習得できるものは全部学びたい」

強い眼差しで答えた健吾に、巫女の沙弥香がやや感動した風に微笑み、「私ができる範囲でお手伝いします。お辛いでしょうが、あなたの大切な人を救うために、一緒に頑張りましょう」と静かに述べる。

7. 苦悶と決意

その後、健吾は社務所の一角で道忠に古文書の一部を見せてもらった。色あせた巻物には、物部氏が代々受け継いできた鎮魂祭の起源や、先祖が饒速日命から授かったとされる十種神宝の話などが記されている。

更には「物部守屋が蘇我馬子に討たれた後、物部の血統が隠棲し、蘇我の呪詛を免れつつ再興を果たした」という内容らしき断片もあった。読んでいるうちに、寒気が背筋を這い上がる。

「もしこれが本当なら……蘇我氏が滅んだ後も、物部は生き延びていた。そして今なお子孫がいる……それがト部家、そして穂積家にも繋がっているってことか」

「可能性は高いですね。蘇我氏が完全に物部を絶やせなかったことが、彼らの滅亡につながった……という考え方もあります。あなたが見た幻視の最後には‘呪いだ、血が絶えない’といった声がありましたよね」

道忠が神妙に語ると、健吾はゴクリと唾を飲む。琴音が苦しむ“呪い”は、この歴史の暗部から続くものなのか。さらに、あの黒いコートの男が“蘇我氏の転生”か何かだとしたら……寒気が増すばかりだ。

「とにかく、俺は石上神宮で破邪の力の基本を教わって、琴音を助けたい。病院では何もできなくて……でも、こうして動けば、少しは希望が見えそうで

……」

健吾は強い決意を口にするが、その瞳には不安もちらつく。沙弥香がやわらかな笑みで言葉を添えた。

「穂積さん、まずは祈祷と軽い所作の習得から始めましょう。夜には病院へ戻り、大切な人を見守ってあげてください。短い期間ですけど、できるかぎりお力になれば……」

「ありがとうございます。……琴音のためにも、俺は絶対あきらめません」

石上神宮をあとにするとき、健吾は拝殿を振り返り、胸に熱いものを感じていた。ここには歴史を超えた力がある。もし“呪い”が本当に存在するなら、それに対抗する術もきっとあるはず。

けれど、琴音がその日まで命を保てるかどうか大きな問題だ。医師は「容態が安定しない」と嘆いていたし、黒いコートの男の不気味な姿も頭から離れない。まるで時間が切り刻まれていくようで、焦燥に胸が焼かれる思いがした。

8. 奈良への帰路、そして再び病院へ

夕方、健吾は再度病院へ向かった。車窓から眺める町並みは紅葉が色褪せ始め、どこか侘しさを帯びている。石上神宮で得た教えと、あの幻視の衝撃がまだ冷めやらないまま、琴音の姿を思うと胸が苦しくなる。

病棟に入ると、佐久間がちょうどナースステーションで医師と話し込んでいた。こちらに気づくと、「よお」と手を挙げ、しかめ面で近づいてくる。

「琴音さん、また熱が上がったみたいだ。坂下医師が言うには‘ただの風邪とも違うし、免疫が暴走してる可能性もあるが断定できない’って。病巣がわからん以上、対処療法しかないらしい」

「そっか……ありがとう。俺のほうは石上神宮に行ってきたよ。やっぱり物部氏の神社だっていうし、いろいろ教えてもらった。破邪の力なんてものがある

らしくて……」

健吾が熱心に語ると、佐久間は首を傾げる。「破邪……？ そりゃオカルトだろ。いや、否定はしないけどさ。医学でもどうしようもないなら、すぎる気持ちちはわかるよ」

ふいに扉が開き、静香が顔を出す。「あ、健吾さん……！ 琴音、さっき少し目を覚ましたの。でも苦しそうで……何か力になれないのかしら」

彼女の声には焦りと悲痛が混じっている。健吾は深く息を吐く。

「俺、石上神宮で‘鎮魂祭’に向けて修行みたいなことをするつもり。もしそれで呪いが祓えるなら……。とはいえ、時間がない。琴音があと何日もつか……」

微かな沈黙が三人を包む。佐久間は書類を握りしめつつ、意を決したように言った。

「わかった。じゃあ俺は引き続き、医学方面を頑張る。県外の専門病院への転院も検討できるかもしれない。静香さんにも協力してもらって、手続きや書類を整理しよう。健吾、お前は神社とか、そういうルートを当たれ。二方面作戦だ」

「助かる……ありがとう、佐久間」

病室に入り、琴音の顔を覗き込む。浅い呼吸の合間に、かすかな声が漏れた。「……健吾……さん……来て、くれたの……」

「うん。大丈夫か？ 痛いところない？」

琴音は弱々しく首を振る。「痛いより……重い感じ。胸が……苦しい。ごめんね……こんなことになって……」

その瞳はかすれた光を宿し、申し訳なさど不安とが入り混じっている。健吾はそっと彼女の手を握り、精一杯の穏やかさを装って言う。

「謝ることないよ。俺、何とか方法を探してるから。……石上神宮に行ったんだ。物部の神様を祀ってて、破邪の力で呪いを祓えるかもしれないって。だか

ら諦めないで」

「……ありがとう……でも、私……ほんとは……少し、こわい。母や祖母みたいに、死んじゃうんじゃないかって……」

彼女の震える声に、健吾は胸が潰れそうだった。だが、その手を強く握り返し、静かに言葉を重ねる。

「大丈夫。死なせない。絶対に……。ト部家の女は早世するなんて言葉、俺がひっくり返してやる。だから少しだけ踏ん張ってくれ」

琴音はわずかに涙を浮かべ、「うん……」と頷いた。病室の点滴スタンドが微かに揺れ、モニターの機械音が二人の間を埋めるように鼓動を刻む。

——どうか、間に合ってくれ。鎮魂祭まで、あとわずかしかない。今はまだ“兆し”でしかない破邪の力を、本物に育て上げられるのか。あの幻視に現れた恐るべき蘇我馬子の怨念、そして黒いコートの男の存在——何もかもが闇のなかでうごめいている。

(けど、やるしかない。俺が琴音を救うための力を手に入れるんだ)

健吾は決意を噛み締め、優しく琴音の手を撫で続けた。廊下の先から夜の風が染み込み、晩秋の冷気を背後から押し寄せさせる。その冷たさが、彼の心を奮い立たせもした。

こうして、神力の呼び覚ましへの道が開かれようとしている。古代史の底から蘇った因縁が、奈良の地で現代の命を翻弄する中、健吾は破邪の術を身につけるため、そして琴音の命を繋ぐために、石上神宮へと通う決断を下すのだった。

……次なる一手は——あの得体の知れない男との正面衝突を避けられない運命を孕んでいるかもしれない。だが、それでも進むしかない。

夜の病室で、琴音が眠りに落ちるまで手を握りしめる健吾の姿は、静かでありながらも熱い闘志を秘めていた——。

Chapter 8 黒いコートの男の正体

十一月中旬も半ばを過ぎた頃、奈良の朝晩の冷え込みはいっそう厳しさを増した。卜部琴音の病状は一向に回復せず、医師からは「あと数日ももたないかもしれない」という厳しい言葉すら囁かれ始めている。

穂積健吾は、石上神宮で見せられた衝撃的な幻視——物部守屋と蘇我馬子の戦乱の記憶——を胸に、必死に破邪の力の手がかりを探していた。しかし、一方で病院に足を運んでは、刻一刻と衰える琴音の姿に絶望感を拭えずにいる。

1. 奈良市内の朝、冷たい告知

「……血液検査の結果は、特に目立った異常が見られないのですが、全身状態がどんどん悪化しているんです」

担当医・坂下が、病院の会議室でモニターを示しながら説明する。健吾は隣に座る静香と佐久間和彦を横目に、息を飲んでいく。

モニターには琴音の各種数値が並んでいるが、そのどれもがじわじわと悪化傾向を示している。貧血、体力の消耗、心拍の乱れ——原因が特定できないまま、身体が壊れていくような様子だ。

「つまり……このままだと、あと数日も持たないってことですか？」

静香の声が震える。坂下は苦しい表情を浮かべ、「すべてがそうなるとは限りませんが、危険な状態であることは変わりません。僕たちも集中治療をしているんですが、正直手立てがないんです……」と唇を噛む。

健吾は机の縁を握りしめ、「ほかの専門病院へ転院とか、何かできませんか？」と食い下がるが、医師は苦い顔をするばかり。

「医療連携のあらゆるルートを当たっていますが、どこも同じ意見です。『原因不明の衰弱』では、適切な対処法が見つからない。すみません……」

謝罪の言葉とともに会議室を出ていく坂下。その背中に絶望感が漂う。

静かになった部屋に、佐久間がむずがるように息を吐く。「くそ……医学でも手詰まりかよ。俺も調べたけど、国内に似た症例がほとんどないんだ」

静香は目を伏せ、「呪いだなんて馬鹿げてると思ってたけど……本当にそうとしか思えない」と涙声をこぼす。

健吾は唇を噛んだまま、「俺……石上神宮で教わってる破邪の術をもっと急がないと」と呟く。琴音の命の砂時計が刻々と減っているのを感じ、焦燥が胸を焼く。すると佐久間が、いつになく真剣な眼差しを向けてきた。

「わかった。お前は神社とかそっち方面を頼む。俺は引き続き、医学的なアプローチでしつこく情報を洗う。静香さん、そっちもいいですね？ 一刻も無駄にできないから」

「ええ……もちろん。どうか、どうか琴音を助けてやってください」

まるで戦場の作戦会議のような空気が漂う。健吾は決意を固め、佐久間と一度視線を合わせて力強く頷いた。

2. 病室の前に立つ黒い影

午前中の面談を終え、健吾が廊下を急ぎ足で歩いていると、どこからか冷たい視線を感じて思わず足を止める。誰かに見られている……。

振り返ると、少し離れた病棟の通路に、見覚えのある黒いコートの男が立っていた。静かに、しかし異様な存在感でこちらを見つめている。

(あの男……！ 前にも病院で見かけた、不気味な奴だ)

健吾の背筋に戦慄が走る。なぜこの男が琴音のいる病院に何度も姿を現すのか。偶然にしては不自然すぎる。

いつもなら声もかけられないほどの圧を感じるが、琴音が瀕死の状態にある今、怯んでいる暇はなかった。思い切って足を向けると、男は口の端をわずかに歪ませ、コツコツと靴音を響かせながら近づいてきた。

「お前……何のつもりだ？ この前も廊下にて、琴音を見つめてたよな。何が狙いなんだ！」

健吾が怒りをこめて詰問すると、男は軽く顎を上げて冷笑する。浅黒い瞳が、まるで獲物を値踏みするかのように細められた。

「狙い……？ そうだな。言うなれば『復讐』か。俺にはまだやるべきことが残っていてね」

「復讐……？」

健吾は眉を寄せる。男の言葉には妙な古臭さというか、時代錯誤な響きが混ざっている。一体何と戦っているのか、この現代において。

「まさか……琴音の病と関係してるのか？ お前が何かしたのか！」

叫びたい衝動を抑えきれず拳を握るが、男はまるで子供を見るような目で鼻先を鳴らす。

「俺の目的は、物部の血を断つことだ。もちろん、穂積も同祖なら同罪だろう。一挙に消すまで……この恨みは晴れないさ」

物部、穂積、恨み——聞き慣れない単語が連なり、健吾の頭が混乱する。ただ一つわかるのは、「こいつは琴音を殺す気である」と言っているに等しい。

「ふざけるな……琴音は今、苦しんでるんだぞ。お前……何者なんだ！」

声を荒げる健吾。すると男はゆっくりと口角を上げ、まるで招かれざる客を楽しむように薄笑いを浮かべる。

「……名乗ってもいいだろう。俺は石川龍馬（いしかわ・りょうま）。もっとも、その名は仮初めのもの……本質は、蘇我馬子（そがのうまこ）。千四百年前、物部を滅ぼしたはずだったが、完全に断ち切れなかった……その代償で蘇我氏は滅んだ。それが悔しくてならないのさ」

「……蘇我馬子？ そんな馬鹿な！」

健吾は呆れに似た動揺を露わにする。蘇我馬子は飛鳥時代の豪族で、645年の乙巳の変より前に亡くなっている人物——そんな歴史の授業レベルの知識しかないが、それが現代に転生しているというのか。

龍馬はあざけ笑うように唇を歪めた。「お前に信じろとは言わないさ。だが、俺は蘇我氏再興のために転生を繰り返してきた。そしてこの奈良の地で、最後の仕上げをしに戻ってきたんだ。物部を生かしたことが蘇我の破滅を招いた……だからこそ、今度こそ根絶やしにしてやる」

「お前……正気じゃない。そんな荒唐無稽な話、受け入れられるわけが……！」

龍馬はコートの襟を正し、あたりを見回す。病院スタッフが遠巻きに何かと様子を伺っているが、彼の眼光に気圧されて近づけない。

「正気かどうかは関係ない。俺はこの国を握っていた蘇我氏が、物部を滅ぼしきれなかったせいで乙巳の変で滅び去ったのを憎んでいる。血は絶やさなきゃならない……ト部琴音も、穂積健吾も同じ。お前らの先祖が生き延びたばかりに、蘇我が失墜したんだからな」

健吾のこめかみが熱くなる。まさか琴音の命を奪おうとする張本人が、こんな形で目の前に立っているとは。

「やめろ……琴音には手を出すな。もし関わってるなら、今すぐ治せ！」

声を荒らげる健吾に、龍馬は挑発するように薄笑いを浮かべる。

「治す？ そんな慈悲があると思うか？ あの娘は勝手に衰弱して死ぬだろうよ。仏教に抗した罰だ……物部は血を残すに値しない。お前もいずれ始末するさ」

あまりに苛立ち、健吾は拳を握りしめて一步踏み込むが、龍馬は微動だにせず、鋭い視線を返すだけ。

「無駄だ。まだお前には力がない……せいぜい足掻くがいいさ。まもなく残された日数も尽きるだろうからな」

その言葉を最後に、龍馬は踵を返して堂々と廊下の奥へ歩み去る。健吾は彼の背中に何かを言おうとするが、看護師が「すみません！ 廊下での大声は……」と制止に入ってきて、行く手を阻まれてしまう。

結局、龍馬はエレベーターホールへ姿を消していった。

3. 極限の告知と健吾の決意

龍馬が去ったあと、健吾は肩で息をしていた。背筋にじっとりと汗が滲んでいる。

（蘇我馬子の転生……？ そんな夢みたいな話、あり得ないって言いたいの、こいつらの呪いが現実に琴音を蝕んでるんじゃないか……）

そのまま血走った目で病室へ駆け込むと、静香が真っ青な顔で立ち上がる。
「健吾さん……どうしたの、そんな怖い顔して」
「今……黒いコートの男がいて、琴音を……つまり物部を滅ぼすとか……わけのわからないこと言ってた。やっぱり何か仕掛けてるんだ。呪いだか怨念だか知らないけど……！」

静香は息を呑むように震える。「そ、そんな馬鹿な……でも、確かに琴音が倒れたときから、あの男をちらちら見かけるって話を聞いて……」

二人のやりとりの背後では、酸素チューブや点滴に繋がれた琴音が、うわ言のように微かな声を漏らしている。モニターの音が不規則に波打ち、医師が再度検査をするため出入りを繰り返していた。

やがて坂下医師が申し訳なさそうに姿を現し、「すみません、また深くなりそうな話ですが……」と切り出す。

「正直なところ、今夜が峠かもしれない。あまりにも衰弱が激しく、最善を尽くしていますが、奇跡的な回復が起こらない限り、持たない可能性が高い……」

その言葉に静香は膝から崩れ落ちそうになり、健吾が肩を支える。
「そんな……まだ数日はあると思っていたのに……」
「すみません……私もここまで急に容体が落ちるとは考えていませんでした。深夜に急変すれば、救命措置すら効果がないかもしれない……」

医師の言葉が突き刺さり、病室は重苦しい沈黙に包まれた。健吾の頭には龍馬の嘲笑が蘇り、怒りで胃が焼けそうになる。

(こんなところで諦められるか……！ ト部家の呪いだとしたら、解いてやる。石上神宮の破邪で、絶対に……)

4. 佐久間のサポートと作戦

静香が震える手で琴音の額を撫でていると、廊下のほうで足音がし、佐久間が顔を出す。彼は険しい表情ながらも、どこか決意を秘めている。

「健吾、少しいいか。……実は俺、県外の国立病院やレア疾患専門のクリニックに片っ端から打診してるんだ。正直『今すぐ転院』は無理でも、いくつかの研究医が興味を示してくれた。もし既存の病名と判明すれば、一筋の光があるかもしれない」

健吾は小さく頷く。「ありがとう。俺は逆に……黒いコートの男の正体が‘蘇我馬子の転生’だなんて信じがたいが、どうも本気で琴音を狙ってるようだ。……だから石上神宮で、破邪の術を習い続けるしかないんだ」

佐久間は少し苦笑いしつつも、「分かった。オカルトじみてるけど、この状況じゃ何に頼ってもおかしくない。病院のことは任せろ。お前は神社ルートに死に物狂いでやれ。二方面で同時にアクションすれば、どこかに打開策があるかもしれない」

「助かる……。龍馬って男は、どうやら物部や穂積の血を一掃しようとしてる。琴音は言わばターゲットだ。だから一刻も早く‘呪い’を断ち切らないと……」

佐久間は肩をぽんと叩き、「お前が諦めない限り、奇跡だって起きるさ。琴音ちゃんが死ぬなんてあり得ない。俺もまだ粘ってみる」と微笑む。その優しさが健吾の胸をじんわり温めた。

(間に合え……鎮魂祭まではあと数日しかないけど、何とか琴音が生き延びてくれれば、俺は必ず破邪の力を身につけてみせる)

5. 龍馬の闇

一方、その日の夜、奈良市内のビジネス街にあるビルの一室。そこでは黒いコートの男——石川龍馬が薄闇の中、パソコンと古文書の山を前にしていた。

部下らしき藤堂（とうどう）という男が、テーブルに並ぶ紙資料を整理している。「龍馬さま……あのト部琴音という女性は、もう病院で死にかけの状態だとか。わざわざ呪詛を完成させる必要もないのでは？」

龍馬は低い笑みを浮かべ、書類の一枚を指で弾く。そこには「物部」や「穂積」といったキーワードが散見され、注釈が細かく書き込まれている。

「慎重に事を運ぶ。どんなに死にかけでも、確実に息の根を止めるまで気は抜けない。物部を完全に葬るのが蘇我馬子たる俺の使命だ……。昔、丁未の乱であれほどの血を流したのに、しぶとく子孫が残ったせいで、乙巳の変で我が蘇我氏は滅び去ったのだからな。生き残った物部が中大兄皇子と中臣鎌足と通じて、裏で手引きをしていたのはわかっている。その恨みは忘れん」

龍馬の瞳には狂気の光が宿る。その口から語られる古代の出来事は、自身の体験としか思えないほど具体的かつ憎悪に満ちている。

「馬子様……今度こそ、物部も穂積も根絶やしに……。そして、蘇我が再興を果たすのでしょうか？」

藤堂の問いに、龍馬は嗤うように頷いた。「ああ、かつて仏教を導入し物部を叩き潰した蘇我馬子の力は、現代でも通用するさ。文明の形が変わっただけで、本質は同じ……。俺がこの奈良で‘最後の呪詛’を完成させれば、歴史の因縁は断ち切れ、蘇我が甦る——この国の支配者となれるだろう」

机上には小さな護符が何枚も重なり、電子ファイルの画面には不気味な凶形が映し出されている。古の呪術と現代のテクノロジーを融合させたかのような、異様な光景。

龍馬は窓の外を見下ろし、冬近い夜景に笑みを溶かす。「やがて、鎮魂祭の日が来る。そこで全てのけりをつける。あの愚かな物部の末裔どもに、もう一度地獄を味わわせてやるさ……」

6. それぞれの道へ——追い詰められた時間

その深夜、病室では琴音が苦しげに浅い呼吸を繰り返し、静香が水を口元に運んでやる。「少しでも飲めたら……。苦しい？ ああ、もう……。どうしてこんな……」

看護師がバイタルサインを測り、「急に熱が上がっています。いつでも呼べるよう、ナースコールを押してください」と言い残して去る。

ベッド脇に座る静香は、鬼気迫る表情で「琴音、死んじゃだめよ……。あな

たまでいなくなったら私は……」と、必死に声をかけるが、琴音はかすかに瞳を開くものの、言葉にはならない。

一方、病室の外で健吾は佐久間と短く言葉を交わす。「あの黒いコートの男、‘石川龍馬’って名乗った。蘇我馬子の転生だって……正気の沙汰じゃない」

佐久間は腕を組み、唇を曲げる。「そうか……名前まで判明したのか。それを警察に言っても取り合ってくれなさそうだが……一応不審者として警備に頼めないか？」

「そうだな……でも、相手が普通じゃない。警備に声をかけたところで止められるかどうか。とにかく俺は石上神宮へ行って破邪を学ぶ。琴音が死ぬ前に、この呪いをどうにか解きたいんだ」

佐久間は苦い笑みを浮かべ、「お前の覚悟は分かった。俺も昼間のうちにできる限り調べてみる。お前は夜でも病院に来てやれ。絶対、こいつに気を抜くなよ」と肩を叩く。

残された時間はわずか。琴音の命の火が消える前に、呪いを解く手段を掴むことはできるのか。

黒いコート——龍馬＝蘇我馬子の転生体は「鎮魂祭の日」を狙っていると健吾はうすうす感じていた。石上神宮で十一月二十二日に行われる古式の祭礼。そこに何か決定的な衝突が待つのは間違いない。

(早く、力を……破邪の術を俺のものにしないと、琴音が……)

7. 病室での再会、愛ゆえの誓い

翌朝、健吾はまだ安定しない琴音を見舞うため、病室に入る。静香が仮眠を取っている横で、彼はベッド脇の椅子に腰を下ろす。

薬で浅く眠っている琴音のまつげがかすかに震え、「……けん……ご……さん……」と微かな声を絞り出す。

「琴音……無理するな。大丈夫か？」

優しく手を握ると、彼女は弱々しく首を横に振り、「……私……ほんとに死んじゃうのかな……って……怖い……」と涙を滲ませる。

健吾の胸がぎゅっと締めつけられる。言葉が詰まるが、それでも絞り出すように言う。

「死なない。絶対死なせない。俺……石上神宮で破邪の術を学ぶから。あいつ……石川龍馬とかいう変な男が何か仕掛けてるんだ。俺はそれに対抗して、お前を守るよ」

琴音はうわごとのように、「……ありがと……でも、あなたまで巻き込まないで。私、いつ死んでも不思議じゃないし……」と呟く。

健吾はその言葉に強くかぶりを振った。「馬鹿言うな。巻き込まれてもいい。お前が生きてくれるなら、俺は何でもする。……だから、最後まで諦めないでくれ。頼む……」

ほんのわずかだけ、琴音の口元に微笑の形が浮かぶ。「……うん……」

か細い呼吸の音が病室に響き、朝日の差すカーテン越しに埃の粒が舞う。健吾は琴音の手の冷たさを感じながら、闘志を燃やす。

(絶対に助ける。俺はもう何も失いたくない。龍馬がなんだろうと、呪いを断ち切ってやる)

8. 破局の足音

病院の廊下を出ると、佐久間が待っていた。「どうだ、琴音ちゃんは？」
「まだ危ない。医者も明日、明後日が正念場だって……。俺は今から石上神宮へ行って、道忠宮司に破邪の術を教わる。数日後には鎮魂祭もある。そこが勝負所だ」

佐久間は何度もうなずき、「オーケー。こっちも医療面で足掻き続ける。龍馬とかいう怪人物にも警戒する。もし病院で妙なことが起きたらすぐ連絡するから、気を付けろよ」と真剣な目を向ける。

健吾は深く頷き、足早に出口へ向かう。心の中には不安と怒りが渦巻いていた。黒いコートの男——石川龍馬＝蘇我馬子の怨念が本当にこの時代に生きているのなら、もう一度物部を滅ぼすつもりなのか。

(琴音が死んでしまうなんて、絶対に許さない……)

奈良の冷えた空気が外套の間から入り込んで身を震わせる。空は曇天で、やがて冷たい雨を落としそう。健吾は自分を奮い立たせるように息を吐き、タクシーに乗り込む。

向かう先は石上神宮——そこでは、十一月二十二日の鎮魂祭に向けた準備が佳境を迎えようとしている。宮司の道忠や巫女の沙弥香が待つ神域で、健吾は破邪の術を習得するため日々を費やすのだろう。

琴音が救われるかどうか、まさに瀬戸際の戦いが迫っている。龍馬という絶対的な悪役の登場によって、事態は一気に破局へ向かう足音を高めていく。

——あと数日で、すべての決着がつくのかもしれない。

風が木々を揺らし、晩秋から初冬へ移ろう奈良の街が、静かにその覚悟を受け止めるように見えた。そして病院の四階、琴音が眠る病室には、切ない息遣いだけが響き続ける。

彼女の命を繋ぐため、健吾は龍馬との対峙を避けられない運命を受け入れる決断をする。果たして蘇我馬子の狂気を止められるのか。それとも、呪いが再び悲劇を生むのか——波乱を孕んだまま、夜の奈良へと時間が流れていくのだった。

Chapter 9 鎮魂祭への布石

十一月も下旬に差しかかり、奈良の朝は冬を感じさせる冷気に包まれはじめた。紅葉も色づきのピークを過ぎ、木々は落葉を迎えて風に散りながら、来る冬へと静かに移ろっている。

一方で石上神宮の境内は、11月22日に斎行される大切な神事、鎮魂祭に向けて忙しさを極めていた。宮司・物部道忠をはじめとする神職たちは、早朝から社殿を清め、古書や神具を点検し、儀式で使用する舞台を整備している。

1. 石上神宮、例年になく張り詰めた準備

石畳の参道を歩くと、落ち葉が淡い茶色のじゅうたんを作っており、ご神鶏の一団が境内の一角で小さな声を立てている。普段はのんびりムードの神宮も、この鎮魂祭前は独特の緊迫感が漂う。

幣殿（へいでん）や拝殿の周辺には、歴史的な神具や巻物が並べられ、神職や巫女が確認の声をひそやかに交わしていた。

「鎮魂呪法の古書は、こちらの箱に……。はい、先代から伝わる巻物もすべて揃っています」

「神宝の剣形（けんがた）や鈴、そして灯明の用具など、今のうちに最終点検を」

バタバタと走る足音のなか、宮司の道忠が落ち着いた口調で指示を出す。

「くれぐれもミスのないように。鎮魂祭は日程を変えられない。万全の体制で臨まねば……」

道忠の横顔には普段よりも厳粛な色が宿り、周囲の神職たちも背筋を伸ばして応じる。外では冷たい風が吹きすさぶが、神職の衣擦れの音が、どこか張り詰めた緊張感をさらに煽るようだった。

2. 健吾、修行の日々へ

そんな中、穂積健吾は、朝から石上神宮の社務所の一室に籠もりきりだった。卜部琴音の命が風前の灯火となる中、少しでも早く破邪の術をモノにしようと必死だ。

健吾は、宮司が渡してくれた古い祝詞の写しを読み込み、さらに巫女・物部沙弥香の指導のもと、剣舞（けんまい）のような独自の儀式動作を身に刻み込んでいた。

「……この剣を胸の高さで捧げ持ち、息を整える。祝詞は腹から声を出して、言霊（ことだま）を震わせるイメージで……」

沙弥香が優しい声で説明すると、健吾は汗を拭きながら、何度も動作を繰り返す。神剣の代わりに使う木剣を両手で握りしめ、床に足を踏みしめて深呼吸。

「ふう……っ。はぁ……分かりました、やってみます」

だが、その工程は想像以上に体力と集中力を要した。肩で息をしながら、「こんなに……大変なんですね」と苦笑いする健吾。

沙弥香は穏やかな笑みを浮かべながら、祝詞を手本に唱えてみせる。澄んだ声が部屋の空気を清めるようで、健吾はその声に合わせて必死に真似していく。

「もともと物部氏は破邪や護国の役目を担う家系とも言われますから、あなたにも資質があるはずです。ただし、技術だけでなく心の在り方が大切。雑念を払い、琴音さんを救いたいという純粋な想いを祝詞に乗せるのです」

「はい……。俺、必ず琴音を救いたい。それだけは絶対に揺らがない」

その言葉を聞き、沙弥香はホッとしたように笑みを返す。「なら大丈夫。その方のためにも、続けましょう」

3. 修行のステップ：祝詞と剣舞

狭い稽古用の部屋で、健吾は木剣を頭上にかざし、腹から声を張り上げる。「ひふみよいむなや こともちろらね しきるゆるつわぬ そをたはくめかうおゑにさりへて のますあせえほれけ……！」

基本の「ひふみ祓詞」。口にすると同時に、祝詞独特のリズムが身体の奥へ染み込んでいくような感覚がある。古代から続く言霊の力——それが健吾の胸に温かい光を灯し始めるのを感じ、同時に全身が熱を帯びてくる。

「ひとふたみよいつむななや ここのたり、ふるべゆらゆらとふるべ……」 「十種祓詞」の一節、「布留の言」は、十種神宝（とくさのかんだから）の力で死んだ人でも生き返るほどの元気がいただける、霊力の強い言葉だと言われている。

「……どうやら、少しずつコツを掴み始めたようですね」

道忠がふと現れ、健吾の所作を見定めながら言う。紙をめくって古い文献を示し、「これが当神宮に伝わる‘破邪剣舞’の基礎。かつて物部氏が邪を断ち切るために舞ったとも伝えられます。あなたの中に流れる血が反応しているかもしれません」

健吾はその文献を覗き込み、墨書きされた古図やメモに目を凝らす。刀を振る独特の軌道と、祝詞の節回しが詳細に記されていた。

「不思議だ……これを読みながら動くと、身体の芯が燃えるような……。まるで自然に体が覚えているみたいな感覚があります」

「それこそ、穂積氏×物部氏の同祖の血。饒速日命（にぎはやひのみこと）を祖とする流れが、現代に息づいているのかもしれない」

道忠の声には期待と重厚な責任感が滲んでいた。「十一月二十二日、鎮魂祭であなたには‘破邪の神事’を担ってもらいます。時間はありませんが、どうか死に物狂いで修めてください」

健吾は拳を握り込み、「分かりました。あと数日……まるで無謀かもしれないけど、やるしかない」と息を吐く。琴音が瀕死の状態では病院に横たわっている姿が脳裏をよぎり、胸が熱くなる。

（間に合わなきゃ意味がない。死ぬ気で修行するんだ。そうすれば、きっと琴音を救えるはず）

4. 龍馬の暗躍：呪詛の完成へ

同じ頃、街の中心部にそびえるオフィスビルの一室では、黒いコート姿の石川龍馬と、その部下・藤堂が静かに怪しい儀式の準備を進めていた。

薄暗い室内の机の上には、護符や儀式用の文様が描かれた紙が散らばり、電子機器のモニターには不穏なデータが並ぶ。龍馬は椅子に深く腰掛け、指先で護符を弄びながら闇の気配をまとっている。

「……もうすぐ鎮魂祭か。卜部琴音はギリギリまでもちこたえているようだが、その苦しきも長くはないだろう」

藤堂がモニターを確認しつつ報告する。「病院の内部から得た情報では、本当にいつ死んでもおかしくない状態だそうです」

龍馬は退屈そうに頷き、「まあ構わん。死にかけてるならそれでよし。だが、万が一、奴らが何かしらの‘破邪’に成功して、物部の血を救うような真似があれば面倒だからな。鎮魂祭でとどめを刺す……徹底的にな」

その声はまるで壊れた情念を抱える亡霊のよう。蘇我馬子としての恨みを晴らすため、千四百年を生きてきた狂気が透けて見える。

藤堂は慎重に言葉を選ぶ。「はい……私も呪詛の最終段階を整備中です。石上神宮は靈威が強い場所ですが、それを逆手に取って反動を増幅すれば、破邪ごと壊滅できるかと」

龍馬の唇が薄く歪む。「それでいい。徹底するんだ。今度こそ物部を逃がさない。この国を再び‘蘇我’の手に取り戻す……」

脇机には飛鳥時代の史料が開かれ、丁未の乱や乙巳の変の記述が走り書きされている。龍馬はその文字をなぞるように指を動かし、かつての記憶を呼び覚ましていた。

5. 琴音の病室：ぎりぎりの命

翌日、健吾は石上神宮での稽古を終えるとタクシーで病院へ急行した。夜の面会時間ギリギリに間に合い、琴音の病室へ入ると、佐久間と静香が交互に付き添っていた。

琴音はまばたきもままならない様子で、管だらけの身体を微かに震わせている。モニターが警告音すれすれの数値を断続的に鳴らす、医師も「これ以上打つ手がない」と首を振るばかりだ。

佐久間が小さく溜め息をつき、「医師には転院の話をしてみたけど、やっぱり難しいな。本人がこの状態じゃ、移動中に容態が尽きる可能性が高いつて

……」

「そうか……。ありがとう、いろいろ動いてくれて。でも、何とか持ちこたえてほしい。俺は今、破邪の術を必死で身につけようとしてるんだ」

健吾の瞳には焦りが色濃く浮かんでいた。きっとあと数日で鎮魂祭が始まる——そこまで琴音が生き延びれば、あるいは奇跡が起きるかもしれない。

静香が目に涙を溜め、「本当に呪いなんて……信じがたいけれど……もしあなたが破邪を成功させられるなら、どんな奇跡だって待ってると思いたいわ」と声を震わせる。

健吾は力強く頷き、そっと琴音の頬に手を伸ばす。「もう少し……耐えてくれ。絶対に助けてみせるから」

6. 深夜の稽古、沙弥香の導き

翌夜、健吾は再び石上神宮へと向かい、閉門後の静かな境内を沙弥香に案内されながら修行を続けていた。

拝殿の灯りは落とされ、細い提灯の光だけが神楽殿周辺を照らす。夜気は冷たく、鼻先や指先がかじかむほど。それでも健吾は木剣を握り、必死に身体を動かす。

「この動作のとき、心臓の鼓動と祝詞のリズムを一体化させます。息を吸って‘ひふみ、よいむなや、こと、もち、ろらね……’、吐くときに刃筋を通す」

沙弥香の優しい声が静まりかえった拝殿に響く。神域の闇を破るように、健吾は剣先をしなやかに振り下ろし、同時に強く祝詞を唱えた。

「……ひふみ、よいむなや、こと、もち、ろらね……！」

一瞬、神剣の写しが手の中で微かに光ったように感じる。頭の奥で、石上神宮の主祭神・布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）が鼓動するかのよう波動が伝わり、健吾の胸が熱くなる。

沙弥香は息を呑み、「すごい……いま確かに光が揺らいだ気がしました。布都御魂大神の破邪の力が、あなたの意志に反応しているのかもしれない」と

瞳を輝かせる。

健吾は肩で息をし、「正直、自分でも何が起きてるのか分からない。でも、体の奥が‘燃えるような力’を感じるんだ……。これなら龍馬にも対抗できるかもしれない」

夜風が社殿を吹き抜け、ご神鶏が遠くでかすかな声を上げる。かの鶏たちは鎮魂祭の準備が分かるのか、どこかいつもと様子が違う。

沙弥香はそっと健吾の袖を掴む。「でも……その男は本当に危険だと思います。宮司様も、ここ数日で強い邪気のようなものが奈良の空気に漂うのを感じるとおっしゃっている。気を抜かないで」

「分かってる。あいつは‘蘇我馬子の転生’を自称し、物部の血を断つとか言ってた。琴音に止めを刺す気だ。俺は絶対に阻止する。石上神宮には、鎮魂祭の最中に乱入するんじゃないかと思う」

沙弥香は瞳を伏せ、結灯台の揺れる炎を見つめる。「……だからこそ、健吾さんの破邪が必要なんです。私たち神職だけでは、蘇我馬子の転生体の呪詛を完全に退けられるか分からない。物部と穂積の血を合わせ持つあなたなら、きっと……」

健吾はその励ましに微笑み、「がんばる。琴音を助けられるなら、俺は命を賭けてもいい」と告げ、剣を握った掌を改めて固く結んだ。

7. ラストスパート、鎮魂祭の前夜

さらに二日が過ぎ、いよいよ11月21日。石上神宮では総仕上げの準備が行われていた。幣殿や拝殿に捧げる神饌（しんせん）のチェック、当夜に使う灯明や神具のレイアウト確認、そして鎮魂呪法の古書の最終点検。

健吾も朝から神宮に詰め、沙弥香とともに修行を続けるが、夜になって病院へ駆け込み、琴音の容体を確認するという往復を繰り返す日々。身体は悲鳴を上げていたが、彼の心が折れることはなかった。

一方の琴音は、奇跡的にまだ息を繋いでいた。医師は「不思議だ……こんな状態で、どうやって持ちこたえているのか」と首を傾げるばかり。佐久間は「まだ望みは捨てられない」と静香を励まし、病院内であらゆるサポートを担っている。

そんな彼らの努力とは裏腹に、龍馬はビジネス街で最後の呪詛の算段を固め、藤堂が裏から病院内の情報を探っている。陰と陽が背中合わせになり、鎮魂祭の前夜へ向けて緊迫感が極まっていく。

8. 祭りの刻限、決断の夜

11月21日の夜遅く。拝殿前に集められた神職たちが道忠を囲むようにして最終会議を行っていた。

「明日、11月22日の夕刻から天神社・七座社の例祭を行い、その後本社で鎮魂祭に移る。鎮魂呪法と古式の儀を厳粛に進め、深夜前には終わる見込みだ。――しかし、もし外部の邪気が乱入してきた場合、警戒態勢を取らねばならん」

道忠は幣を両手で支え、渋い面持ちで一同を見回す。沙弥香を含む数名の神職が心配そうに顔を合わせる。

「正直、石川龍馬なる男が何者かは断定できません。だが、この神宮に強い邪念が迫っているのは確か。皆で協力し、社殿を守り抜きましょう。鎮魂祭の日程は古くから絶対に動かさない。何としても当夜にすべてを無事終えねば」

神職たちが固く頷き、それぞれが配属先の仕事に戻っていく。最後に道忠は健吾と目を合わせ、「あなたの破邪の術が鍵になる。もし乱入があれば、布都御魂大神の靈威を解放し、呪詛を払うのだ」と重々しく告げる。

健吾は浅く息を飲んで、「はい……琴音を救うためにも、必ずやり遂げます」と応じる。胸の内に不安が渦巻くが、それ以上に強い決意が燃え盛っていた。

9. 夜の電話、佐久間からの報せ

その夜、社務所で休んでいた健吾のスマートフォンに着信が入る。画面には佐久間の名前。

「もしもし？ どうした、こんな時間に」

受話口から佐久間の低い声が響く。「琴音ちゃん、正直やばい。いつ息が止まってもおかしくない状態だけど、なぜか心拍だけギリギリ維持してる。医師も『奇跡的』って言ってるんだ……」

「そっか……まだ……生きてるんだな」

ほっと胸を撫で下ろしながらも、崖っぷちである状況に変わりはない。健吾は唇を噛む。

「もう鎮魂祭は明日の夕方だろ？ 間に合うのか……？」

「分からない。でも……頼む、あと一日だけ琴音が持ちこたえてくれれば、俺はそこで全力を尽くす」

佐久間は静かに息を吐いて、「お前、本当に凄いよ。俺が同じ立場ならとっくに諦めてるかも。……こっちは出来る限り病院で粘る。お前は鎮魂祭に全力注げ。信じてるぜ」と言い残す。

健吾は電話を切ったあと、暗い社務所の一角で手を合わせるように頭を垂れる。心から神々に祈りを捧げながら、「琴音……待っていてくれ、必ず助ける」と強く呟いた。

10. 夜明け前、決戦への準備

迎えた11月22日の朝。空は雲が低く垂れ込み、雨が降り出しそうな気配さえある。石上神宮の境内は既に多くの神職や巫女が行き交い、最終的な祭事準備を進めていた。

健吾は拝殿へ向かう石段をゆっくり上りながら、昨晚までの剣舞稽古を思い返す。肩や腕は痛みを訴えているが、不思議と心は冷静だった。（まるで、これまでの修行が一つにまとまっているような感覚……）

巫女姿の沙弥香が荷物を抱えつつ駆け寄ってくる。「おはようございます。今朝も早いですね。どうか体調は……？」

健吾は微笑み、「大丈夫。これだけ必死にやってきたんだ。今晚の鎮魂祭に全力を注ぐだけ」

沙弥香は安心したように頷き、「きっと、あなたなら大丈夫。私も精一杯お手伝いします。一緒に破邪の力を……」と言葉をかける。

この後は夕刻に天神社・七座社での例祭が行われ、夜に本社拝殿で本格的な鎮魂祭が始まる。終わる頃には深夜近く。その間に、龍馬が姿を現すかどうか——何も分からないが、確実に激突の予兆が漂っている。

健吾は木剣を握りしめ、心の奥で琴音の顔を思い浮かべた。（絶対に守る……これが俺に課された使命なんだ）

——こうして、決戦の日・鎮魂祭へ向け、最終的な布石がすべて揃った。

石上神宮に渦巻く緊迫感、龍馬が狙う物部の血の断絶、そして琴音の命を繋ぐ一筋の望み。時は夕刻を目指し、物語はクライマックスへ加速していく。誰もが息を詰めて見守るなか、健吾の破邪の力が試される瞬間が近づいていた——。

Chapter 10 石上神宮 鎮魂祭

空気が鋭く冷え込んだ夕刻、石上神宮の境内には、他の季節では味わえない独特の張り詰めた空気が漂っていた。十一月二十二日。待ちに待った——あるいは恐るべき、鎮魂祭が今宵斎行される。

午後五時を少し前に、神職らが総出で準備する様子を見届けていた穂積健吾は、かすかに震える手を自分でも意識せず握りしめる。辺りには低く太陽が沈みかけ、木々の陰影が長く伸びている。肌を刺すような冷気のなか、ご神鶏たちが社殿近くをうろうろしつつも、やがて一羽また一羽と鳴き声を止め始めた。

1. 境内を走る緊張感、夕刻の例祭の始まり

まずは天神社・七座社での例祭が行われる時間が迫っている。境内の奥へ向かうと、ふだんはひっそりしている場所に祭壇が設えられ、淡い雪洞（ぼんぼり）が一对、左右に据えられていた。

石畳を踏むたびに、いままで感じたことのない低い振動が足裏に伝わってくるような気がする。これは祭が呼び寄せる霊気なのか、あるいは自分の心音が乱れているだけなのか——健吾は戸惑いを拭えずにいた。

「……健吾さん、こちらへ」

巫女の物部沙弥香が、静かな声で呼びかける。祭列に加わる神職たちの列が、既に祓所の前で整列を始めている。

健吾は「はい」と短く返事をし、足早にその場へ向かった。五時ちょうどが近づくにつれ、ご神鶏の鳴き声が完全に止み、かわりにどこからともなく得体の知れない鳥の声——まるで怪鳥のような鳴き声が一瞬だけ上空をかすめる。思わず健吾は背筋を震わせた。

祓所では、宮司の物部道忠を先頭に、神職たちが順に修祓を受ける。心身の穢れを祓う儀式で、祝詞と鈴の音が交互に響き、健吾も深く頭を垂れた。

道忠が幣（ぬさ）を高く振り、祓いの言葉を唱えると、柔らかな風が頬をかすめる。参列者一同が微かに息を飲むようにして、静かな結束感を共有する。

2. 天神社・七座社への移動、唐櫃からの神饌

修祓を終えた列は、二手に分かれて天神社・七座社のほうへ進む。あらかじめ両社の中間には祭壇が置かれ、中央には何も飾られていないが、その周囲に一对の雪洞が灯され、ほんのりと暗い境内を照らしている。

佐久間や琴音の叔母・静香など一般参列者は後方で見守る形だ。健吾もその近くの神職エリアへ招かれ、じっと場の空気を感じ取ろうと目を凝らす。

すると、神職が唐櫃（からびつ）を開き、そこから九台の神饌（しんせん）を取り出し始めた。果物や海の幸、野菜、穀物など様々な供物が次々と祭壇に

並べられていく。重々しい静寂のなかで進められるその動作は、ひとつひとつが儀礼の結晶のように見えた。

祝詞が奏上され、玉串拝礼へと流れるとき、健吾の心臓の鼓動がひどく早まり始めるのを自覚する。空気そのものが濃密になっていくようで、視界の隅がうっすらと揺れる感覚があった。

(ここまで張り詰めた祭式、初めてだ……神宮という神域の力なんだろうか。それとも……)

思わず息を呑む健吾の肩を、沙弥香がそっと叩き、微笑で合図する。大丈夫、と言っているかのようだ。健吾は小さく頷き、再び祝詞に耳を傾ける。

撤饌と閉扉を終える頃には、辺りはもう五時半を回っていた。雪洞の灯りだけが闇に浮かび、祭壇が静かに息を呑むように闇へ閉じられていく。周囲の参列者は、神職の合図とともに一礼し、今度は本社拝殿へと移動を開始する。

3. 本社拝殿、鎮魂祭の幕開け

本社拝殿の正面に立つと、そこにはさらに厳かな空気が満ちていた。屋根の下に続く石段を上がり、幣殿（へいでん）の入口を眺めると、一对の結灯台（むすびとうだい）が光を放っている。

宮司以下の神職が拝殿へ進み、神饌を供えるための所作を着々と進める。健吾はその様子を奥の一角から見つめながら、胸の奥に宿った破邪の力が微かに疼くのを感じ取る。まるで「今こそ力を振るうときが来る」と告げられているようだ。

周囲の照明は徐々に落とされ、結灯台のほの暗い明かりだけが拝殿を照らす。木造の梁（はり）が天井高く闇に溶け込み、わずかな衣擦れの音すら大きく感じられるほど静寂が深まっていく。

「大直日神（おおなほびのかみ）……八神の御前にて、ここに魂を鎮め、命を振り起こす儀を執り行わん……」

道忠の祝詞が響くと、巫女たちが低く鈴を鳴らし、幣殿の御簾（みす）がゆ

っくりと巻き上げられた。そこに差し込む結灯台の赤い光が、供えられた神饌や幣帛を幽玄に映し出す。

しん……と拝殿全体が息を呑み、ご神鶏が完全に声を止める。代わりに、まるで天井から奇妙な気配が下りてくるような——見えざる存在が動いているような感触が健吾の肌をかすめる。

「これが、鎮魂……」

小声で洩らした健吾に、隣の沙弥香がごく微細な声で答える。「はい……今、神気が私たちのすぐそばを通っているんです。魂を呼び覚ます‘たまふり’の神業は、古代からここ石上神宮に伝わる秘儀……」

4. 闇に包まれる拝殿、神秘の瞬間

招魂の儀へと進むにつれ、殿内や周囲の照明が一斉に落とされる。闇が拝殿を覆い、結灯台の淡い光だけがかすかな視界を与える。

健吾は呼吸を詰め、暗闇のなかで鼓膜に伝わる衣擦れの音、そして呪言と鈴の音が交錯するのを必死で追おうとする。すると、何か人ならざる気配——いや、神の気配が背後を過ぎるような感覚が走り、身震いが止まらない。

(怖い……でも、すごい……。これが、古代から伝わる鎮魂祭の本質なのか?)

視界がきかない暗闇で、闇の奥に確かに異形の「何か」が存在する。それは畏怖と同時に恍惚にも近い感情を呼び起こし、健吾は喉が乾いていくのを感じる。

さらに巫女の一人が著鈴櫛（しゅれいさかき）を携えて進み出て、参列者を祓い清める儀式が行われる。鈴の音がかすれ、闇の中で霊気が振動しているように感じ、健吾の体は一瞬ふわりと浮くような感覚に襲われた。

「……っ……」

息を吐き、足元を踏みしめる。沙弥香が小さく手を伸ばしてきて、健吾の袖を掴む。「大丈夫ですよ。神が近づいているんです……」

5. 健吾、儀式の中心へ

一連の呪法が進み、祭壇を取り囲むように神職たちが所定の位置へ移動すると、道忠が拝殿の中央へ向き直って声を張る。

「穂積健吾、出でよ。布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）の力をここに示し、破邪の術を行い、鎮魂を助けてくれまいか」

健吾ははっと息を呑み、周囲の神職が道を空ける。これが約束されていた役目とはいえ、実際に呼び出されるとその重みが全身を貫く。

「は……はい、分かりました」

震える声を何とか出し、静かに拝殿の中央へ進む。結灯台の仄暗い光が健吾の姿を映し、周囲の闇がうねるように見える。彼は深く頭を下げ、道忠から授けられた剣形（けんがた）を両手で受け取った。

「あなたが持つ穂積氏×物部氏の血脈が、ここで布都御魂大神の破邪を呼び起こすはず。どうか、琴音さんを救いたいというあなたの純粋な願いを捧げ、邪を祓ってください」

健吾は剣形を握り締めると、胸中で強く強く琴音の姿を思い描く。（頼む……この力で琴音の病を消し去り、あの男の呪詛を跳ね返せるように……）

そのとき、体の奥から熱い感覚が湧き上がり、祝詞の断片が自ずと口をついて出てくる。やがて、巫女たちの鈴音が低くかすれるように揺れ、闇のなかに小さな波紋が広がったかのように感じられた。

6. ご神鶏の鳴き止む不穏、龍馬の乱入

しかし、その瞬間、拝殿の外から何かが侵入してきたような冷たい風が巻き込み、結灯台の炎がぱちぱちと明滅する。

「……何だ、この気配……」

健吾が剣形を抱えたまま背筋を伸ばすと、宮司や沙弥香も不安そうに周囲を

見回す。すると、拝殿の入り口付近が不自然に暗闇に沈み、神職の一人が短い悲鳴を上げた。

いつもなら静かに参道に佇むご神鶏さえ、この気配を感じ取ってか、ピタリと鳴くのを止め、縮こまっているようだった。

その闇の隙間から、黒いコートの男がするすると現れる。姿を見た瞬間、健吾は背筋に電撃が走った。（あの男……！ 石川龍馬、いや、蘇我馬子！）

男はコートの襟を手で軽く整えながら、一步ずつ拝殿のほうへ歩み寄る。目は冷ややかに細められ、口元に得体の知れない笑みを湛えている。

「賑わってるな。まさか本当に‘鎮魂祭’などという古来の呪法が、現代まで残っていたとはね……」

男の声は低く、妙に響いて周囲の空気を震わせる。道忠が鋭く声を上げる。「ここは神域だ。無断で踏み入ることは許されん。立ち去りなさい！」

しかし、男は嘲笑を深めるだけ。「ほう……。物部の血を守るつもりか？ あいにく、そうはさせない。この場こそ絶好の舞台だ。破邪？ 滑稽だな……。俺はそれを砕くために来たんだ」

7. 闇が広がり、社殿が暗黒に沈む

男が懐から紙切れのようなものを取り出し、指先で破るようちぎった瞬間、拝殿に黒い靄（もや）が拡散した。参列していた神職たちは悲鳴を上げ、近くにいた巫女が「いやっ……！」と倒れ込む。

「くそっ……！」

健吾は剣形を握り、祝詞を唱えようとするが、この闇の圧力が想像を絶して重い。まるで呼吸がまともにできないほど、体が押し潰されそうだ。

結灯台の火が不気味に揺れ、拝殿の梁がきしむような音がする。ご神鶏の姿は既に見当たらず、まるで恐怖に怯えるかのように皆が蹲り、暗闇だけが濃度を増していく。

男はふっと笑って、「物部も穂積も、まとめて消し去ってやる……」と囁くように言う。健吾の胸が早鐘を打ち、頭がクラクラする。

「道忠様……このままでは……！」

沙弥香が宮司の方へ駆け寄り、幣（ぬさ）を振りつつ祝詞を試みるが、邪気の勢いが強すぎてか、なかなか押し返せない。

健吾はなんとか踏ん張ろうとするものの、背後から重力がのしかかるような圧迫感に、膝が折れそうになる。

8. 健吾の意志、破邪の光を求めて

「……負けるもんかっ……！」

健吾は剣形を胸の高さで支えながら、ぎりぎりの声で祝詞を叫ぶ。頭には琴音の姿が浮かぶ。病院で死線を彷徨う彼女を救うため、ここで折れるわけにはいかない。

（頼む、応えてくれ……布都御魂大神！）

彼の呼びかけに合わせるように、胸の奥から小さな熱が沸騰する。稽古で感じた“破邪の波動”が、全身を走り抜ける気配がする。

結灯台のか細い灯火が、一瞬だけ強い輝きを放ち、それに反発するように黒い靄がぶわりと広がった。神職たちの悲鳴がこだまするなか、拝殿が限界を超えそうなほど闇に覆われていく。

そして、男——龍馬が満足げに笑い、「この暗黒を超えられるかな？ ふは……」と声を漏らす。その嘲笑が聞こえた瞬間、健吾の心に怒りが燃え上がった。

（邪を断ち切る。絶対に！）

握り締めた剣形が微かに振動し、剣先からきらりと閃く光が走った。

9. 邪気と闘いの予感

突如、闇の中で鈴の音が高く鳴り、宮司の道忠が幣をかざして声を張る。「穂積健吾、今こそ破邪の力を解き放て！ 布都御魂大神の威を示すのだ！」健吾は呼吸を整え、背中から汗をにじませながら剣形を高く掲げた。体を突き抜ける痛みをこらえ、祝詞を最大限の音量で口にする。

暗闇がごうっと揺れ動き、まるで音が振動するように拝殿の柱が軋む。巫女たちがその場に伏せ、神職が何人か倒れ込むなか、健吾はなおも踏みとどまる。

その瞬間、男の瞳が光り、「ふん……破邪など戯言。物部を再興させるわけにはいかん！」と拳を握り締め、さらに黒いオーラを放出した。社殿の奥にいた神職が悲鳴とともに後退し、照明や設備がばちばちと弾ける音を立てる。

闇とわずかな結灯台の光がせめぎ合い、拝殿はまさに混沌の一步手前。健吾は唇を噛み、「ここで退けば、琴音が……俺の大事な人が……！」と奮起する。

男が不穏な声で笑いを上げ、視界がゆがんでいくところで、健吾は剣形を振り下ろしながら叫んだ。

「うおおおお……っ！」

10. 暗闇に沈む社殿

最後の声とともに、拝殿全体が閃光に似たものを放ち、次の瞬間にはさらに深い闇が押し寄せる。ご神鶏の声は完全に消え失せ、ただ邪気と破邪の力がぶつかり合う衝撃音が木霊するばかり。

社殿の外の風がうなり、落ち葉が舞い散る音が微かに聞こえた。呪詛と祝詞とが激しく衝突し、拝殿の灯火は瀬戸際に揺らぐ。健吾は痛みと光に焼かれながら、必死で意識を繋ぎとめる。

（ここで負けたら……すべてが終わる。琴音……死なせない……！）

男の冷たい瞳が闇の奥に光り、健吾の剣形がかすかな聖なる光を灯す。それぞれの力が正面から衝突する刹那、闇に包まれた社殿が深い鳴動を起こし、ま

るで世界が二つに裂けるような感覚が駆け抜けた。

——鎮魂祭が絶頂へ向かうこの瞬間、物語は最終局面を迎えようとしている。

漆黒に沈む拝殿。響き渡る鈴の音、呪詛のうめき、破邪の閃光。そして健吾の必死の雄叫び。

夜の石上神宮で繰り広げられるこの激突は、いままさにクライマックス手前の最大限の緊張を孕み、次の一瞬、すべてが爆発するかのような空気を漂わせていた。

破邪と呪詛が真正面から衝突する夜の闘い。神職の声が途切れ途切れに聞こえ、ご神鶏の鳴き声も消え去ったまま、結灯台の炎だけがかろうじて社殿の暗闇を照らしている。

次の瞬間、闇が激しくうねり、神職たちの悲鳴が重なって響く。健吾の視界が一瞬白く染まり、男の狂気に満ちた笑いが拝殿内を裂いていくのだった——。

Chapter 11 破邪と呪詛の衝突

1. 暗黒の拝殿、弾ける光と闇

拝殿を照らす結灯台（むすびとうだい）の赤い炎は、激しく揺らめいている。祭壇を囲む神職や巫女は悲鳴を上げ、或いは地に伏し、拝殿の柱がぎしりと軋む音がこだまする。

宮司・物部道忠は幣（ぬさ）を手に、必死の祝詞を奏上しながら龍馬の呪詛を食い止めようとするが、その闇は想像を絶するほど濃密だ。まるで夜そのものが意思を持ち、社殿に渦を巻いているかのよう。

「くっ……なぜ、ここまで強い……」

道忠の声が低く苦しげに漏れる。

龍馬は拝殿の闇のなかで薄く笑い、冷たい瞳を健吾へと向けた。

「見せてみろよ、破邪とやらを。俺に通じるかどうか——物部の血も、穂積の血も、一度に潰してくれる！」

その瞬間、闇の塊がドッと押し寄せ、神職の一人が「うあっ！」という悲鳴とともに吹き飛ばされる。拝殿にあった灯火がいくつも一気に弾けるように消え、ただ結灯台の炎が瀕死のようにゆらゆらと揺れているだけになった。

2. 健吾の決断、天十握剣（あめのとつかのつるぎ）の力

穂積健吾は荒れ狂う邪気に抗うように剣形（けんがた）を抱きかかえていた。石上神宮に伝わる布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）の霊威を象徴する神剣の写し。だが、これだけでは龍馬の呪詛には対抗できない。

（もっと、何かが必要だ……。破邪の力を——それを解放しなきゃ）

ふと、道忠が低い声で呼びかけた。

「穂積さん……本当の神剣、“天十握剣（あめのとつかのつるぎ）”の霊威を今こそ……。布都御魂大神と並ぶ、最奥の神剣があなたに力を貸してくれれば……」

天十握剣。大神神社や石上神宮の伝説にも記され、古代の闇を断ち切る神器と言われる神剣だ。いま、その力が必要だと道忠は言う。

健吾は目を凝らす。拝殿の奥、幣殿（へいでん）に隠されているという本物の霊剣の存在。その加護がもし自身に降りてくるなら——龍馬の呪詛を打ち破れるかもしれない。

「道忠様……それは……可能なんですか？」

「ええ、あなたは饒速日命（にぎはやひのみこと）の末裔、そして物部の血と縁を結ぶ者。神はきっと応えてくれる——ですが、その代償は……」

道忠の言葉に、健吾は決意を固める。代償など、いまは構ってられない。琴音を救うため、そしてこの狂気を止めるために、何も惜しまない。

3. ICU の琴音、かすかな意識を取り戻す

一方、夜の奈良市内。大きな総合病院の ICU では、ト部琴音のベッド周りに淡い人工光が降り、心拍モニターが一定のリズムで警告を続けている。

病室の窓の外は真っ暗。時刻は午後十時を回ったあたり。看護師たちの足音が遠ざかり、部屋は静まり返っている。かろうじて生き永らえていた琴音は、ここ数日ほとんど意識不明のままだった。

だが、その鼓動に微かな変化が生まれ、まぶたがピクリと震える。

「……健吾、さん……」

誰にも聞こえないほどの小さな声。瞳がかすかに開き、白い天井がぼやけて映る。頭はぼんやりとしていて、息苦しさもあるが、不思議と胸が温かくなるような感覚がある。

(健吾さん、今……何をしてるの……?)

薄闇のなか、琴音は確信もないのに、強く「頑張っ」という言葉で心を叫んでいた。まるで遠くにいる彼に向けて呼びかければ、届くのではないか——そんな衝動だ。

(あなたが……いま、闇と闘ってる気がする。私……死にたくない。あなたに……会いたい……!)

4. 闇を裂く閃光——天十握剣の啓示

石上神宮・拝殿。道忠が祝詞を高らかに上げると、幣殿の御簾（みす）の向こう側、玉垣の奥からまばゆい光が一筋立ち上るように健吾には見えた。まるで「そこに神剣がある」と言わんばかりに呼びかけてくる。

龍馬の邪気に社殿が軋むなか、健吾は足を踏み出す。だが、闇の波が行く手を阻むように襲いかかり、体が痛みで悲鳴をあげる。

「くっ……おおっ……!」

剣形を頼りに一歩ずつ進もうとしたとき、頭の奥で琴音の声が聞こえたよう

な気がする。遠くかすかな囁きだったが、それが不思議と健吾を奮い立たせた。

（琴音が祈ってくれている……！ ならば、ここで俺は倒れられない）

息を呑み、最後の力で闇を掻き分けるように幣殿へと踏み込む。結灯台の灯りが闇に遮られているが、あの奥に神剣“天十握剣”が安置されているはず。

龍馬が後方から「無駄だ」と嘲笑う声が聞こえる。空気が氷点下より冷たくなり、まるで刃物を突き立てられるかのような殺気が走った。

5. 龍馬＝蘇我馬子、呪詛の最終放出

「物部を滅ぼせなかったせいで、俺たち蘇我氏は滅びたのだ！ 千四百年……この恨み、今こそ晴らす！」

龍馬の低い声が拝殿の闇を切り裂く。呪詛が渦を巻き、まるで黒い竜巻のように激しく旋回しはじめる。神職たちが悲鳴を上げ、倒れた巫女を守ろうとしても、吹き飛ばされるように床を転がる。

龍馬の姿はもはや人間の輪郭というより、濃密な影がコートのような形を取っているだけのようにも見えた。それほど強烈な怨念を抱え、古代から蘇った蘇我馬子の執念が、この瞬間解き放たれているのだ。

「すべてを焼き尽くす……！」

闇の塊がゴウと唸り、結灯台を一瞬で飲み込む。拝殿が暗黒に閉ざされ、道忠の声すらかき消される。

健吾もそれに巻き込まれそうになったが、意地で踏み止まり、幣殿の奥へ腕を伸ばす。そこには今まさに光の匂いを放つ何かがある――。

6. 天十握剣を引き寄せる祝詞

健吾は振り向き、渾身の力で祝詞を叫ぶ。

「――掛けまくも畏き布都御魂大神、並びに……あめのとつかのつるぎの神威

……どうか、俺に力を……！」

その瞬間、幣殿の奥で一閃の輝きが生じる。まるで天から垂れ下がる雷光のような光が、闇を裂いて健吾の手元へ吸い寄せられた。

びりびりと腕に電流が走るような衝撃。健吾の手の中に、限りなく実体に近い“光の剣”が結晶する。――それが“天十握剣（あめのとつかのつるぎ）”の靈威なのだ。

「なん……だ、これは……っ」

強烈な熱量が健吾の体内を駆け巡り、さっきまでの苦痛が嘘のように吹き飛んでいく。しかし同時に、肌が裂けそうなほどの圧力に襲われ、血が逆流するような感触も伴う。

（これが……本物の神剣の力……！）

剣の形をした光が健吾の手に馴染むかのように震え、彼の鼓動と同期していく。遠くで龍馬が「バカな……天十握剣だと……？」と唸った気配を感じる。

7. ICUでの琴音、祈りの昂まり

夜の病院。心電図モニターをチェックしていた看護師が驚いた声を上げる。「脈拍が上がってる……何か別の異常かしら」

琴音は相変わらず目を閉じているが、呼吸が少しだけ力強くなったように見える。意識はまだ混濁しているが、心のなかには強い想いが渦巻いていた。

（――健吾さん。あなたなら……勝てる。絶対に……諦めないで……）

短い夢の中で、琴音は神剣を握る健吾の姿を、ぼんやりと幻視しているかのようだった。割れるような光と闇が拮抗し、彼が必死に戦っているのが見える気がする。

（私……死にたくない。まだあなたと……）

その強い願いが、看護師の目には「異常な脈拍」に映る。しかし琴音の体に宿る魂は、必死の祈りで健吾と呼応していた。

8. 光の剣が闇を断つ——決戦

石上神宮の拝殿で、光の剣を手にした健吾は、龍馬の巨大な闇の渦に対して正面から歩を進める。闇が怒涛のように襲いかかるが、剣がまばゆい閃光を放って邪気を払う。

龍馬が忌々しげに歯を食いしばり、声を上げる。「なぜだ……物部と穂積ごときに、ここまでの力があるなど……！」

健吾は叫ぶように応じる。「お前の呪いは……ここで終わらせる。琴音を苦しめるな！ 蘇我馬子がどうだろうと……関係ないんだ！」

龍馬はさらに憎悪の色を深め、闇を凝縮した球体を作り出して健吾へ投げつける。衝撃波が拝殿を揺らし、天井の梁から埃や木片が舞い落ちる。

しかし、健吾は天十握剣を振りかざし、その邪球を切り裂いてみせた。白い閃光が闇を斬り裂き、龍馬が苦悶の表情を浮かべる。

「ぐっ……おのれ……物部、穂積の血め……！」

拝殿奥では道忠や巫女・沙弥香が必死に祈りを続けている。結灯台の灯りが再び強まり、闇が一時的に後退するが、龍馬の邪気はなおも衰えない。

9. 琴音の祈りが後押しする

同じ時刻、病室の琴音が急に瞳を開いた。浅い呼吸ながら、喉を震わすように言葉を漏らす。

「……がんばって……健吾さん……」

看護師が慌てて呼びかける。「ト部さん、わかりますか？ いま意識が戻ったんですね？ 落ち着いて……！」

だが琴音はその声に応えず、かすかに口を動かし続ける。「……健吾……負けないで……」

不思議と琴音の脈拍は上昇し、血圧も安定の兆しを見せ始める。まるで、遠

く離れたどこかへ想いを届けることに意識を集中しているようだ。

その“祈り”が彼女自身の生命力をも呼び戻し、同時に健吾へと霊的な力を送っている——そう形容するしかない神秘的な現象が、確かに病室で起こっていた。

10. 最終の呪詛、龍馬消滅

拝殿では、激しく衝突していた光と闇が限界を超え、爆発的な衝撃を巻き起こそうとしていた。龍馬は最後の力を振り絞り、周囲の闇を凝縮して巨大な呪詛の塊を作り上げる。

「俺を滅ぼしても、蘇我氏の恨みは絶対に消えない……物部も穂積も、いずれ……！」

圧縮された闇が胎動し、拝殿の床を震わせる。神職たちは抵抗できずに後退するばかり。巫女らも悲鳴を抑え込むように祈り続けるしかない。

「くそっ……負けるか！」

健吾は琴音の声を胸に感じ、天十握剣に神力を込める。剣が白い閃光を増大させ、彼自身も立っているのがやっというほどの熱量に苛まれる。

次の瞬間、龍馬が放った闇の塊と、健吾が放つ破邪の光が正面衝突した。

ばちばちばちっ……！

閃光が闇を砕き、闇が閃光を蝕むように渦を巻く。だが最終的に、光が闇を飲み込み、龍馬の姿が一気に崩れ始めた。

「ぐあっ……あああッ……！」

咆哮をあげる龍馬。黒いコートの輪郭が崩壊し、ただ怨嗟の声とともに闇が霧散していく。邪気は拝殿から吹き飛び、龍馬自身の霊体が宙でかき消されていくように見えた。

「蘇我馬子の無念……ここで、終わるものか……」

最後の呻き声が響き渡り、拝殿には長い静寂が落ちる。闇は一掃され、結灯台の火がチリチリと音を立てて燃え残っていた。

11. 健吾が代償を背負う

勝利の安堵が拝殿を覆う――はずだった。だが、健吾が「っ……」と苦悶の声を上げ、膝を折ってしまう。天十握剣から立ち昇る光が今度は健吾を包み込み、鋭い痛みを注ぎ込んでいるようなのだ。

道忠や沙弥香が慌てて駆け寄る。「穂積さん、しっかり！」

「な、なんだ……苦しい……」

健吾は胸を押さえ、呼吸を乱している。龍馬が消える瞬間に放った呪詛が、健吾の身体へと流れ込んだのだろう。破邪によって相殺しきれなかった“負の遺産”が、彼にまわりついていく。

「穂積さん、まさか……龍馬の呪詛を引き受けてしまったのでは……？」

沙弥香の声は怯え混じりだ。健吾は何とか笑みを作ろうとするが、肺が焼けような痛みで襲われ、声にならない。

（これが……代償。俺は呪いを……背負ったのか……）

拝殿の暗闇の中、天十握剣が光を失い始め、やがて健吾の手の中で小さく消えていく。代わりに、健吾は深い衰弱を全身に感じ取る。視界がぼやけ、頭の奥がぐわんと鳴る。

道忠がふるえる声で巫女たちへ指示を出す。「急いで救護を……！ 早く……！」

12. クライマックスの余韻

祭殿には砕け散った闇の残滓が微かに漂い、神職たちはようやく正気を取り戻し始めている。鎮魂祭は成功し、龍馬＝蘇我馬子の怨念は消滅した。

しかし、その代償として、健吾は新たな呪いをその身に刻まれ、重い衰弱へと転落する予感を抱いていた。苦悶の表情を浮かべながら、沙弥香と道忠に支えられ、「これで……琴音は……救われた、はず、だよな……」と呟く。

「ええ、きっと。あなたの祈りと、この鎮魂の力で、琴音さんの呪いは消えたと思います……」

道忠が震える声で答えると、健吾は安堵の微笑みを浮かべ、意識を手放すように瞼を閉じた。

夜気が拝殿に差し込み、ご神鶏が一声「こっ……」と鳴いた。まるですべてが終わったことを告げる合図のように。その声は澄んでいて、まるで邪気などなかったかのように清々しく響く。

こうして、物部を襲う呪詛は打ち破られ、蘇我馬子の転生体・龍馬は完全に消滅した。

だが、勝利とはいえ、健吾が背負う重い代償——それは新たな悲劇の始まりでもあった。次なる朝、琴音は奇跡的に息を吹き返すが、一方で健吾は深い闇に包まれたまま重い代償を抱えてゆくのだ。

夜の帳（とぼり）が拝殿を覆うなか、残るのは結灯台の弱々しい灯火だけ。

神職たちが破損した装飾や道具を片付け、巫女たちが悲壮な面持ちで健吾を抱え、社殿外へ運び出していく。道忠はその背を見送りながら、静かに幣を床に立てて拝礼した。

「……穂積さん、あなたの犠牲を無駄にはしない。琴音さんが救われるよう、我々も最善を尽くすつもりだ……」

拝殿での激闘は終わった。しかし、傷だらけの勝利が、次なる朝を迎えるまでに新たな運命をもたらそうとしていた。夜空を見上げれば、月は静かに薄い雲に隠れ、ただ冬の冷たい星がちらちらと光を瞬かせるのみ。

そしてこの夜の闇はが、切なく長い影を落としていくのだった。

Chapter 12 刻まれた残酷な寿命

1. 朝焼けに浮かぶ病棟

11月23日の朝。奈良市内の総合病院は白い外壁が朝焼けを受け、うっすらと桃色に染まっている。昨夜、石上神宮での鎮魂祭が終わった頃、救急搬送で運び込まれた穂積健吾は、今まさに集中治療室のベッドで横になっていた。

ICUの窓の向こうは、薄紅の光が差し始めているが、その穏やかな色合いとは裏腹に、室内には無機質な医療機器と警告音がしきりに鳴り響く。まだ夜が明け切らぬ早朝、ナースステーションがちょうど交替の時間を迎えたころだ。

一方、卜部琴音の病室は、同じ病棟の別の階にある。倒れてからずっと意識を失い、昏々と眠りについていた琴音だったが、数時間前から安定した呼吸に変化し始めていた。

「卜部さん……！ 大丈夫ですか？」

朝の巡回に来た看護師が、思わず大声をあげる。胸部のモニター値が急に正常値へ近づき、血圧も体温も――まるで奇跡が起きたように安定しているのだ。

2. 奇跡的な回復、医師の驚愕

しばらくして医師が駆け込み、琴音の目を照らし、脈を測る。彼女はまだ浅い眠りのなかだが、ときおり眉を動かし、かすかな声を漏らしている。

「こんなことが……。あれだけ重篤だった卜部さんが、夜を越えたどころか、数値上は健康体と言ってもおかしくないレベルに戻っている。まるで“呪い”が消えたようだ」

医師は信じられないという顔で呟き、看護師と視線を交わす。ここ数日の状態は、どこからどう見ても絶望的だった。それが一夜にして急転回復など、医学の常識を大きく外れている。

けれど現実には、琴音の血液検査も異常値が下がり始め、呼吸もしっかりしてきた。酸素マスク越しに薄く瞬きする瞳は、まるで生を取り戻すために燃え上がる意志を宿しているかのようだ。

「卜部さん、聞こえますか？ もう少ししたら管を抜いてみましょう……」

医師が優しく声をかけると、琴音は微かに首を横に動かすだけだが、その頬

がわずかに上気しているようにも見える。まるで、彼女の内側から“死の呪い”が拭い去られ、生の力が満ちている。

3. 健吾の病室へ

同じ朝、エレベーターで数階上った先には、健吾が緊急搬送されてきたICUがある。その担当医は、琴音を診ている医師とはまた別の人物——背の高い男がカルテを睨み込んでいる。

「穂積健吾さん……夜中に倒れたと聞きましたが、状況が一変しています。身体の各所に重い衰弱の兆候が見られ、内臓は検査上大きな異常がないのに原因不明……これもまた呪いとかそういうことかね」

医師は険しい表情で独り言のように漏らす。傍らには佐久間和彦が駆けつけてきており、落ち着きを失った様子で医師に問いただしていた。

「先生、本当に治療法はないんですか？ まだ検査結果だって全部揃ってないでしょう」

佐久間の声には焦燥感がにじむ。中学時代からの友人である健吾が、突然こんな形で倒れ、しかも“原因不明”としか説明されない。

「正直、今の医学では説明できない。内臓も脳も、画像上は特別な損傷や腫瘍は見当たらない。それなのに全身状態は急速に衰弱している。あと1年もつかどうか——悪ければ数か月という可能性も捨てきれない」

その言葉に、佐久間は息を詰まらせる。夜が明けたばかりというのに、ICUの空気は重苦しい闇が立ちこめているようだった。

4. 静香の嘆き

さらに数十分後、卜部琴音の叔母・静香が慌てた様子で病棟にやってきた。琴音の回復を聞いて、歓喜の声をあげかけたが、同時に「健吾さんが危険だ」と告げられ、思わず廊下の壁に寄りかかる。

「どうして……こんなことに……。琴音が助かったのは嬉しいのに、今度は

健吾さんが……」

彼女は両手を握りしめ、顔を歪めた。あれだけ苦しんできた琴音の呪いが解けたとしか思えないタイミングなのに、その代償を払うように健吾が急激に衰弱している。

(せっかく琴音が救われたのに、また失うのか——命はこんなにも皮肉で、残酷なのか)

静香はまだ見舞えないICUの扉を眺め、胸を抑える。彼女には遠い昔、母を失い、姉を失い……ト部家の女はみな早世するという絶望がまとわりついていた。ようやく琴音が生き延びるという“奇跡”が起きたのに、今度は健吾がその闇を引き受ける形になるとは。

「なんて……神様はひどいの……」

その嘆きは誰の耳にも届かず、廊下の冷たい空気に溶けていくばかりだった。

5. 琴音の目覚め

午前8時近く。琴音はゆっくりと目を開き、視界いっぱい広がる白い天井をぼんやりと見つめていた。酸素マスクこそ外されていないが、さっきよりはずっと呼吸が楽だ。

「あ……れ、ここ……どこ……」

声はまだかすれている。だが、その意識ははっきりしてきている。医師が「気がつきましたか。もう安心ですよ」と微笑み、看護師が静かに口元のマスクを外してくれる。

「……私、死にそう……だったんですよね……」

琴音はうわごとのように呟く。頭には、激しい胸痛や高熱に苦しんだ記憶が微かに残っている。だが、いまは不思議なくらい身体が軽い。

医師が「ええ、昨夜までは危なかった。でも、何が起きたのか……あなたの病状は急激に好転して、検査上も異常が消えつつあるんです」と説明する。信じ難いが、事実だ。

「健吾さんは……？ あの人は……」

琴音が起き上がろうとすると、看護師が「まだ安静に」と止める。だが彼女は必死に問いかける。「健吾さん……大丈夫なんですよね……？」

静寂が一瞬流れ、医師は言葉を濁すように視線を伏せた。「……落ち着いて聞いてください。健吾さんは、ICU でかなり厳しい状況なんです。今朝ほど、原因不明の衰弱が出て……」

その言葉に、琴音の胸がぎゅっと締め付けられる。せっかく自分が助かったのに、どうして健吾が――頭のなかで何かが崩れていくような感覚がした。

6. 血も涙もない厳しい診断

ほどなくして、佐久間や静香が琴音の病室に顔を出す。佐久間は無理に笑みを作り、「琴音ちゃん、よかったな。生きててくれて……」と声をかけるものの、その目には深い憂いがある。

琴音は唇を震わせたまま、小さく頷く。「ええ……でも……健吾さんが……」

すると静香は瞳を潤ませ、「健吾さんも、なんとか意識はあるらしいけど、医師から『余命1年もつかどうか』って言われて……」

一瞬、病室の空気が止まる。琴音は思わず毛布を握りしめ、「そんな……嘘……」と声をかすれさせた。まだ息苦しい身体で、全身に衝撃が走る。

「医者は、何も分からないって。臓器的な問題がないのに衰弱していくんだと。龍馬とか呪いとか、そんなこと話せないし……俺も何とか手を尽くそうとするけど、正直手詰まりで……」

佐久間の言葉に、琴音は頭を抱えそうになる。物部の呪いが消えたのは事実だ。ならばその呪いはすべて健吾に転じたのだろうか？ 何故、どうして……。

7. 健吾との対面――涙の交錯

昼前、琴音の意識がはっきりしてきたのを確認した医師が特別に許可を出し、短時間だけ車椅子でICUへ行くことが認められた。酸素チューブをつけたまま、看護師の付き添いでエレベーターを使い、琴音は胸を高鳴らせながらICUの重たい扉を開く。

そこには、ベッドに横たわる健吾の姿があった。顔色は青白く、呼吸は荒い。だが微かに瞳を開いていて、琴音が近づくと意識がそちらに向くのが分かる。

「健吾さん……ごめんね、私……」

琴音が声を震わせると、健吾は弱々しく微笑んだ。「何、謝ることなんて……ないさ。むしろ……良かった……生きて……くれて……」

その一言が琴音の心を引き裂く。彼女は涙を抑えられず、「ダメだよ、こんなの……私が助かって、あなたが死ぬなんて……意味、ないよ……」と呟く。呼吸器が苦しくなるほど嗚咽が込み上げる。

健吾は浅い呼吸の合間を縫うように言葉を繋げ、「大丈夫……俺は……大したことない……って……思いたいけど……医者がいろいろうさくてさ……」と苦笑する。

その笑みは痛々しいほど儂いが、琴音の姿を見つめる瞳は幸せに潤んでいるようでもある。「お前が……生きてるなら、俺はそれで……いい……」

8. 二人が選ぶ「一緒に生きる」

ICUでの面会は短く、看護師に促され、琴音は後ろ髪を引かれる思いで車椅子を押されて部屋を出ていく。だが、その後の主治医とのカンファレンスで衝撃的な宣告を受ける。

「このままでは、健吾さんは長くありません。精一杯の治療はするが、今の医学では原因を特定できず……。余命については、あまり期待しないほうがいい」

佐久間が怒りをぶつけるように食い下がっても、医師は首を横に振るばかり。静香は涙で何も言えない。琴音は震える声で「私……あとどれくらい、入院しなきゃいけないんですか？」と問う。

医師は「あなたのほうは、驚くほど回復しているので、しばらく検査をして問題がなければ退院できるでしょう」と目を丸くして答える。しかし、琴音が望む答えはそこではない。

(退院できても……健吾さんがこんな状態じゃ意味がない。一緒にいられなきゃ、何のために生き延びたの……)

やがて佐久間が廊下で決意を固めたように口を開く。「……健吾には病院での治療が必要だけど、もしある程度落ち着いてきたら、奈良で一緒に暮らしてみてはどうだ？ 健吾もト部さんも、入退院しつつ近くに住めれば……残りの時間を一緒に過ごせるかもしれない」

琴音ははっと息を呑む。そして静香は目を伏せながら、「そうね……どうせなら、苦しむ時間だけじゃなくて、少しでも二人の好きな時間を……」と呟く。

9. 切ない誓い

その日の夕刻、医師の判断で、琴音は一時的に自分の病室へ戻ることになった。ベッドに横たわり、点滴を受けながら窓の外の朱い夕焼けを見つめる。

静香が隣の椅子に座り、そっと手を握る。「琴音……あなた、元気になれたのよ。これは奇跡だわ。嬉しいはずなのに、健吾さんが犠牲になったみたいで……本当に辛い。ごめんなさい。私が何かできるなら……」

琴音は涙を拭い、「叔母さんのせいじゃない。ただ、私……健吾さんを救いたい。でも、どうしたらいいか……分からない」と弱い声で応じる。

このまま退院すれば、自分は健康を取り戻していけるかもしれない。でも、健吾は日に日に命を削られていく。医師は首をかしげるばかりで、打つ手なし。

(もし、1年しかないのなら……せめて1年、彼のそばにいたい。どうにか

して、最後の望みを繋ぎたい)

琴音の胸に熱い決意が灯る。自分の命が助かった意味は、彼を見捨てないためにあるのだと思いたい。いや、思わずにはいられない。

10. 佐久間の提案、そして奈良での暮らし

翌日、佐久間が二人の病室を回りながら提案をまとめる。「俺が医療関係者仲間に掛け合って、少しでも健吾を助けられる専門医を探す。だけど一番は、奴が活着ている間に奈良で普通の生活を送ってほしいんだ。琴音ちゃんも、いづれ退院できるんだろう？」

琴音は首を縦に振る。「ええ、医師もそう言っていました。退院後も通院しながら経過観察だけは必要だと……。でも、健吾さんがこの病院を出られるのは、もっと後になりそう……」

佐久間は少し考えてから、「いや、ある程度落ち着けば、あいつも外泊や転院ができるかも。そこは医者に直談判してみる。とにかく、お前たちが一緒にいられるよう、俺が動く。あいつは頑固だから、むしろ琴音ちゃんが傍にいて分かれれば生き延びようとするはずだ」と力強い目で言う。

「……ありがとう、佐久間さん」

琴音は薄く微笑み、「私もできるだけのことをする」と誓う。その言葉には、もうかつての弱々しい怯えはない。彼女は死の運命から解き放たれた今こそ、自分が大切な人を救う番だと思っている。

11. 病室越しの静かな誓い

その夜、健吾の容態はやや落ち着いたが、依然として苦しそうで、意識は半覚半眠の状態が続く。ICUのガラス越しに、琴音は車椅子で来て、健吾の眠る姿をじっと見つめた。

(あなたと……少しでも長く一緒にいられたら、私はどんな未来でも受け止められる。たとえ1年であっても、奇跡を探したい)

心の中でそう叫ぶと、不思議と強い熱が身体を貫く。自分を取り戻した証なのか、琴音の胸にはもう曇りはなかった。

夜勤の看護師が通りかかり、「夜間の面会はもう……」と声をかける。琴音は微笑んで「分かりました、すみません」と静かに病室へ戻ろうとする。

去り際に、ICUのガラス窓の向こうで健吾が一瞬まぶたを開いた気がした。琴音と視線が交わり、それだけで彼の唇がかすかに動く。「……いっしょ……に……」という、消え入るような声。

琴音はハッとして胸を押さえ、涙をこぼす。もう言葉は聞こえなくても、心だけは確かに通じ合っていると思えた。

12. 切ない願いと新たな日々

こうして翌朝には、琴音が正式に退院の手続きを取る運びとなった。医師からは「本当に奇跡としか言えない」「どういう神業を？」と首をかしげられるばかりだが、彼女は曖昧に微笑むだけ。「いろんな人の祈りと、神様のお導きがあったんです」とだけ答える。

佐久間や静香も、「健吾が回復する見込みは薄いけど、彼のために奈良に拠点を置き、少しでも二人の時間を増やそう」と話し合う。病院に交渉して、健吾の症状が落ち着けば外泊やリハビリ入院を検討できる余地はあるかもしれない。

そして琴音自身も、自分の住まいをト部家から健吾の近くへ移し、看病や食事の手伝いができるように考え始めていた。

(…そんなに長くはない時間かもしれない。それでも、彼と一緒に歩めるのなら、それが私の生きる意味…)

かくして、鎮魂祭で呪いが消えた琴音と、呪いを引き受けた健吾の逆転した命の行方が、切なくも愛おしい形で交わっていかうとしていた。

晴れわたる奈良の空には、淡い雲がゆるやかに流れている。秋の名残が薫る町並みが、やがて冬支度に入ろうとしていた。だが琴音の心には静かな決意の

炎が宿っている——自分は、もう死への恐怖に縛られない。大切な人を支え抜くために生きていくのだ。

そしてこの物語は、あと一步で終焉を迎えるわけではない。傷だらけの勝利の次に待つのは、更なる試練と、そこから生まれる可能性だった。

——そう、まだ奇跡は終わっていない。琴音は退院したその足で、車椅子に乗ったまま窓から見える景色をじっと見つめ、「待っててね、健吾さん。今度は、私があなただけを助ける番」と小さくつぶやく。

潤んだ瞳には、これから訪れる冬の気配が映り込んでいた。いつか桜咲く季節まで、彼が生き延びることを心から願いながら——。

Chapter 13 大いなる神の奇跡

1. 病室に漂う絶望の夜

奈良市内の総合病院——夜の静寂に包まれた廊下は、わずかな照明が床に長い影を落としている。時刻は午後十時を過ぎ、見舞い客もいない。カーテンの隙間からは、点在する街灯のオレンジ色が滲んで見えるだけだ。

集中治療室（ICU）の奥、モニターの警告音が断続的に鳴り響くなか、穂積健吾の容態は刻々と深刻さを増していた。医師たちが血液検査や酸素濃度を必死に確認しているが、原因不明の衰弱は止まらない。

「……今夜が峠でしょう」

主治医が苦い顔で呟き、廊下に控えている佐久間やト部静香へ向けて断腸の思いで告げる。「残念ですが……手の施しようがありません。覚悟を……」

「嘘……そんな……」

静香は壁に手をつき、顔を伏せる。琴音の呪いが解かれた代わりに、健吾がその宿命を引き受けてしまったかのような展開。ほんの数日前までは歩けるほ

どに回復していたのに、今や命が危うい。

一方で佐久間は荒ぶる感情を抑え込むように拳を握り、「医療データの範囲外なら、他の可能性を探すまでだ……」と低く呟くが、その声には焦りが滲んでいる。時間がないという現実だけが、冷酷に二人を追い詰めていた。

2. 琴音の決意

一方、卜部琴音は同じ病院の一般病棟で、ようやく体調を取り戻し、医師の許可を得て簡単な外出が可能になっていた。だが、その目に映るのは、健吾が死の淵にいるという情報ばかり。

「……おかしい……絶対に、こんなの納得できない……」

車椅子で廊下を進みながら、琴音は唇を噛む。わずかな距離を移動するだけでもまだ息が切れるが、それ以上に胸の内に煮え立つ思いがあった。

「健吾さん、死んじゃいやだ……。私が救われて、あなたが消えてしまうなんて、そんなの……」

荒れ狂う感情を抑えきれず、背中を丸める琴音。看護師や知人が「大丈夫？」と声をかけるが、彼女は押し殺すように首を振る。

(何か、まだできることがあるはず。私はもう“呪い”の枷から解放された。じゃあ、今度は大切な人を救うために、何かできないの……?)

そのとき、琴音の脳裏をふとよぎるのが、三輪山を神体とする大神神社（おみわじんじゃ）の存在。先日の鎮魂祭は石上神宮だったが、大神神社も古くから数々の奇跡譚を持ち、神秘に満ちた社として名高い。そういえば、以前に健吾と三輪山の麓を訪れたとき、あの大物主神（おおものぬしのかみ）の不思議な力を感じた記憶がある。

(三輪山の夜間登拝はできない。でも、拝殿なら……今の私ならタクシーで行けるかもしれない……)

3. タクシーで大神神社へ

午前零時近く。琴音は佐久間に「もう少し健吾さんを看着て……私、出かける」と言い残して病院を出た。夜間のタクシー乗り場から車に乗り込み、「大神神社まで……お願いします」と告げる。

運転手は怪訝そうに「こんな時間に参拝ですか？」と尋ねるが、琴音は必死に笑顔を作る。「すみません、どうしても……祈りたいことがあるんです」

車の窓外には、深い夜を照らす街灯の列。闇に溶けた古都の風景がかすかに浮かび、タクシーは桜井市の三輪方面へと向かっていく。あたりに街の灯りが少なくなり、山の影がわずかにシルエットを見せ始める頃、車は大神神社の二の鳥居前の駐車場へ滑り込んだ。

夜の大神神社は、昼間の観光客で賑わう姿とは打って変わって、静まり返っている。まばらな街灯が鳥居の輪郭をぼんやり浮かび上がらせ、闇の奥へと通じる参道が一段と神秘的に見える。

タクシーの運転手が「夜間は閉鎖されてますよ」と声をかけると、琴音は「拝殿までは行けるはず……」と答える。足を引きずるようにして車から降りると、コートの襟を立てて冷たい空気に耐えながら、社頭へと進んだ。

4. 警備員とのやりとり

灯りのほとんどない参道を数十メートル歩くと、夜間巡回の警備員らしき男性が懐中電灯を手に立っていた。

「すみません、夜間は原則として神社の奥へは……」

警備員はやや硬い表情で琴音を制止するが、琴音はその足元に崩れ落ちるように膝をつき、「お願いします、どうか少しだけ拝殿に……私は、大切な人を救いたいんです……」と声を震わせる。

普段なら絶対に許可されない深夜参拝だが、琴音の切羽詰まった様子に警備員は言葉を失う。しばしの沈黙。参道を吹き抜ける冷たい風が落ち葉をかすかに巻き上げる音だけが響いた。

「……そこまで言うなら、拝殿前で軽くお参りするくらいなら……ただし、奥へは絶対に入らないでください」

警備員の低い声に、琴音は涙目で頭を下げる。「ありがとうございます……本当に、すみません……！」

こうして琴音は夜の闇のなか、三の鳥居をくぐり、わずかな灯籠が並ぶ参道をゆっくり進んでいった。周囲には人氣がなく、闇の奥に三輪山の気配だけが潜んでいる。

5. 夜闇の拝殿、必死の祈り

石段を上がって、拝殿の前へ辿り着くころには、琴音の呼吸は苦しく、心臓が波打つほどになっていた。昼間でも厳粛な空気を感じるこの場が、深夜には一層靈気を放っているように思える。

木造りの拝殿は闇に溶け込み、かすかな月明かりと社頭の提灯が辛うじて正面を映し出している。琴音は冷え切った石畳の上にひざまずき、合わせた手を震わせた。

「……大物主神さま……どうか……どうか、健吾さんを……助けてください……」

声が上がらず、涙がぽたぽたと落ちる。かつて三輪山の麓を訪れたとき、感じた畏怖と慈悲が混ざった感覚を思い出す。山そのものが神である——まさにこの場所にこそ、彼を救う力が宿っているのだと信じたかった。

「彼は……私のために呪いを引き受けてしまった……。私を生かすために……だから……」

震える唇から溢れ出る言葉は、もはや祈りというより懇願だ。肩を上下に揺らし、息が止まりそうなほどに絞り出す。

周囲には夜の静寂しかない。警備員も遠巻きに見守るだけで、琴音の泣き声が拝殿に低く響いている。三輪山の闇は深く、どこまでも吸い込むように彼女の声を呑み込んでいるかのようだ。

6. お百度…焦燥の足取り

琴音の胸にふと浮かんだのは、「お百度参り」という言葉。大神神社の本殿前には、お百度石が左右に設置されている。琴音は身体を押し起こし、もう一度拝礼すると、社殿の右と左にある二つの石を見回した。

「……あの人を救いたい。だったら、私にできることは何だってやる」

そう呟き、琴音はふらつく足でお百度石へと歩いていく。辺りはほとんど闇だが、提灯の微光がかすかに道筋を照らしていた。

一度、拝殿前まで歩いて祈り、そこから戻ってはもう一方の石に触れる——そんな動作を繰り返す。夜風が肌を切り裂くように冷たく、息が白く浮かび上がる。だが琴音は痛みを意識するよりも、「健吾さんを救う」という一心に駆られていた。

(こんな小さな行為で何になるかなんて分からない。でも、祈らずにいられない……！)

膝が笑うほど疲労が蓄積しても、彼女は何度も何度も往復を続けた。狭い石畳の上で転びそうになりながら、それでも必死に祈りの言葉を重ねる。

7. 病室での急変——奇跡の兆し

その頃、奈良市の病院。深夜のナースステーションに警告音が鳴り響き、担当医師と看護師が慌ただしく健吾のICUに駆け込んだ。

「心拍が乱れている……呼吸もかなり不安定だ」

モニター画面には、不規則な波形が映し出され、医師が「もう呼吸器の調整を最大限に……」と叫ぶ。佐久間は廊下で顔面蒼白のまま、扉の向こうのやり取りを固唾を呑んで見守るしかない。

看護師が酸素濃度を上げると、健吾の身体がビクリと痙攣する。もう意識はほとんどないように見えるが、眉間に深い苦悶の皺が寄り、その口は何かを言おうとしているかのように震えている。

「くっ……間に合わないのか……」

医師の声が絶望に近い響きを帯びた、その瞬間——モニターの波形が急激に

沈んだ。心電図がフラットになる寸前、健吾の胸が大きく上下して、まるで最後の呼吸を求めるかのように口を開く。

だが、そこで終わらなかった。モニターが一瞬だけ点滅し、再び心拍がわずかに高まったのだ。

「……え……？ どういうことだ……」

医師は眼を疑う。先ほどまでの危篤状態が嘘のように、健吾の血圧や呼吸が安定し始めた。まるで見えない力が彼の死の底から引き上げているかのように。

「先生……奇跡、ですか……」

看護師が頬を強張らせつつも、どこか興奮した声を漏らす。佐久間が廊下に駆け寄り、「どうなんだ、助かるのか？」と詰め寄ると、医師は「……わからない、だが、こんなことは医学的に説明がつかない」と声を震わせた。

8. 拝殿前、最後の祈り

一方そのころ、琴音の身体は既に限界を超えていた。お百度参りを何度も繰り返し、足首が悲鳴を上げるたびに石畳に倒れ込みそうになる。吐息は白く、視界が霞んできた。

（もう無理……私も倒れそう……でも、諦めるわけにはいかない……！）

最後の力を振り絞り、拝殿の正面へ戻ると、琴音は両手を合わせて頭を垂れる。頬を伝う涙が冷たい石畳に溶け落ち、コートの裾が埃と湿気を含んでいた。警備員が遠巻きに「大丈夫か」と声をかけるが、彼女は振り返ることなく、ただ祈り続ける。

「健吾さん……死なないで……神様、大物主神様……お願い……。どうか、奇跡を……」

何度も繰り返すうちに、まるで自分の鼓動さえ神社の闇に吸い込まれていくような錯覚を覚える。それでも琴音は祈ることを止めない。

——そのとき、急に胸が熱くなり、肺が深く息を吸い込んだ。まるで誰かが

近づいてきたかのように、首筋にぞくりとした感覚が走る。背後には何もいないはずなのに、神々の息吹がすぐ傍を通るような気配がした。

9. 病室で目を開く健吾

時刻は深夜二時を回ったころ。病院のICUでは、奇跡的に安定を示した健吾のモニター値が、さらに改善していった。さっきまでの絶望が嘘のように、血圧と心拍が正常範囲に近づき、呼吸も落ち着いてきたのだ。

「何という……あり得ない……」

医師は思わず呆然と立ちつくす。看護師たちも震える声で「助かったんですか……？」と囁き合う。佐久間も力が抜けたように壁にもたれ、「マジかよ……」と唇を噛んだ。

すると、健吾がうっすらとまぶたを開ける。視線が宙を彷徨ったのち、ぼんやりと医師や看護師を捉えるように瞬きをする。

「……俺、死んだかと思った……」

か細い声は、しかし確かに言葉として響いている。医師が慌てて駆け寄り、「分かりますか、穂積さん？　ここがどこか……？」と尋ねると、健吾は「はい……病院、ですよね……」と答える。頬にほんの少し血色が戻り始めていた。

10. その知らせを受けて

「健吾さんの容態が急に安定してきたみたい……！」

駐車場で待っていたタクシー運転手が、携帯でやり取りをしていた警備員からそんな情報をもたらした。ちょうど拝殿前から戻りかけていた琴音は、その報せにぎょっと息を呑む。

「……助かった……？　本当に……？」

緩んだ力が一気に抜け、座り込んだ琴音を警備員が支える。「大丈夫か、ど

うか病院へ戻ってあげてください」と促され、琴音は震える足をなんとか踏ん張って立ち上がる。

「ありがとうございます……本当に……」

琴音は拝殿へ最後の一礼を捧げる。闇の向こうに三輪山が静かにそびえ、大物主神の存在がそこに確かにあるように感じられた。胸の奥で、鼓動が高鳴る。

(健吾さん……待ってて。私、今すぐ戻るから……！)

11. 病室に戻る琴音

再びタクシーに乗り込み、夜の国道を揺られて病院へ引き返す。琴音は座席で震えを抑えきれず、ハンカチで顔を押しさえる。涙が溢れそうになるたび、運転手は気を使って黙ってしてくれた。

病院に着いたのは午前三時近く。夜勤の看護師に声をかけられるより早く、琴音は病棟のエレベーターを呼び、ICUフロアへ向かう。

ドアが開き、廊下に飛び出すと、そこに佐久間が待っていた。「琴音ちゃん！」

「健吾さんは？ 生きてるの？」

息せき切って問いかける琴音に、佐久間は大きく頷く。「ああ、奇跡みたいに落ち着いてる。医者も原因は分からないけど、今は安定して眠ってる。とにかく助かったんだ」

琴音の目に再び大粒の涙がこぼれ落ちる。「よかった……よかった……！」と何度も呟き、佐久間の腕に支えられながらICUのガラス越しに健吾のベッドを見つめた。

12. 二人の再会、劇的な救済

看護師が「面会は短時間なら……」と言って扉を開けてくれる。琴音はふらつきながら健吾の寝顔へ近づき、そっと手を伸ばした。

健吾は薄く目を開け、「……琴音か……」と震える声を出す。まだ呼吸は機械にサポートされているが、そこには確かな意識があった。

「ごめんね、こんな時間に……大丈夫なの？ 本当に……」

琴音は声を詰まらせ、健吾の手を両手で包む。手のひらは冷たいが、指先がわずかに握り返してくれる。その感触が琴音の心をいっそう震わせる。

「……なんだか……助かったみたい……死にかけたのに、急に息が入って……」

健吾は力なく笑い、琴音は涙声で「よかった、本当によかった……」と繰り返す。三輪山の参道で祈ったあの時、何かが通じたのだろうか。いまの健吾は、確かに生者の温度を保っている。

医師が「一応しばらく検査が必要です。すぐに退院とはいかないが、危険な山は越えた」と告げると、琴音は深く息をつき安堵する。まるで全身の力が抜け、膝が崩れそうだが、ここにあるのは希望の息吹だ。

——こうして二人は、絶望の淵から奇跡によって救われた。

呪いの刻印は、大物主神への祈りと琴音の執念によって解かれ、健吾の命は失われずに済んだ。深い夜を乗り越え、病室の朝へ向けて、また一筋の光が射し始めたのだ。

夜明け前、琴音はホッとしたように病室の窓から外を見る。空にはまだ星が瞬いているが、東の端からはうっすらと光が差しかけていた。まるで新たな時代を告げる白々とした光。

(もうこの命を二度と失わせない……私たちは、呪いに勝ったんだ)

琴音の瞳に涙が浮かぶ。苦しんでいた健吾の胸には、確かに安らかな呼吸が広がっている。神秘と祈り、そして固い絆が起こした奇跡——それを胸いっぱい受け止め、琴音は小さく笑みをこぼす。

次の朝が、今までで一番、優しく輝く朝になるだろう。

Epilogue 新しき朝

1. 春の光に染まる奈良の街

季節は桜の花びらが散り終え、若緑の葉が伸びやかに息吹き始める頃。奈良の町は、暖かな春風をまといながら、観光客や鹿たちで相変わらず賑わいをみせている。

だが、その賑わいの少し外れにある静かな住宅街に、まるで別の世界が広がるような穏やかさがあつた。そこに二人で借りた小さなアパートがあり、玄関先に飾られた鉢植えの花が柔らかな陽を浴びて揺れている。

扉を開け放つと、外から鶯（うぐいす）の澄んだ声がしきりに聞こえてきた。穂積健吾はアパートの縁側に腰を下ろし、その声に耳を傾ける。

「……すっかり春だなあ。こんな暖かな朝を迎えられるなんて、数ヶ月前には考えられなかった」

健吾は軽く深呼吸し、袖をたくし上げる。かつて死の淵にいた身体は、今では嘘のように回復し、頬には健康的な血色が戻っている。医師たちも首をひねるほどの“完全回復”だったが、本人には奇跡の原因など明白だ。

「お待たせ、朝ごはん用意できたよ」

部屋の奥から、卜部琴音が笑みを浮かべて顔を出す。白いエプロンの端をつまみ、いかにも家庭的な雰囲気醸し出している。まだ季節の変わり目で朝晩は冷えるが、彼女の表情は不思議なほど柔らかく穏やかだ。

「いただきまーす、と」

健吾は、琴音が運んできた味噌汁の湯気に顔をほころばせる。かつて病院で死の恐怖を味わったことを思えば、こうして朝ごはんを囲むだけで胸がいっぱいになる。

2. 二人の新生活と奈良の風景

食事を終えたあと、二人は散歩を兼ねて奈良公園へ足を運ぶ。桜は散ったものの、浅緑の若葉が風にそよぎ、所々に遅咲きの花が点在している。観光客が鹿せんべいを差し出す様子を微笑ましく眺めながら、健吾と琴音はゆっくりと歩を進めた。

「ね、鹿を見ても平気になったね。最初はちょっと怖がってたのに」

「うん、だいぶ慣れちゃった。あの子たち、やっぱり可愛いところあるよね」

琴音は微笑み、鹿の一头が鼻先を向けてくると、せんべいを少し与える。すると鹿は満足そうに首を振り、軽い足取りで去っていく。

――ふとした日常。しかし、二人にとっては奇跡の延長線にある新しい生活だ。琴音の身体は呪いから解放され、本来の活力を取り戻した。健吾もまた、余命一年と宣告された衝撃から完全に解放されている。まるで長い悪夢が嘘のような平穏が、ここには広がっていた。

3. 石上神宮への参拝と、懐かしい顔

午後になって、二人はタクシーで石上神宮へと向かった。深い緑に囲まれた社域には、例年よりも早い木々の芽吹きが進み、巫女たちが境内を清掃する姿が見える。

拝殿で手を合わせてから奥へ進むと、宮司の物部道忠がちょうど社務所の縁側にいた。健吾と琴音の姿を認めるや、柔らかな笑みを湛えて立ち上がる。

「これはこれは、お久しぶりです。おふたりとも、お元気そうで何より」

「はい、おかげさまで……。やっと報告に来られました。呪いはすっかり消えて、こうして歩けるようになりました」

琴音が深々と礼をすると、道忠は幣（ぬさ）を軽く振って清めの動作をし、「それは何より。神々もさぞ喜んでおられるでしょう」と神妙な笑みを浮かべる。

そこへ巫女の物部沙弥香も姿を見せる。「おお、健吾さん。身体のほうはいかがですか？」

「もう、全然問題なく……。心配かけました。あのときは鎮魂祭で色々とお世

話になりました」

穏やかな空気の中、沙弥香はほっと胸を撫で下ろす。「本当によかった。あの夜を思うと、まるで遠い昔のことのようです」

実際、あの夜の戦いは壮絶だった。蘇我馬子の転生体による呪詛と破邪の衝突。しかし、いま石上神宮には新緑の香りが満ち、まるで別世界のように平和が流れている。

4. 大神神社への感謝

石上神宮を後にしたふたりは、さらにタクシーを乗り継いで大神神社へ。三輪山の麓、春の日差しに照らされる大鳥居を見上げ、琴音は微かに胸を震わせる。

「この夜参りが、健吾さんを救ったんだよね……」

思い出すのは冬の深夜、血を吐くように祈った光景。いまこの場に立つと、あ那时的絶望と祈りが混然となってこみ上げる。

健吾は琴音の肩をそっと抱く。「あんな無茶な行動をして……でも、ありがとう。あの祈りがなければ俺は……ここにいなかったかも」

琴音は小さく笑い、「こちらこそ、あなたが呪いを受け止めてくれたから、今の私がある……。神様には、一生頭が上がらないね」と返す。

拝殿に進み、二人は静かに手を合わせる。桜井市の山里には柔らかな風が吹き、そろそろ田畑の色も新緑に染まり始める。うっすらと若葉の香りが漂い、鹿もまばらに境内を闊歩している。

(あの日、命の綱を繋いでくれた神社。今度は、この人生をしっかりと生きていくための感謝を伝える――)

琴音は眼を閉じて心でそう呟き、隣の健吾の手をぎゅっと握った。

5. 佐久間の登場

参拝を終えて境内を出ようとする、ふいに後ろから「おーい！」という声が響いた。振り返れば、コート姿の佐久間が手を振って走り寄ってくる。

「やっと見つけたぜ。お前ら、元気になったそうじゃないか？」

健吾が苦笑しつつ「来るなら言えよ」と返すと、佐久間は肩をすくめてにやにや笑う。「いやー、ちょっと取材っていうか、俺の友達がこっちで仕事しててさ。ついでに様子を見に来たわけ。……ってか、お前らすっかりラブラブだな。見てるこっちが恥ずかしいぜ」

琴音は赤面しながらも笑い、「佐久間さん、いろいろ迷惑かけちゃいました。ごめんなさい、でもありがとう」と頭を下げる。佐久間は照れ隠しに咳払いをし、「ま、まあ、二人が元気なら何より」と目をそらした。

相変わらずの軽妙さが、二人のほっとした空気をさらに和やかにしてくれる。あの辛かった日々を知る佐久間だからこそ、いま一緒に笑い合えることが、かけがえのない幸せだ。

6. 新たな命の兆し

その日の夕暮れ、アパートに戻った琴音は、少し胸のあたりに違和感を覚えた。妙にだるさがあり、食後に突然眠気が襲ってくるが続いている。いつもなら「疲れがたまってるのかな」で済ませるが、どうもそれだけではなさそうだ。

健吾が「大丈夫か？ こっちに来て休めよ」と声をかけると、琴音は微妙に視線を逸らし、「うん、ちょっと休む……」とクッションを抱えて座り込む。頬が薄く染まり、どこか落ち着かない表情だ。

(もしかして……私、妊娠……してるのかな？)

漠然と頭をよぎるその可能性に、胸がドキリと高鳴る。昔なら、呪いのせいでも子を授かる前に命を落とすかもしれない、と絶望していたのに。今の自分は違う。健吾と共に生きる日々が当たり前に行くことを信じられている。

「あの、健吾さん……」

そっと口を開こうとすると、健吾は「どうした？ 顔赤いぞ」と心配するよ

うに近づいてくる。琴音は慌てて笑みを作り、「ごめん、ちょっと疲れたかも。明日、近所のクリニック行ってみようかな」とだけ答えた。

心の中に芽生え始めた小さな予感——それが事実なら、二人の未来はさらに新しい段階へ突き進むはずだ。

7. 呪いのない未来へ

翌朝、琴音は静かに目を覚まし、窓から差し込む春の日差しを浴びながら思う。（本当に、私は生きてる。そして隣には健吾さんがいる。呪いなんてもうどこにもない。）

布団から抜け出すと、廊下で支度をする健吾の後ろ姿が目に入り、じわっと胸が温かくなる。あの夜の大神神社の祈りを思い返せば、奇跡の連続だったとしか言いようがない。

「琴音、今日はどうする？ 病院行くなら一緒に行くし、俺は午後から佐久間と合流だけど……」

振り向いた健吾の瞳は、昔よりも力強い輝きを宿している。かつて「余命一年」と言われた面影など、いまは微塵も感じられない。

「うん、クリニックで検査してもらおう。結果が分かったら……そのときは、笑って報告するね」

琴音は微笑んで答え、互いの小指をそっと絡ませる。まるで子どもみたいなやり取りだけれど、苦しかった過去を乗り越えた今だからこそ、その柔らかい触れ合いが嬉しい。

8. 奈良の春、循環する生命

数日後、石上神宮の境内へ再び参拝に訪れた二人は、宮司の道忠や巫女の沙弥香に「実は、琴音が妊娠かもしれない」とほのめかした。道忠は目を見開き、即座に笑顔で祝福する。

「それはおめでとうございます。この神宮の鎮魂祭に救われた命が、次なる

生命を宿そうというのですね。まさに神のご加護でしょう」

沙弥香も「本当にすごい……」と感嘆しながら、「いつでも安産祈願にいらしてくださいね」と微笑む。まだ確定診断前ではあるものの、祝福の言葉に琴音の胸はじんと熱くなる。

やがて、社務所の奥で巫女たちがお祓いの準備を始めるのを見届けてから、二人は拝殿にお参りする。健吾が手を合わせ、「俺たち、ここで出会った運命を精一杯生きていきます」と心の中で誓う。琴音も並んで深く頭を下げ、（まだ見ぬ子を、この世界に迎えるときが来るのかな）と想像して頬を染める。

9. 鹿と鶯の声、そして新しき朝

アパートに戻る帰り道、奈良公園の草地を通りかかると、鹿の親子がそろりと寄ってくる。赤ちゃん鹿の愛らしい姿が、まるで二人を祝福するように鼻をくんくん鳴らす。琴音は微笑んで手を伸ばし、健吾も隣でそっとその様子を見守る。

鶯の声がまた聞こえてきた。透き通った高音が、若葉の枝に小さく震えながら響いている。春の暖かい風が二人の髪をかすめて通り過ぎ、青空の下で草の香りがゆらめく。

「ねえ、健吾さん……私、もっといろいろなところに行ってみたいな。奈良のこと、まだまだ知らないことも多いし」

「うん。鹿がいるところもいいけど、今度はもう少し遠出する？ せっかく時間もあるし、きっと佐久間も付き合ってくれそうだ」

軽くからかうように笑い合い、手を繋いで足並みを揃える。人々のざわめきも鹿の鳴き声も、すべてが二人の未来を祝うコーラスのように聞こえる。

10. 夜明けのような希望を抱いて

それから更に数日が経ち、琴音はクリニックで正式に「おめでたですね」と告げられた。笑顔で家に帰る彼女の姿に、健吾は何よりも喜び、二人でささやかな祝杯ならぬジュースで乾杯した。

(私たちは、もう二度と呪いに囚われない。新しい命と一緒に守っていくんだ。)

琴音は静かにそう誓い、健吾も彼女の手を重ねて握りしめる。かつては死の運命に苦しめられ、二人とも命を落としかけた。でも、その夜明けはすでに訪れている。

朝日が昇るたびに、春の日差しが部屋を満たし、鶯のさえずりが窓の外を彩る。長かった暗闇と呪いはとうに払われ、今は新たな芽吹きと希望が目の前に広がっていた。

石上神宮や大神神社での出来事は、二人にとって奇跡の物語そのものだ。でも、その奇跡を真に受け止めることで、変わらない日常こそが最も尊いことだと知った。

こうして、琴音と健吾は奈良の地で穏やかな生活を積み重ねていく。

やがて生まれてくる小さな命を抱え、神々に見守られながら、きっとこの先も手を携えて歩いていこう。鹿たちが草を食む公園の風景も、鶯がさえずる春の山々も、すべてが新しい人生を祝福する舞台となる。

深い夜を越え、千四百年の因縁を乗り越えた彼らには、もう止めるものなど何もない。

ふたりが見上げる空は、澄みきった青と白い雲が広がり、それがまるで前途を約束するように優しく輝いていた。

——終わり——